

明治大学大学院政治経済学研究科

2015年度

博士学位請求論文

中国における一人っ子家族の親子関係に関する研究

**A Study of Parent-Child Relationships of the One-Child Family
in China**

学位請求者 政治学専攻

劉 佳

目 次

序 章

第1節 問題提起・研究の目的・本論文の構成

第2節 先行研究

1 文献

2 到達点と限界

第3節 本論文の研究方法

1 本論文の資料

2 基本概念と調査地の概況

第一章 一人っ子家族における親子関係の実態Ⅰ

第1節 一人っ子の生活水準とその実態

1 親にとっての高い消費

2 子の高い消費に対する親の悩み

3 親のすねかじり

第2節 親世代の競争に巻き込まれている一人っ子たち

1 消費の競争

2 子どもへの過剰な期待

第二章 一人っ子家族における親子関係の実態Ⅱ

第1節 一人っ子の優越感と危機感

1 一人っ子の優越感

2 潜在的危機感

第2節 親子間の対立

1 結婚・出産をめぐる家族関係の対立

2 二世代の生活習慣のトラブル

3 親子関係からみる都市と農村

第3節 自立できない子と子離れできない親

1 自立できない子

2 子離れできない親

(1) 既婚の子と緊密な生活上の補助関係

(2) 退職後の生きがいとしての孫

(3) 自己中心的な親たち

第三章 一人っ子家族の親子関係の背景

第1節 一人っ子政策の実施

1 一人っ子政策の概要

2 一人っ子政策の形成過程

(1) 一人っ子政策の草創期

(2) 一人っ子政策の形成期

3 一人っ子政策の正機能と逆機能

(1) 一人っ子政策の正機能

(2) 一人っ子政策の逆機能

第2節 文化大革命

1 「文革両親」である一人っ子の親たち

2 「下放運動」

3 一人っ子の親たちの間の競争

第3節 社会の富裕化

1 豊かな社会の到来

2 豊かな社会のなかの個人

3 豊かさがもたらした親のすねかじり

第4節 メンツ文化の影響

第四章 親子関係の変化からいえるもの

第1節 親にとっての子どもの価値の転換

第2節 幸福の表現形態の多様化

第3節 儒教文化の衰退の加速

第4節 四つの偶然性の歴史的な「遭遇」

- 1 突然に実施される一人っ子政策
- 2 急速な豊かな社会の到来
- 3 これまでになかった「文革両親」
- 4 社会主義から資本主義への急激な移行

参考文献

付録 主な調査対象の概要

序 章

第 1 節 問題提起・研究の目的・本論文の構成

20 世紀、中国社会に大きな変化をもたらしたものは「改革開放」政策と人口抑制政策であった。人口抑制政策とは 1979 年以降、中国で実施された。一組の夫婦に子ども一人を提唱するという「一人っ子政策」のことである。一人っ子政策は一人っ子という集団を形成させたと同時に、一人っ子家族という新しい家族形態も形成させた。一人っ子の集団は、現代中国における社会発展の多くの特徴を凝縮した集団の一つとなっている。一人っ子家族を研究することによって、現代中国社会への理解を深めることができる。それ以外にも、筆者自身が一人っ子であるため、一人っ子家族を研究することに強い関心を持っている。これは自己理解に役立つと考えるからである。

筆者は中国における一人っ子家族に関する研究課題を選んだが、博士論文で親子関係に注目する理由は二つある。一つは、人口抑制政策によって中国家族の家族構造と家族内の人間関係が変化したことである。一人っ子政策は当時の高い人口出生率を有効に抑制し、国民の生活レベルの向上に貢献した。しかし、多くの社会問題も引き起こした。比較的に目立つ問題の一つは、一人っ子家族の親子関係の変化である。二つ目としては、これまで、一人っ子家族に関して、多くの優れた研究が行われてきたことである。しかし、これまでの研究の大部分は一人っ子の教育や性格の形成に集中している。それに対して、一人っ子家族の親子関係に関する研究は少ない。そのため、筆者は、一人っ子家族の親子関係という側面に注目しようと考えたのである。

社会は多種多様の集団から構成される。家族はそれらの集団の一つであり、人間社会の最も基本的な生活単位である。親子関係は決定的な家族関係である。中国社会学の創始者として知られる費孝通は、親子関係は婚姻関係の基盤であり、婚姻関係は親子関係によって決まると論じる⁽¹⁾。親子関係の重要性は、いわずと知れたことであり、それは人生の各段階において、重要な役割を果たしている。幼児にとって、親子関係は生と死

に関係する。何故ならば、幼児は親子関係に依存し、生命を維持するための食べ物と安全保障を与えられなければならないからである。児童期から成年期までの親子関係において、社会化を完成する。よい親子関係は、順調な社会化の基本的保障である。成人になると、親子関係は頑張るための原動力の一つとなる。人々は親子関係から経済的サポートと精神的支持を与えられる。老年期の親子関係は介護と緊密に関係する。介護には、経済的サポートと介助だけではなく、精神的サポートも含まれている。

伝統社会でも現代社会でも、親子関係による個人と家族への影響は多く見られる。しかし、家族関係としての親子関係は、固定化して動かないことではなく、発展し続けるものである。社会変動と家族の変化にともない、親子関係は変化する。社会が長期に安定している場合、親子関係は安定し、親子間の行為規範は固定される。それに対して、社会の急激な変動期において、親子関係は顕著に変化する可能性が高い。そのような時期に、固定された規範も崩壊する傾向にある。

エンゲルスが述べたように、家族は能動的要因である。家族は社会発展とともに、低い段階からより高い段階へ発展していく⁽²⁾。19世紀以降、工業化は家族に極めて大きな影響を与えている。工業化の推進のため、前近代家族とは違う近代家族が生じる。近代家族は、性別役割分業で成立する家族形態の一つである。

この家族形態において、「人生に一度の運命のひとと出会って、結婚し、子どもをつくり、添い遂げるというロマンティックラブ、子どもは天使のように愛らしく、母親は子どもを無条件に本能的に愛しているはずという母性」⁽³⁾は規範として推奨された一面がみられる。

以前の伝統的な家族形態と比較すると、近代家族において、「優しさ」と「温かさ」が重視されることは多くなる。そして、近代家族は優しさを持つ集団とされ、人々が追求する理想的な家族形態である。近代家族における親子関係は、いくつかの典型的特徴を持つ。例えば、子ども中心主義や子どもを甘やかすこと、財産は子世代へ譲ること、などである。

改革開放以降、経済的領域からの社会変革を経て、中国社会はきわめて大きく変化を

した。現在、中国社会は社会の転換期にある。工業化は親子関係を変化させ、人口抑制政策は伝統的な家族構造を変化させ、急速な豊かさは人々の生活スタイルを変化させた。多元的な文化は、人々に異なる生活の様式を与え、経済と社会の転換は財産流動の方向を変化させた。

このようなさまざまな背景のなかで、中国家族に影響を与える最も重要な背景の二つが、改革開放政策と一人っ子政策である。この二つの政策は、中国家族にとって、猛烈な衝撃であったといえる。

一人っ子たちは、中国社会が急激に変動する時代に生まれた。このようなさまざまな背景は、一人っ子という集団の特殊性を決める。一人っ子たちは、生まれてから社会の焦点となっている。家族において、他の構成員は、唯一の子どもとしての一人っ子を取り巻いてあがめる。溺愛された一人っ子たちは、男子が「小皇帝」、女子は「小皇后」または「小公主」と呼ばれ、かつて、彼らは「甘やかされた子」の代名詞であった。

これまで、一人っ子政策が実施されてから、30年あまりを経て、一人っ子家族は、既に中国都市社会の主流の家族形態となっている。多くの第一代の一人っ子は、結婚し小家族をもち、彼らのなかの一部は子どもを持っている。

一人っ子政策は次第に調整されたため、一人っ子は減少していくと予想される。しかし、一人っ子家族という家族形態は急に消えることはなく、今後、依然として中国都市部における有力な家族形態の一つであり、中国家族の発展に深刻な影響を与えると考えられる。

現在の一人っ子家族の親子関係の実態はどうだろうか。一人っ子家族の親子関係が形成される背景はなんだろうか。親子関係は中国家族及び中国社会のどんな変動を反映するのか。これらの問題についての注目と研究が必要であると思う。本論文の学術的な意義を要約するならば、中国第一代の一人っ子家族の親子関係の現状とその背景をあきらかにし、社会学的な分析を行うことである。

筆者は本論文をつぎのような構成によって展開していく。序章は、研究の目的、先行研究、本論文の資料と研究方法を含む。研究の目的は、筆者が何故一人っ子家族の

親子関係を研究テーマとしたのかについて説明する。先行研究は代表的な研究者の研究成果を整理してから、これまでの研究の到達点と限界について指摘する。研究方法について、聴き取り調査の方法を紹介する。

第一章と第二章は、聴き取り調査の記録に基づき、一人っ子家族の親子関係の実態を詳しく論じる。調査対象の概況は、文末の附録に記載している。聴き取り調査の内容は主に三点の内容を含む。

第三章では、一人っ子家族における親子関係の背景を分析する。背景は次の四つの部分から形成される。一人っ子政策の実施、文化大革命など、社会の富裕化とメンツ文化の影響、である。

第四章では、中国の親子関係の変化から見えていくものについて論じる。第四章では、論文を全体的に分析し、その特自性を分析することを目指す。社会転換期における人間関係の変化、子どもの価値の転換を分析したうえで、一人っ子時代における中国人の幸福を追求する方法の変化、儒教文化の衰退の加速を分析する。

結論として、現在一人っ子家族における親子関係は混合的な親子関係であり、社会主義文化と資本主義文化、封建主義文化の混合物である。現在一人っ子家族における親子関係は、四つの歴史の偶然な「遭遇」の産物であるともいえる。

第2節 先行研究

1 文献

全体的に、親子関係について、これまでの研究者は多様な視点からアプローチしている。教育学者は、親子関係は子どもの社会化と関わっていると指摘する。心理学者は、特に児童期の親子関係は、成年後の人格に影響を与え、成年後の人格においての欠陥は、児童期の良くない親子関係に由来すると主張する。社会学者は、親子関係を突破口にし、多様な社会と民族においての世代交代の共有の現象と、異なる文化で決められる世代間

の状態を考察する⁽⁴⁾。

これまでの社会学者による一人っ子家族の親子関係に関する文献を整理し、分析する。先行研究は文献の言語によって、中国語文献、日本語文献、英語文献の三つに分類される。それに基づいて、これまでの研究の到達点と限界を分析する。以下は、まず、代表的な研究者の研究結果と主要な観点をまとめる。

(1) 中国語文献

A 風笑天

中国の一人っ子及び一人っ子家族について研究している多くの中国の社会学者のなかでも、風笑天は最も代表的な研究者である。風による一人っ子家族の親子関係に関するこれまでの研究は、以下の四つの分野に焦点を当てたものであった。

1、親子関係の内容とその転換、2、親子関係への影響要因、3、親子間の性別差異、4、親子関係と社会化、5、親子関係と親たちの老後、である。以下の内容は、風の論文と著書からまとめたものである。主な参考文献は、一人っ子問題に関する風の著書⁽⁵⁾である。

① 親子関係の内容とその転換

風は、在職中の若者たちを対象とし、一人っ子家族の親子関係の内容を考察した。風は、一人っ子家族において、成長段階によって、二つの親子関係が存在していると論じる。すなわち、未成年の一人っ子と成年後の子では親との関係が異なっていると指摘したのである。一つは、未成年の子とその親の関係であり、それは未成年の子どもと子育ての責任を負う親との関係である。この段階の親子関係の主な内容は、子どもの教育と成長である。

もう一つは、現在第一代の一人っ子家族に存在している親子関係であり、成年後の一人っ子と彼らの親との関係である。この段階の親子関係においては、親は世話をされる対象になり、親子関係の内容は主に親への介護などの老親扶養である。親子関係のこれらの二つのタイプは、内容も性質も異なっている。風によると、「世代間の新陳代謝は、この二つの親子関係の交替で実現される」⁽⁶⁾。

一人っ子家族にとって、子が結婚することは親子関係が変化するターニングポイントとなる。風によると、子の結婚後も、親子関係は継続的に維持される。親子関係の主体は依然として親であり、親子関係の内容も変わらず、親から子への世話と支援などである。その時点では、親子関係はまだ変化していない。第一代の一人っ子が中年期に入り、彼らの親が老年期に入ってから、親子関係は変化するであろうと風は指摘した。

風の研究によれば、一人っ子家族は新たな生活スタイルを代表している。この新たな生活スタイルの特徴の一つは親子間の平等である。比較分析を通じて、風は親子関係の変化の理由を論じている。その基本的理由は以下の二つである。一つは、一人っ子家族における精神的な中心と消費的な中心は、子に傾斜してきたことであり、もう一つは、親の役割が部分的に変化したことである。親の役割と親のイメージは表序-1のようにまとめられる⁽⁷⁾。

表序-1 親の役割と親のイメージ

	親の役割	親のイメージ
他の形態の家族	扶養と教育	子どもをケアする人／管理者／教育者
一人っ子家族	扶養と教育	子どもをケアする人／管理者／教育者
	参加（宿題の補助や放課後の生活など）	家族教師／クラスメート／兄弟／同年齢の友達

② 親子関係への影響要因

一人っ子に関する研究を通じ、風は未成年の一人っ子と一人っ子ではない子と比較すると、一人っ子と親の関係はより親密であると指摘した。さらに、青年期の一人っ子と一人っ子ではない若者を比較すると、親との親密度の差はほとんどないことが明らかに

なった。つまり、親との関係は、一人っ子の年齢によって変わってくるということであろう。

風の研究結果によると、直接一人っ子と親の関係に影響を与える直接的な要因は主に二つある。一つは、親と同居することであり、もう一つは、一人っ子の婚姻状態である。中国では、通常、未婚の人は結婚している人よりも、親との関係がより親密であると考えられた。それに対して、風の研究では、親と同居する一人っ子は、親との関係がより親密であり、結婚した一人っ子は未婚している一人っ子より親との関係がもっと親密であると主張する。そして、風が分析したように、一人っ子家族の家族関係は「最も基本的かつ簡単で繰り返さない」⁽⁸⁾という性質をもちながら、「相互作用の頻度が高く、つながりが強い」⁽⁹⁾という特徴ももっている。一人っ子家族に存在する相互作用の頻度とつながりの強さは、一人っ子が結婚、つまり親と別居した場合、弱くならない。むしろ、強まる傾向がはっきりみてくるのである。

③ 親子間の性別差異

中国の5つの大都市の一人っ子調査に基づき、風は性別が一人っ子家族の親子関係に影響を及ぼすと指摘した。性別の影響は三つの側面にあらわれた。第一に、親子間の親密度は、親と子どもの性別により異なっている。一人っ子が未成年である場合、母子関係は父子関係より緊密である。その理由は、「一人っ子にとっては、ゲームを遊ぶ際に、母はつねに家族内の唯一の仲間である」⁽¹⁰⁾。在職中の一人っ子も、父より母との関係がもっと親密である。第二に、一人っ子の両親は親子関係においての役割分担が明確化される。「子女の職業と関わることは、いわゆる公的なことはしばしば父の責任である。それに対して、子女の生活・結婚・感情などに関する私的なことはつねに母の責任である。青年期の子女との親子関係において、父と母の役割の違いは顕著にあらわれた⁽¹¹⁾」。第三に、母との関係のなかにおいて、母と娘の関係は母と息子の関係よりもっと緊密である。

④ 親子関係と社会化

風によると、家族は子どもの社会化の一番重要な場所であり、良い家族環境は子ども

の順調な社会化に有利な要因となる。ほかの家族と比較すれば、一人っ子家族の親子間の相互作用は多く、つながりも強く、一人っ子家族という家族構造は子どもの社会化に良い家族状態である。特に、一人っ子家族の親子関係は一人っ子の社交能力を高める。風の研究によれば、一人っ子は一人っ子ではない人と比較すると、一人っ子と親の親密関係、とくに父との親密関係は、よりよい社交能力を育成する。

湖北省の5つの市町の調査結果により、「一人っ子ではない家族において、兄弟間のつきあいが多い。しかし、一人っ子家族において、その兄弟間のつきあいは親子間のつきあいに取って代わった」⁽¹²⁾。そのほか、親子間の相談、共同活動などは伝統的な家族と現代の一人っ子ではない家族よりも増加した。それらの変化により一人っ子家族の親子関係はさらに平等的かつ親密的な方向へ発展していく。

⑤ 親子関係と一人っ子の親の老後

また、風は一人っ子の親の老後問題を考察した。風によると、「親子関係は、高齢者の生活水準に影響を及ぼす大切な要因である。子女との交流とつきあいは高齢者の精神的な慰めとなる」⁽¹³⁾。一人っ子の親は、介護観念を新しくさせる必要がある。つまり、精神的な慰めを求めての子女への依存は、子どもが一人しかいないため難しくなり、自己依存への転換をしなければならない。それと同時に、「経済的・制度的な社会的サービスが必要であり、マスメディアの影響も軽視されるはずはない」⁽¹⁴⁾。

B 林光江

20世紀末から、中国で研究している日本人の社会学者林光江は、北京市における一人っ子家族の児童を対象にし、児童観の視点から中国における一人っ子について研究した。林光江の研究内容は主に一人っ子に関するものであり、親子関係の内容も含んでいる。具体的には、以下の四つの側面が挙げられる。

1、児童観と親子関係、2、家族内での子どもの中心的地位、3、児童観の転換、4、親子関係の特徴。

以下の内容は林の著書⁽¹⁵⁾と論文⁽¹⁶⁾から整理したものである。

① 児童観と親子関係

林によると、児童観とは「成人の社会がもっている児童への認識」⁽¹⁷⁾である。そして、この児童観は家族・学校・国家・社会という四つのレベルに分別される。核家族における親の子どもに対する認識のなかで、とくに親にとっての子どもの価値が、ある程度親子間の相互関係を決め、親子関係の優劣に影響を与える。一人っ子家族のような三人のみで構成される核家族のなかでは、子どもの価値に対する親の認識は、ミクロな家族の児童観における最も主要な内容である。

② 家族内での子どもの中心的地位

林は、一人っ子が家族のなかで中心的地位を占めていると指摘している。一人っ子の中心的地位は、消費にあらわれるだけではなく、他のさまざまな側面にもあらわれる。林によると、中国の一人っ子がもっている家族内の中心的地位は、一人っ子政策だけがもたらしたものではなく、近代社会に共通する特徴の一つでもある。さらに、林は一人っ子の家族構造、経済的環境と両親という三つの要因を考察し、一人っ子の家族内での中心的地位の形成は独特な背景をもっていると指摘したのである。

まず、一人っ子の親世代が生きてきた人生において、主たる原因となった「貧困」により、教育機会を奪い取られた経験は、彼らを子どもの要求にこたえさせ、子どもの教育を重視させる。

次に、一人っ子家族の家族構造からみると、一人っ子家族において、子どもは一人しかいないため、家族内には複数の子どもとの競争関係がなく、親は自然に一人の子どもの要求にこたえる行為形態が形成される。また、改革開放以来、中国における経済水準と生活水準の上昇は子どもの中心的地位の形成の重要な背景の一つである。

また、林は愛と溺愛の根本的な区別を分析したうえで、一人っ子の家族内の中心的地位といわゆる「小皇帝」という地位は異なるものでと指摘した。「小皇帝」という用語は一人っ子の家族内での実状を表現するものではなく、アメリカのニュースで使用されはじめ、それは政治的な意図を含んでいる用語であると林が述べている。

林の分析によれば、本当の「小皇帝」は自由に家族成員を支配し、自分の行為をほかの人に支配されない人物である。しかし、中国の一人っ子はそうではない。中国の一人

っ子の行為と選択は、しばしば親に干渉される。中国の「小皇帝」の家族内の最高の権利は親から与えられるものである。このような権利はある面では親の愛の表現の一つであろう。また、林の研究によれば、中国都市部の一人っ子と一人っ子ではない人を比較すると、一人っ子家族では民主的に家族のことを決める傾向が顕著であり、それも一人っ子の「小皇帝」のイメージとは異なる。

③ 児童観の転換

林は中国の伝統的な児童観や現代社会の転換と児童観の転換との関連を分析した。林によると、中国の伝統的な児童観においては、最も中心的な観念は、子どもが家族に属することである。伝統的な中国家族において、子どもは家族の「宝物」であり、国家あるいは社会などの存在に属さなかった。しかし、同時に、伝統的な児童観のなかでは、子どもは親の道具であるとも考えられていた。具体的にいえば、子どもは「家」を継ぎ、親を介護する道具であった。伝統的な社会の場合、人々は多くの子どもを持つことが求められ、性別選好も当然のように存在していた。

しかし、現代に入ってから、中国経済の発展や社会転換と価値観の変化の影響によって、児童観はしだいに変わってきた。伝統的な社会における育児様式と異なり、現代の都市部において一人っ子家族は主な家族形態になり、育児は「他人に負けないこと」になってしまった。それと同時に、子どもの独立した人格は尊重され、「家族内の人間関係の重点は横の夫婦関係から縦の親子関係に移動してきた」⁽¹⁸⁾。さらにいえば、子どもの価値は大幅に上がった。中国における子どもの価値の転換の理由について、林は多くの理由があるとしており、一人っ子政策の実施は当然重要な理由の一つである。その背後のより複雑な理由は「経済的発展や社会の転型や都市化過程」⁽¹⁹⁾であるという。

④ 親子関係の特徴

林の研究によれば、一人っ子家族の親子関係は不安定性をもっている。それは子どもの価値の転換と直接的な関係がある。一人っ子政策が実施されてから、家族にとっての子どもの価値はさらに重要となった。家族にとって、子どもは複数の子どもから「唯一の子ども」にかわってきた。子どもの価値と地位の急速的な上昇は、親子関係の不安定

性を招いたことを明らかにした。

家族構造が変化したため、一人っ子家族とほかの家族の親子関係の相違点は理解されやすい。林が述べたように、「夫婦と一人しかいない子どもによって形成された家族の内部行為、相互作用の方式と規則は、ほかの家族と顕著に異なっている。親は比較的に体力と気力に満ちており、子どもを援助し、支えることができる。一方、子どももこのような家族の相互作用を利用して、親からの援助と支えを求めることができる⁽²⁰⁾」。

C 辺燕傑

1980年代において、辺燕傑は天津（都市部と農村部を含む）の一人っ子家族を考察している。辺の研究の目的は、一人っ子家族にみられる特有の生活スタイルを探究するところにある。辺の研究は、家族関係に関する内容を論及しており、主に以下の四つの側面となっている。

1、子ども中心主義とその表現、2、親子関係と家族形態、3、親子関係と社会化、4、親子関係と一人っ子の親の老後、である。

以下の内容は、辺燕傑の著書と論文からまとめたものである。

① 子ども中心主義とその表現

辺は調査に基づき、一人っ子家族の親子関係は子ども中心主義へ発展していくと指摘する。子ども中心主義が生じる理由としては、古代からもっている家族主義と子どもを重視するという価値観だけではなく、一人っ子の家族内の独特な地位がより重要な理由であると述べる。

家族内における一人っ子の独特な地位は、以下の三つの側面で示される。まず、家族にとって、一人っ子は必要な存在である。一人っ子家族の家族構造は、社会学に通常いわれる基本的三角形であり、「粹な三角形」という構造である。この構造の一端としての子どもがいなければ、家族は解体してしまう⁽²¹⁾。つぎ、一人っ子は代わることができない。一人っ子ではない家族構成においては、子どもたちは一緒に子どもという役割を果たすため、彼らは代わることができるといわれる。しかし、一人っ子は家族唯一の子どもであるため、代わることができない構成員である。また、夫婦一組が子ども一人

しか産まれない場合、子どもの性別が「生産の唯一の結果」であり、多産では子どもの性別選択はできるが、一人っ子では不可能である。また、親に対する息子としての、あるいは娘としての責任は、当然一人っ子一人に集中する。

以上に述べた親子関係の変化は、一人っ子家族の生活スタイルの変化に直接にあらわれる。最も典型的な変化は「子ども中心」という家族の消費様式である。子どもは家族消費の中心となり、親自身の消費要求は低くなる傾向みられる。全体的に、家族の消費の中心は子に移動する。養育費については、一人っ子家族は一人の子どもにかかる支出が複数の子をもつ家族よりはるかに多くなる。また、一人っ子の親の時間は、その多くを子ども中心に費やされる。

② 親子関係と家族形態

一人っ子家族の生活スタイルを論じる際に、辺は一人っ子がもつ「小家族」の自立問題を研究している。小家族が独立しているかあるいは大家族が集合して大家族に属するかを明らかにするため研究している。

居住関係と経済的関係を基準にし、辺は小家族を三種類に分類する。第一に、親と別居し経済的に自立する小家族、第二に、親と一緒に住んでおり経済的に独立する小家族、第三に、親と一緒に住んでおり経済的にも親の大家族の一部分としての小家族、という三種類である。

この三種類の家族において、第三類の一人っ子とその親の関係は最も親密である。なぜかという、「一緒に住んでおり経済的にも一緒の場合には、小家族と大家族の成員の間、特に世代間における生活上の補助関係はつねに緊密であるからである。その生活上補助関係は生活上の不可欠の一部分である。子女の高齢者への世話と高齢者の孫への扶養がその典型的例である」⁽²²⁾。第二種の家族において、経済的には自立しているが、一緒に住んでいるために、小家族と大家族の間で生活上の補助関係も非常に緊密である。生活上の補助関係は、親の老後期における親子関係における重要な内容の一つであり、「大家族の存在は高齢者への介護と関わる」⁽²³⁾。辺によると、第一類の家族形態は、未来の中国家族の方向を代表している。しかし、今後、第三類の家族は、依然と

してある程度の比率を占めることとなり、安定的な家族形態といえる。

③ 親子関係と社会化

一人っ子は生まれてから特殊な背景の中で成長する。特殊な背景というのは、特殊な時代背景だけではなく、特殊な家族背景でもある。辺は風と同様に、一人っ子家族特有の親子関係は、一人っ子の社会化と緊密な関係があると言及する。さらに、辺は一人っ子の家族構造と親子関係は、子の自立・自主・自己中心などの性格特徴を決めると考える。また、一人っ子家族と一人っ子ではない家族の重要な違いの一つは、一人っ子をもつ親たちの子どもの扶養と教育への「普通の状態を超える重視の程度」である。この重視の程度は、子の社会化によい条件になる。

④ 親子関係と一人っ子の親の老後

辺は調査から、2000 年前後に、一人っ子が結婚することにともない、一人っ子家族は子の家離れによって「解体」し、半分以上の一人っ子は親と一緒に住まないと推測した。そのため、一人っ子家族の家族構造は変わり、生活スタイルは変化し、親子関係は「突然に」家族関係から親類関係に転換する。つまり、家族内部の関係から二つの家族の間の関係になり、親子間の親密度も自然に希薄となる。

辺によると、これらの変化は、一人っ子の親たちの介護に多くの問題をもたらすかもしれない、という。一人っ子の親たちの老後の肉体的・精神的介護の問題は、深刻な問題の一つである。

これらの問題を解決するポイントは、親の介護は家族、特に子どもが担うという伝統的な家族の価値観と、介護者としての子どもの価値に関する認識を改めることである。都市部における高齢者たちの子女への介護の依存においては、社会的な変化がみられる。また、調査の結果からみれば、将来介護されるため、女の子を産みたい人は多い。

辺によると、一人っ子家族の介護問題に対応する必要がある。既婚の一人っ子を親の近くに住ませるという対策を辺は主張している。

(2) 日本語文献

鍾家新

鍾家新の研究範囲は、おもに日本の社会福祉と社会保障、および日中の比較社会学におよんでいる。鍾の研究のなかには、中国における一人っ子家族についての研究も含まれている。鍾は社会学的視点から、近代中国社会の代表的な現象の一つとしての一人っ子への溺愛について分析し、その分析に基づき、溺愛の心理的・社会的背景を論じた。また、子どもへの溺愛と緊密に関わる政治的要因と文化的要因を指摘した。

鍾の親子関係に関する研究は以下の三点に集中している。

1、親子関係の転換、2、親子関係が転換した理由、3、政治と文化的要因の親子関係への影響。以下の内容は鍾家新の著作⁽²⁴⁾から整理したものである。

① 親子関係の転換

鍾の研究によると、一人っ子家族の家族関係はほかの家族と比較すると、つぎのような特徴をもっている。一人っ子家族の親子関係の大きな特徴は、親の子に対する溺愛である。一人っ子の親たちが普遍に子どもを溺愛するという現状と、その背景を深く研究する必要がある。

一人っ子の親の子どもへの溺愛は、二つの側面においてみえる。一つは親たちが一人っ子に与える高い水準の生活と消費レベルである。もう一つは、一人っ子の親たちがいつまでも子どもを心配し、子どもに対する「心配症」である。この二つの側面からみると、一人っ子の家族内におけるその中心的地位が認められよう。一人っ子家族の経済的中心と精神的中心は子どもに変化してきた。そのため、一人っ子家族の地位関係と権利関係も変化した。一人っ子は家族内の「小皇帝」と「小太陽」であり、家族の中で特別な地位を占める。現在、一人っ子家族の親子関係は皇帝と大臣、太陽と惑星の関係に似ている。

② 親子関係が変化した理由

鍾は、一人っ子家族の親子関係が変化した理由の一つに家族構造の変化があると指摘した。一人っ子家族は独特な家族構造であるため、親と子どもの三人しかいない。しかし、一人っ子家族のなかで、親は一人っ子にとっては両方ではなく、一方の存在である。言い換えれば、一人っ子からみると、両親は「統一体」である。その場合、一人っ子家

族の「第三者」の部分が失われた状態である。

このような構造は溺愛を起ししやすい。親子間のバランスも維持しにくい。しかし、家族構造は一人っ子家族の親子関係が変化した唯一の理由ではないと考える。一人っ子の親たちの生活経験と中国社会の現状などの文化や社会的背景も、一人っ子家族の親子関係が変化した理由である。具体的に、一人っ子の親たちの子どもへの補償心理、「二重の競争原理」及び「誇示的消費」などの社会的背景はそのなかの重要な背景である。

③ 政治と文化的要因の親子関係への影響

鍾は政治と文化的要因の親子関係への影響を考察した。鍾の研究結果によると、中国の第一代一人っ子の親たちは文化大革命と一人っ子政策の影響を深く受け、国家の発展のために自己犠牲を求められた。「二重の犠牲」の状態であった。その損失を補償するため、一人っ子の親たちは普遍に子どもを溺愛する。

親子関係のバランスが崩壊したことは溺愛の結果である。子どもが家族の中心になったという現実と伝統的な中国の儒教による「孝」という思想は逆である。ある意味で、「一人っ子政策は中国伝統的文化の一部の転換を促した」⁽²⁵⁾のである。要するに、鍾は、一人っ子家族の親子関係が変化した背景はさまざまであると考えた。文化大革命の産物としての一人っ子の親たち、中国の歴史上初めて実施した一人っ子政策、中国の経済体制改革の結果としての人々の価値観の激しい変化などの背景は、総合的に考えられるべきである。鍾の研究は、これからの一人っ子家族に関する研究に新たな研究視点を提供した。

(3) 英語文献

Poston, D.L. と Falbo, T. は、一人っ子家族を研究する代表的なアメリカの学者であり、彼らは共同的に一人っ子家族に関する問題を研究している。彼らの主な観点は、親子間の相互活動は親子関係の本質、ということである。この基本的観点に基づき、Poston, D.L. と Falbo, T. は、親子間の相互活動により、子女の発展状況が判断できると指摘する。

Poston, D.L. と Falbo, T. はまず、これまでの研究をつぎのようにまとめる。一人っ

子の親たちは、育児の経験が足りないため、子どもを一人以上もっている親たちより、子女への心配が多い。子女への過剰な心配が、子女たちの不良な行為をもたらす可能性は高い。例えば、利己的であることや親に依存すること、などである。しかし、親の子女への過剰な注目は、子女の知力的開発や学校の成績に非常に良い影響を与える。要するに、一人っ子家族の親と子の間に、独特な関係が存在すると論じる。

Poston, D.L. と Falbo, T. は、一人っ子の親たちの子女へ過剰注目と心配は、親子間の「高い品質」の親子関係を形成させ、さらに、その「高い品質」の親子関係は、一人っ子の発展に良い影響を与える⁽²⁶⁾。具体的に、一人っ子の親にとって、「彼らは、現在もっている子女は、これからの唯一の子女であるという現実を認識する。そして、彼らは、子女と良い関係を維持したい。また、良い親子関係は、親の子女への高すぎる期待を緩和することもできる」⁽²⁷⁾。Poston, D.L. と Falbo, T. の研究は、一人っ子家族の親子間の独特な関係は、ある程度で子女の知力的・性格的な発展を促進することを証明する⁽²⁸⁾。

要するに、彼らの研究によって、以下の結論はまとめられる。「一人っ子たちの発展上の優勢は、親との良好な関係に帰因できる。一般的に、一人っ子の親たちの子女への過剰な注目と心配は良くないと思われたが、それは逆に子女の発展を促す」⁽²⁹⁾。

2 到達点と限界

これまで、一人っ子家族について、多くの優れた研究が行われてきた。Poston, D.L. と Falbo, T. の研究結果は、一人っ子家族と一人っ子家族ではない家族の間で、親子関係の差が少ないとする。林光江は一人っ子家族と「児童観」の関係を探究し、親の子どもへの見方について親子間の相互活動の影響を与え、親子関係の優劣を左右できると指摘する。風笑天は、親子関係と一人っ子家族のライフスタイルとの相互作用を検討する。鍾家新は政治と文化的要因の親子関係への影響を考察する。康嵐は、中国都市部の世代関係の様態の変遷は、二つの特徴を持つと指摘する。この二つの特徴は、現在の中国都

市部の家族の現代化の特徴を構成していると康は論じる。一つは、家族価値の安定であり、もう一つは、子世代の個人意識が勢いよく現れることである。

しかし、これまでの研究は、一人っ子の教育や性格の形成に集中している。それに対して、一人っ子家族の親子関係に関する研究は少ない。なお、これまでの研究の注目点は一人っ子の幼児期と青年期にあり、成人後の一人っ子と彼らの親との関係についての研究は少なく、系統的な研究もまだない。しかし、後者は前者と同様に重要であり、成人後の一人っ子と親の関係の内容はより多いと思われる⁽³⁰⁾。

また、これまでの一人っ子家族についての研究地域は北京、上海、広州、天津などの大都市である。しかし、中国の各省の経済的格差と生活水準の格差はある。北京などの大都市の発展レベルは先進国レベルに近い。しかし、大都市の一人っ子家族が、一人っ子家族の全体を代表することはできない。このことから、一人っ子家族の研究範囲を拡大しなければならないと考える。山東省済南市のような中等レベルの都市においての一人っ子家族を研究する必要がある。

第3節 本論文の研究方法

本論文は、質的研究である。本論文においては、事例研究の社会学の方法が主に採用されている。

1 本論文の資料

本論文は、聴き取り調査から得た個人の生活史から書いたものである。今回の調査は、2012-2015年の間に行われた。調査の対象は、36ケースの一人っ子家族である。『世界人口白書』、『中華人民共和国人口和計画生育条例』、『山東省人口和計画生育条例』、『中国人口問題の年譜と統計』、『人口形勢的变化和人口政策的調整』、などのような人口政策に関する条例、法律、などの資料を中心とし、同時に、学術書、論文、新聞記事など

を参考資料としている⁽³¹⁾。

2 基本概念と調査地の概況

一人っ子政策の詳しい内容は、第二章に記載されるため、ここでは簡単に説明する。一人っ子政策は、1979 年から正式に実施された。当時の中国政府は、大陸都市部の漢民族の住民に対して、「一組の夫婦に子供一人を提唱する」⁽³²⁾ といわゆる一人っ子政策を実施した。一人っ子政策の対象は、中国大陆の都市部に住んでいる漢民族の結婚した夫婦であり、全国で、「国家幹部、職員労働者と都市部の住民は、一組の夫婦に子供一人を提唱する」⁽³³⁾ と規定された。

一人っ子政策は、単純に子ども一人しか産んではいけない、ということではない。法律と法規における条件が符合すれば、第二子を産むことができる⁽³⁴⁾。そのほか、夫婦双方は県級以上の計画出産行政部門に申請し、『生育証』という許可をえる必要がある。山東省の場合、第二子を産む条件は次のように規定された。1、夫と妻の両方が一人っ子である場合、2、第一子は、非遺伝性の障害であると認定された場合、3、不妊のため、合法的に他人の子どもを引き取った後に妊娠した場合などの、九つの要件である⁽³⁵⁾。

一人っ子政策の仕組みは、第一章の表 1-1 に表れている⁽³⁶⁾。一人っ子政策を実施した夫婦は『一人っ子の両親光栄証』（以下『一人っ子証』）をもらえ、奨励金、託児所への優先入所、学費補助などの「七優先」⁽³⁷⁾ の優遇政策を受ける。他に、一人っ子を産むことを申請すると、子どもは 14 歳になるまで、毎月奨励費を受けられる。それに対して、一人っ子政策を守らない夫婦は懲罰され、規定違反の状況に応じ社会扶養費が徴収される。

長い間、計画出産政策や一人っ子政策に対する認識は混乱していた。計画出産政策は、一人っ子政策として誤解されてきた。実際には、一人っ子政策は、計画出産政策の重要な構成部分であり、つまり、計画出産政策の多面的政策の一部である。

現在、少子化、労働力不足のため、一人っ子政策は緩和されている。一人っ子政策の

調整方向について、「中国発展報告課題チーム」は、中国の現在と未来の人口動向をあわせて考え、出産政策の調整は三階段に分けるべきであると主張する。近い時期に、次第に第二子出産の条件を拡大する。中期に、自主的な出産に実現する。遠い時期に、出産を奨励する政策を実施する⁽³⁸⁾。

一人っ子政策の最新的な変更は2013年11月である。変更したのは、子どもを二人生むことが許されるための条件である。それは、「夫婦のいずれかが一人っ子であれば、子どもを二人生んでもいい」⁽³⁹⁾というものであった。

本論文の研究対象としての親子関係は、中国第一代の一人っ子と彼らの親の関係である。親子関係のうちに、さまざまな側面が含まれるが、本論文が主に考察したのは、親子間の経済的関係、居住関係と生活上の補助関係である。

第一代の「代」というのは、人口再生産の意味での「代」ではなく、20世紀70年代人口抑制計画が実施されてから生まれた最初の一人っ子世代を意味する。第一代の一人っ子の年齢については、王樹新により、第一代の一人っ子は、1984年前に生まれた一人っ子である、とする⁽⁴⁰⁾。風笑天は、1976～1986年に生まれた一人っ子は、第一代の一人っ子である、という⁽⁴¹⁾。

調査地において、一人っ子政策が厳しく実施され始めたのは1978年である。そのため、本論文においては、1978-1986年に生まれた一人っ子は、第一代の一人っ子である。第一代の一人っ子の親は、第一代の一人っ子をもっている親である。特別に説明したいのは、また政策的な一人っ子は、中国の都市部にしかないため、本論文の研究範囲は、済南市の市区の一人っ子家族に限ることも付言しておきたい。

表 1-1 一人っ子政策の仕組み

法律・条例	主な内容
憲法（1982年12月）	・ 国家は計画出産を推進して人口増加を経済社会発展計画に適応させる

	<ul style="list-style-type: none"> ・計画出産の義務 ・扶養の義務と婚姻の自由
婚姻法（1980 年 9 月）	<ul style="list-style-type: none"> ・計画出産の義務 ・結婚年齢を制限 ・優生
母子保健法（1994 年 10 月）	<ul style="list-style-type: none"> ・婚前検査 ・産前診断 ・遺伝相談 ・母子保健
人口・計画出産法（2001 年 12 月）	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの「一人っ子政策」を国の法として位置づけ ・超過出産費を「社会扶養費」と名称を変更し、国庫に上納
各地区の計画出産条例（1992 年 4 月までにチベットを除き、29 地区で制定済み、何度か改定）	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚年齢の上乗せ 都市部では、男 27 歳 女 25 歳 農村部では、男 25 歳 女 23 歳 ・夫婦子ども 1 人という宣言をして、一人っ子証を受領 ・2 人以上が特定の条件を満たす夫婦のみ許され、出産間隔 4 年を経て、許可が必要 ・超過出産・計画外出産に対する経済制裁と処罰 ・人口目標の管理責任制の実施
賞罰制度	
一人っ子を宣言した夫婦優遇策（「七優先」）	実施しない夫婦（計画外出産）罰則
<ul style="list-style-type: none"> ・奨励金の支給 ・託児所への優先入所、保育費補助 ・学校への優先入学、学費補助 ・医療費支給 	<ul style="list-style-type: none"> ・超過出産費（多子女費とも）の徴収、夫婦双方賃金カット ・社会養育費（託児費・学費）の徴収 ・医療費と出産入院費自己負担

<ul style="list-style-type: none"> ・就職の優先 ・住宅の優遇配分、農村では宅地 ・退休金（年金）の加算と割り増し 	<ul style="list-style-type: none"> ・昇給昇進の停止 <p>（「社会扶養費」を徴収する以外、近年は若干の変更がある）</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------

親子関係（parent-child relationships）は、「親子の人間関係を総称した概念である。夫婦関係とともに家族における最も基本的な関係の一つである」⁽⁴²⁾。親子関係において、多様な側面がある。それらの中で、経済的関係、感情的関係と生活上の補助関係は、親子関係の中の最も重要な側面の三つである。

親子関係の分類とその基準は、学者によって異なっている。風笑天の研究によれば、一人っ子家族において、一人っ子の成長段階によって、二種類の親子関係が存在している。一つは、未成年の子とその親の関係であり、もう一つは、成年後の一人っ子と彼らの親との関係である⁽⁴³⁾。ところが、李銀河は現在中国の大都市の家族において、親子関係が変化したのは一人っ子が結婚してからであると論じた。李によると、親子関係が変化した理由は「新居制」⁽⁴⁴⁾とは、子どもが結婚してから親と別居するという新しい居住様式である。

風笑天と李銀河の研究からみれば、親子関係を分類する方法は違う。風は一人っ子の年齢で分類し、李は一人っ子の結婚で分類した。しかし、風、李ともに、親子関係は単一的ではなく、多種類の親子関係があるとかれらは主張している。

筆者は、一人っ子の結婚により親子関係を分類することは、合理的であると考えている。なぜかという、まず、結婚後の一人っ子とその親の間において、つきあいの頻度などが変わってきた。次に、一人っ子が結婚後、親との親子関係の空間範囲も変わってきた。核家族の中の家族関係から、二つの核家族の間においての家族的関係に変化した。また、一人っ子が結婚してから、親との関係は以前より複雑になることは多い。

そのため、本論文は、一人っ子家族の親子関係の実態を述べる際に、一人っ子の結婚を観察することで、親子関係を分類した。現在、一人っ子家族の親子関係の変化する基準は、一人っ子結婚の前の親子関係である。しかし、親子関係は複雑であり多様化する

ものであり、一人っ子の各人の人生も同様ではないため、簡単に一人っ子の結婚で分類できない例もある。その例外は少数であるため、これらの例を、特別に説明する。

本論文の聴き取り調査の調査地は中国の山東省済南市である。済南市（さいなんし/チーナンし、中国語＝済南市、英語＝Jinan）は中華人民共和国山東省西部に位置する市で、省都として省内の通商、政治、文化の中心としての地位を占める。人口のほとんどは漢族であるが、満族や回族なども居住している。

済南市は、6 区（市中区・歴下区・天橋区・槐蔭区・歴城区・長清区）を統轄する。長清区は済南の市街地から離れており、実質的に済南市街地を構成するのは残り 5 区である。「山東省省情資料公報」によって、2013 年まで山東省の常住人口は 9733.39 万人であり、2013 年度の人口増加は 110.78 万人である。

済南市の計画生育を担当している組織は済南市衛生和計画生育委員会である（元人口与計画生育委員会）。2013 年度山東省衛生計生事業発展統計公報によると、2013 年まで山東省における「独生子女光栄証」（一人っ子光栄書）をもっている夫婦は 769.57 万組である⁽⁴⁵⁾。

【注】

- (1) 費孝通『郷土中国——生育制度』北京大学出版社、2013年、125～126ページ。
- (2) 恩格斯『家族私有制和国家的起源』人民出版社、1999年、28ページ。
- (3) 千田有紀『日本型近代家族——どこから来てどこへ行くのか』勁草書房、2013年、2～3ページ。岸政彦『街の人生』勁草書房、2014年、41～60ページ。
- (4) 康嵐『反馈模式的変遷——転型期城市親子関係研究』上海社会科学院出版社、2012年。康嵐「代差与代同——新家族主義価値的興起」『青年研究』2012年3月。
- (5) 風笑天『中国独生子女問題研究』経済科学出版社、2013年。風笑天『中国独生子女——從「小皇帝」到「新公民」』知識出版社、2004年。風笑天「在職青年与父母的关系——独生子女与非独生子女的比較及相關因素分析」『江蘇社会科学』2007年第5号。風笑天『独生子女——他们的家族、教育和未来』社会科学文献出版社、1992年。風笑天「論城市独生子女家族の社会特征」『社会学研究』1999年第1号。風笑天「独生子女父母的空巢期——何時開始？会有多長？」『社会科学』2009年第1号。風笑天「共処与分離——城市独生子女家族養老形式調査」『人口与經濟』1993年第2号。風笑天「生育二胎——＜双独夫婦＞的意願及相關因素分析」『社会科学』2010年第5号。
- (6) 風笑天、前掲『中国独生子女問題研究』229～230ページ。
- (7) 風笑天、前掲『中国独生子女——「小皇帝」から「新公民」へ』、8ページ。
- (8) 風笑天、前掲『中国独生子女——「小皇帝」から「新公民」へ』、76ページ。
風笑天「生育二胎——『双独夫婦』的意願及相關因素分析」『社会科学』2010年第5号。
- (9) 風笑天、前掲『中国独生子女——「小皇帝」から「新公民」へ』、76～79ページ。
- (10) 同上。
- (11) 風笑天、前掲『中国独生子女問題研究』、229～230ページ。風笑天、前掲『中国独生子女——「小皇帝」から「新公民」へ』、237ページ。
- (12) 風笑天、前掲『中国独生子女——「小皇帝」から「新公民」へ』、237ページ。
風笑天「生育二胎——＜双独夫婦＞的意願及相關因素分析」『社会科学』2010

年第 5 号。

- (13) 風笑天、前掲『中国独生子女問題研究』、229～230 ページ。風笑天、前掲『中国独生子女——「小皇帝」から「新公民」へ』、322 ページ。
- (14) 同上。
- (15) 林光江『国家・独生子女・児童観——対北京市児童生活的調査研究』新華出版社、2009 年、10 ページ。
- (16) 参考した主な論文はつぎのとおりである。「独生子女和児童観的変遷」『慶祝黃淑娉教授從教 50 周年人類学理論与方法學術研究会論文集』2002 年 8 月、と「中国独生子女和児童観研究総述」『学海』2003 年第 2 号。
- (17) 林光江「中国独生子女和児童観研究総述」『学海』2003 年第 2 号。
- (18) 林光江、前掲『国家・独生子女・児童観——対北京市児童生活的調査研究』、269 ページ。
- (19) 同上、6 ページ。
- (20) 辺燕傑「独生子女家族的増長与未来老年人的家族生活問題」『天津社会科学』1985 年第 5 号。
- (21) 同上。
- (22) 同上。
- (23) 同上。
- (24) 鍾家新『中国民衆の欲望のゆくえ——消費の動態と家族の変動』新曜社、1999 年、190 ページ。
- (25) 同上、81～130 ページ。
- (26) Falbo, T. and D.L.Poston, 1986, *A Quantitative Review of the Only Child Literature: Research Evidence and Theory Development*, Washington: Psychological Bulletin.
- (27) 同上。
- (28) 同上。
- (29) 同上。
- (30) 風笑天、前掲『中国独生子女問題研究』、230～231 ページ。
- (31) 参考資料は、本論文の文末に記載している。
- (32) 『中華人民共和国人口和计划生育条例』（中華人民共和国国家衛生和計画生育委員

会の公式ウェブサイト nhfpc.gov.cn) 第 27 条。

- (33) 同上。
- (34) 前掲『中華人民共和国人口和计划生育条例』第 23 条。
- (35) 中国發展報告課題組「中国發展報告 2011～2012 年——人口形勢的變化和人口政策的調整」『南方周末』2011 年 11 月 1 日。
- (36) 若林敬子・聶海松『中国人口問題の年譜と統計——1949～2012 年』御茶ノ水書房、2012 年、209 ページ。
- (37) 若林敬子・聶海松、前掲『中国人口問題の年譜と統計——1949～2012 年』、208 ページ。
- (38) 前掲「中国發展報告 2011～2012 年——人口形勢的變化和人口政策的調整」。
- (39) 『人民日報』2013 年 11 月 16 日、第 6 版。
- (40) 王樹新「第一代独生子女父母養老擔心度研究」『人口研究』2007 年第 4 号。
- (41) 風笑天「論城市独生子女家族の社会特征」『社会学研究』1999 年第 1 号。風笑天「生育二胎——〈双独夫婦〉的意願及相關因素分析」『社会科学』2010 年第 5 号。風笑天「在職青年与父母的關係——独生子女与非独生子女的比較及相關因素分析」『江蘇社会科学』2007 年第 5 号。
- (42) 濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘『社会学小辞書』有斐閣、1982 年、29 ページ。
- (43) 風笑天、前掲『中国独生子女問題研究』、241 ページ。
- (44) 李銀河『一爺之孫——中国家族關係個案研究』内蒙古大学出版社、2009 年、92 ページ。
- (45) 若林敬子・聶海松、前掲『中国人口問題の年譜と統計——1949～2012 年』、208 ページ。

第一章 一人っ子家族における親子関係の実態 I

親子関係においては、多くの側面があるため、筆者は聴き取り調査の内容について分析した。調査の内容は、以下四つの項目に集中している。そのため、本章では、一人っ子の高い消費とその実態、一人っ子への親の期待、などの項目を中心に、親子関係の実態を明らかにする。

第 1 節 一人っ子の生活水準とその実態

1 親にとっての高い消費

大学院生である一人っ子 C・Q 氏⁽¹⁾ の例は代表的なものである。彼は生活費を親からもらい、その金額は毎月 4,000 元(日本円で換算すると 8 万円に相当)を超えている。C・Q 氏の両親は一般的なサラリーマンなので、4,000 元は家族の所得の半分を占めている。しかし、C・Q 氏は自分の家族の経済状況に満足していない。一人っ子として、兄弟がいる人を羨ましいと思うかと尋ねられた時、C・Q 氏は羨ましくないと答えた。逆に、彼はお金持ち家族の二代目を羨ましく思っている。

一人娘である L・C 氏⁽²⁾ は、同じ一人娘であるクラスメートとの経験をつぎのように語った。「高校時代のクラスメートとも比べたら、親が私に使ったお金はそんなに多くないと気づきました。彼女の場合、院生の入学試験まで、親が 2、3 万(日本円で換算すると約 40~60 万円)ほどつかっていましたね。飛行機チケットを買うとかで。彼女は面接のために、長春に行きました。それで、親が数千元も出して、チケットを買ってあげたのです。多いなあって言う感じでした。私よりは随分高かったですよ。この子の両親は、高い服とかも買ってあげています。私は、大学時代は着るものにお金をかけませんでした。今でも覚えていることは、彼女が大学生のころ、両親からコートをもらいましたが、多分 800 元以上もするものでした。私にとってはめちゃくちゃ高いですよ。

給料と言えば、彼女の両親とうちの親はほぼ一緒です。ただ向こうは子供に使いたいです。今でも一緒、彼女にミンクコートとかを買ってあげています」。

以上の調査内容から見ると、一人っ子にかける高い消費という現象は普遍的である。つまり、多くの親は子どものためにお金を使う。反面、少数ではあるが、子どものためにお金を使いたくない親もいる。L・C氏はつぎのように言った。

「親は農村出身なので、素朴のほうがいいという教育を受けました。つまり着られる服は着るべき、着れなくても故郷の妹にあげるという教育です。外見がどうなのか、全然気にしません。私は、小さい頃から両親にみにくいアヒルの子と呼ばれていました。すごくみにくいからだ、とのこと。大学四年生の時、免許を取りたくなりましてね。そのとき、あれは、唯一母にお金をくれないかって頼みました。でも、母は断ったんです。母は、うちは車を買う予定もないし、教習所に通うには3,000元もかかるし、無駄だと思っていました。このことについて結構後悔しているらしいです。三年前くらいにこの話しをしていたら、後悔していると言っていました。あれ以来、私は親に頼るのをやめました。何でもお金をくれるわけではないってということがわかりました。あれ以来、親にも他の人にも頼らないことに決めました。なにかあったら、口さえ出したらお金をくれるというような期待はしないほうがいいです」。

また、今回の調査からみると、一人っ子の成長においては大量の支出がいくつかある。例えば、教育費、海外留学費、住宅や車を買う費用などである。その中で一番高いのは結婚のための住宅購入費用である。元々住宅は値段の高いものである。それに加え、近年中国の住宅値段がますます上昇し上がってきて、特に大都市と中都市の住宅値段は十年前より何倍、何十倍も上回った。済南市のような中等レベルの都市でも市内の平均住宅値段は一平方メートル当り8,000元を超えた（日本円で換算すると16万円に相当）。特に良い学校付近の住宅値段は一平方メートル当り14,000元以上が一般的である（日本円で換算すると28万円に相当）。

このような急速な値上りは子供に住宅を買いたがる親のストレスを大きくした。現在中国では、男性にとって、住宅は結婚の必要な条件となっている。新婚用住宅を持って

なかったら、いい配偶者を探すことは難しい。一般的に一人っ子は結婚するまで親と同住し、結婚する前に親の支援で新婚用住宅を持つから、部屋を借りて住んでいた経験がまったくない。しかし、若い一人っ子たちにとって、住宅は彼らが自分で買えないものであり、住宅は彼らにとって高い消費となる。

新婚用住宅の購入に関して、一人っ子 Y・F 氏⁽³⁾ はつぎのように語った。「私は 28 歳の時持ち家があった。その家は親の金で買い、100 平方メートルで、70 万元（日本円で換算すると 1,200 万円に相当）だった。私は 26 歳に大学院を卒業してから、大学に就職できた。山東省の一流大学に就職したから、家族はすごく喜んだ。しかし、問題は次々起こってしまった。私は 26 歳の時には、まだ結婚相手がいなかったから、親は私を心配し、はやく結婚しろと催促した。でも結婚したかったら、新婚用住宅を持っていないことは一番現実的なネックとなる。あのとき、住宅価格は、毎年高くなっていたため、親は早く私に家を買えと催促した。私はすぐ家を買わないで、三年くらい貯金して頭金を払って、住宅ローンで買おうと計画したが、親は私の計画に賛成しなかった。最後は、親のお金で私に家を買ってくれた。親たちは、一時そんなに多いお金を持っていなかったから、親類から 40 万元（日本円で換算すると 800 万円に相当）を借金し、その住宅を買った。私は住宅ローンも負担しないで、持ち家を得た」。

結婚した人だけではなく、学部の卒業前でも、新婚用住宅を持っていた人も多い。未婚の一人っ子 N・P 氏⁽⁴⁾ は、22 歳で新婚用住宅を持っていた。もちろんその住宅は N・P 氏の親たちが買ってくれたものである。なぜそんなに早く新婚用住宅を息子に買ったかと聞かれたとき、N・P 氏の母はこう語った。「以前私はよくまわりの人と子どもの新婚用住宅という話題で話したが、みんな子どもに住宅を買えないと言った。しかし、今はほとんどみんなが、子どもに家を買っている。これが現実だ。子どもに家を買わない人は、貧しくて本当に買えない人々だ。できれば、親は子どもに家を買ってあげたいものだ。私たちは当時 30 万元（日本円で換算すると 600 万円に相当）で 80 平方メートルの二室を購入した」。

N・P 氏は、両親に早めに新婚用住宅を買ってもらいたいと思った。それはすばらし

いことだと、彼は思った。N・P氏はこう話した。「両親は頭がいいので、私に早めに新婚用住宅を買ってくれた。私は学部 にいたとき新婚用住宅をもらえた。でもそのときの私は全然理解できず、就職した後、自分で買おうと思った。現在では、自分の力で買うことは不可能だ。自分で家を買おうとすれば、一ヶ月の給料で1平方メートルも買えない。一年の給料で10平方メートルを買えて、10年以上の年棒分がないと家は買えない」。

親の支援をもらえたため、一人っ子の住宅購入のストレスは少ない。他人からみれば、彼らは幸せな若者である。これに対して、もし結婚した一人っ子が、借り家に住む、あるいは住宅を買えないため結婚後も親の家に同居していれば、好ましくないとと思われるからである。

今回調査した32ケースの一人っ子家族のなかに、結婚する際4人は新婚用住宅を持ってなかった。一人娘C・Y氏⁽⁵⁾はこれまで持ち家をではなく、C・Y氏の親たちと一緒に住んでいる。新婚用住宅の話題に及ぼした際、C・Y氏は次のように語った。「主人の出身地は田舎で、姑たちはずっと田舎に住んでいる。田舎の生活は貧しいので、主人は毎年姑たちに送金している。彼と結婚することを家族に言ったとき、家族みんなが反対した。一番重要な反対原因は、彼が持ち家を持っていなかったことだ。あの頃、私ははやく結婚したかったのに、結婚できないかと心配した。新婚用住宅は友人から借り、家賃は一ヶ月2,000元（日本円で換算すると4万円に相当）だった。息子が生まれてから生活費が高くなり、親たちはこの家賃を節約させようと、私たちを同居させた。私たちは子どもを連れ、私の親の家に引っ越した。隣の人は皮肉っぽく、私について家を買うのかと聞いた。私はメンツが立たないと感じたから、毎回そのようなことを聞かれたら、必ず主人と喧嘩し、早く家を買おうと彼を追い込んだ。でも、家の値段は高くなり続けていたので、私たちは、これまで持ち家を持ってなかった。今、息子は6歳だ」。

C・Y氏のような一人っ子は多くなく、多数の一人っ子は持ち家がある。さらに、彼らの住宅の水準は親の家より高い。住宅を評価するとき、周辺の環境や施設などの要素が考慮される。部屋の大きさや地理的位置や周りの交通状況なども含まれる。一人っ子の親にとって、二つの住宅を持っている場合、よい住宅を子どもに渡すほうが多い。親

は新しい住宅を買った場合、新しい住宅を子どもに渡し、新婚用住宅とするほうが多い。

Y・F氏の母はこのように言った。「私たちは新しい家を買った後、私とその家に引っ越し、息子に渡さないと考えた。新しい家はエレベーターがあり、私の足はすごく痛かったので、私は主人と新しい家に引っ越そうと相談した。しかし、主人は決して同意してくれなかった。こうして、新しい家を子どもに渡した。新しい家は大きく、将来息子の家族は3、4人だから、息子たちには必要だ。私たちはもう退職し、どこに住んでもいい」。

一人っ子の高い消費は、育児にもあらわれる。一人っ子である33歳のM・Y氏はつぎのように語った。「子供を産んだ後、誰もがお金持ちになったみたいに、お金を惜しくなくなりました。例えば、子供がいないとき、一元の（日本円で換算すると20円に相当）バスで行ける処は決して二元のクーラー付きバス⁽⁶⁾では行きません。自分で出かける時は一元も無駄にしたくないです。クーラーがなくてもちょっと我慢すればいいだけの話です。でも、子供がいればそうはいきません。子供を連れて出かける時、2元（日本円で換算すると40円に相当）バスどころか、タクシーでも不満なくらいです。私たちが車を買ったのも、子供を産んだ後のことです。その前は全然考えたこともなく、全く必要がないと思っていました。バスもとても便利ですし、たまに急ぐときはタクシーで行けばいいことです。車を買うよりは安くすみます。でも、子供がいると、バスに乗るのはちょっといやになりました。他の親は車で、うちの子だけがバスに乗るなんて子供を虐待しているみたいですよ。」とM・Y氏が言った。

これは筆者が日本で見た状況と、大きな違いがある。日本の小学生は普通、親に送り迎えされず、その大部分は自分で登下校する。しかし、中国の小学校は登下校の時間になると、校門の前に多くの送迎の車が集まる。「子供が小さい頃はまだいいですけど、学校に行く年になれば、クラスメートとの交流も多くなります。その時、もし他のクラスメートは親が送り迎えしているのに、自分だけがそうでないと気がついたら、自分は他人に劣っているというコンプレックスを持たせるかもしれません。また、親は自分を可愛がっていないとかを思ったりして。仕方ないですね、こんな状況が中国の国情です

から。実は子供を自立させ、適当な苦勞をさせてこそ子供が立派になれる、ということは皆分かっています。でも他人に理屈を言うのは簡単ですが、自分の子供の時になるとつらくなります。子供を連れて旅行する時もそうですよ。以前は妻と一緒に旅行した時はいつも 300 元から 400 元の普通ホテルに泊まっていました。きれいで便利ならいいですよ。でも、子供を連れて行くと、そうはいかないですね。旅行に行くたびに、豪華な五つ星ホテルに泊まり、毎晩 1,200 元ですよ。子供がいると、だれもお金持ちになったみたいにお金を遣うんです。特に山東の人はそうですよ。私の知った山東の人は皆自分の為に生きているんじゃなくて、子どもやメンツのために生きているのです。本当に疲れますね。私は以前に、何年間か四川や吉林で働いたことがあります。その人は山東の人と違いますね。特に四川の人は楽観的で、遊びや食べ物が好きです。四川の人の給料も高くないですが、お金があったら、すぐ食べ物や服に使います。四川の人のお金は全て服や食べ物に掛かって、家に高価な物がないから、泥棒なんか怖くないです」と M・Y 氏は言う。

聴き取り調査から、一人っ子たちの生活水準は高いことがわかる。一人っ子たちの生活水準は、一人っ子ではない人を超えて、彼らの親たちを超えたといえる⁽⁷⁾。一人っ子の高い水準の生活は、ブランド品を追求することや、よく外食することなどの必需品ではないものを購入することにも表れる。また、聴き取り調査からみえてきたのは、一人っ子家族のなかで、子どもが家族消費の中心となったことである。

しかし、子世代のために使った金は、基本的なニーズを満たすものではなかった。一人っ子の新婚用住宅の購入は、その最も典型的な例である。多くの一人っ子たちは、親の支援で持ち家を持っているが、住宅の条件は親の住宅より上である。

2 子の高い消費に対する親の悩み

しかし、実は、子どもの高い消費に対して、親たちは悩んでいる。G・K 氏は事業団体から定年退職してから、年金が支給され、その金額は調査地では平均以上のレベルの

ものである。しかし、退職してから、G・K氏は修理した中古の雑貨を売ってきた。息子のために貯金したかったため、毎日彼は中古の雑貨を回収し、販売することによって少ない雑収入を得ている。この収入は、年金以外の収入であり、毎月約1,500円（日本円で換算すると約3万円）である。

他人から見れば、必要がないと思われるが、G・K氏はこう語った。「私のばあい、毎日散歩したり、山に登ったりしてもいい状況である。まわりの同年代の人々はみんなそのような老後生活を送っている」。「あなたは、ごみを拾うのが面白いと思うのか」と筆者に逆質問し、切ない表情を見せた。彼の中古の雑貨を売る目的は自分の趣味ではなく、年金以外の収入を得るためである。基本的な原因はG・K氏の息子の将来に対する不安だと思われる⁽⁸⁾。

G・K氏は、今一人暮らしをしている。妻は2年前に亡くなった。息子はすでに結婚し、父と別居している。G・K氏の生活がとても質素なものであり、「一足の靴を一年間くらい使い、服も数年間使い、全部安いものだ。うちの子は逆にブランド品をいっぱい持っている」。息子の消費水準は高く、必要はないが、現在でも時々G・K氏からお金をもらっている。そして、彼は給料が高くないのに、ブランド品を買ったり、毎日外食をしたりする。G・K氏はこのような息子への贈与を「搾取」だと認識し、それはG・K氏の心のアンバランスを示している。

親にとって、高い住宅の価格よりも、子どもからの要求はもっと難しい。C・Q氏の母によると、彼は大学院の在学期間に交際をしていた彼女に、自分の両親は金持ちで、豪華で大きな家を持っていると教えていたそうである。しかし、彼の父は普通のサラリーマンでしかなく、母は地質調査の工事をしており一定の経済力はあるが、その現状は彼女に伝えたのとはるかに違う。それに、家も100平方メートル未満の住まいで、豪華で大きな家はなかった。

そのため、彼はうそがばれるのを恐れ、彼女を家に連れて両親と合わせることを恐れていた。そして、卒業の少し前、彼はようやく両親に、その女の子のことがとても好きで結婚したいが、うそがばれて別れを言われるのが怖いため、両親に大きい家を買って

もらいたいと話した。

両親は話し合ってから、200 万円（日本円で換算すると 4,000 万円に相当）弱で市街地の 150 平方メートルほどの住宅を購入した。しかし、貯金が足りず、家族と友人に 70 万円借りた。その後、彼は彼女を両親に合わせた。その彼女は彼の家族状況に満足し、結婚について相談を始めたとのことであった。

さらにいうと、お金をもっていない親の悩みは多い。A・G 氏⁽⁹⁾ は結婚した際持ち家がなかったため、結婚後はずっと母と一緒に住んでいる。新婚用住宅について A・G 氏はこのように語った。「私は 5 歳のときに父をなくした。母は一人で私を養育し、彼女はすばらしかった。以前母は工場の女工であったが、学歴が高いため、その後母は小学校教師に転職した。小学校の教師の給料は高くないので、私に家を買うことは不可能であり、一緒に住まなければならなかった。妻は私のクラスメートであり、彼女はうちの経済条件が良くないことをよく知っていたが、私と結婚してくれた。うちの家は小さくて、構造もすみやすすくない。ベッドルーム二つがあり、私が結婚する前は、母が比較的に大きい部屋に住んでおり、私は小さい部屋に住んでいた。私が結婚した後、母は大きいベッドルームを私たちに住ませ、母は小さい部屋に移動した。あの部屋は陽光がささず、冬はすごく寒い」。

部屋などの施設を除き、周りの環境なども大切である。学区は新婚用住宅を選ぶ基準となる。新婚用住宅と戸籍の関係は、非常に密切である。一人っ子の親たちからみれば、新婚用住宅は子どもの新婚用だけではなく、孫の入学と教育レベルに影響を及ぼす。済南市に五つの行政区があり、歴下区は済南市の中心位置にある。歴下区のエデュケーションレベルはほかの区より高いため、歴下区の住宅は若者に人気であり、住宅の値段もほかの区より高い。子どもに歴下区の住宅を買うため、一部の親たちは退職金で子どものローンを負担している。

一人っ子 N・S 氏⁽¹⁰⁾ の母は次のように語った。「一般的な住宅を買うことは余裕であるが、住宅は一回のみの大きい買いものだから、できればよりよい住宅を買いたい。私が子どもに新婚用住宅を買ったとき、ほかの区の住宅の値段は平均 7,000 元（日本円で

換算すると 14 万円に相当) で、歴下区は約 14,000 元 (日本円で換算すると 28 万円に相当) であった。ちょうど 2 倍高かった。私たちの貯金は頭金の金額くらいだったので、主人の給料で子どもに返済した。このように何年もかかって返済して、主人の給料を全部使って、私の給料だけで生活していた。家を買う前に私はよくあちこちに旅行していて、生活は毎日のんびりしていた。私は韓国、台湾、タイやシンガポールなどに行ったことがあるけど、家を買った後、お金を節約するため、旅行とかは全くしなくなった」。

以上の事例からみると、一人っ子の新婚用住宅の購入は、既に一人っ子の親たちの責任になった。この責任をはたすことができなかつたら、親たちはかえって不安になり、子どもに申し訳ない気持ちとなる。

3 親のすねかじり

調査によると、多くの一人っ子は新婚用住宅などを購入するため、親の金を使っている。現在の若者はみんな「親のすねかじり」をしていると言われた。実は自立を追求する彼らは「親のすねかじり」をしたくない。

X・N 氏⁽¹¹⁾ は「親のすねかじり」について次のように語った。「私は親のすねかじりとかしたくない。でも、住宅を買うとき親の金を使わなければならない。私は仕事を始めたのが比較的遅かったので、貯金で住宅を買うことはできなかった。私は、親の金をもらいたくなかった。何かあったら自分で解決したかった。でも、それは不可能で、親に助けてもらわなければならなかったのだ。私は自分で努力して、一生懸命仕事をして、強くなりたい。私は父と同じく、負けず嫌いな性格だ。父は若いうちに田舎から大学に入学して、済南市に家を買った。父は優秀で、最初から自分の力で努力した」。

調査からみると、X・N 氏の家族は富裕層である。そのため、X・N 氏のような家族にとって、子どもに住宅を購入するのは難しくないことである。しかし、多くの家族にとってはそうではない。一部の親は子どもに新婚用住宅を買うため退職後にアルバイトをしている。住宅を買えない親たちは自分の住宅を子どもにあげ、あるいは子どもと一緒に

に住んでいる。

一人っ子の母である Y・Z 氏⁽¹²⁾ と夫は、共にレイオフされた工場労働者であり、現在既に退職している。毎月二人の年金は、共に 5,000 元（日本円で換算すると 10 万円に相当）である。Y・Z 氏の親たちは、以前住宅一軒を持っていたが、息子に新しい住宅が買えなかった。何年前に、息子が結婚するため、彼らは 30,000 元（日本円で換算すると約 60 万円）で済南市から 40 マイル離れた田舎に、平家を買った。Y・Z の以前の都市にある住宅は、息子たちに住ませ、田舎の平家に引っ越した。Y・Z 氏の夫婦は、ともに都市で生まれ、育ち、田舎で生活したことがない。

田舎の生活について Y・Z 氏はこのように言った。「田舎の生活は都市と比べることはできない。冬には暖房がなく、我慢できないくらいすごく寒い。一番寒い時部屋の中の水は氷になった。しょうがないね。あそこ、息子の彼女は早く結婚したかった。彼女は、私たちと一緒に住みたくないと言った。私と主人は両方ともレイオフで、息子に家を買えなかった。現在の若い女の子たちは、みんな現実的になっている。新婚用住宅がなかったら結婚しない。私たちが、田舎に引っ越しをした後、彼女はすぐ息子と結婚した。私たちは息子のため田舎に引っ越し、子どものため生活の難しさを我慢している」。

以上述べた例のほかにも、もっと極端的な例もある。一部の親は、老後の通院費用とか老後用の貯金まで子どもに渡していた。このような状況は一人っ子の親たちにリスクをもたらした。一人っ子 T・X 氏⁽¹³⁾ の父は五年前に腎不全と診断され、これまで、血液の透析で生きてきた。この場合でも、T・X 氏の父は 70 万元（日本円で換算すると約 1,400 万円である）で、T・X 氏に新婚用住宅を購入した。この住宅購入のために、T・X 氏の父の腎臓移植の貯金を使った。

T・X 氏はつぎのように語った。「正直に言えば、私が生まれたときから、家族環境がよく、親たちは私をかわいがってくれた。父は何年も前から楽器を商売していて、父が病気になる前、私の家族は比較的富裕だった。私が中学校に入った 1995 年に、父は 700 元（日本円で換算すると 1 万 4 千円に相当）で私に格好いい自転車を買ってくれ、当時のクラスメートたちはみんな私をうらやましく思った。1995 年当時、普通のサラ

リーマンの一ヶ月の給料は 500 円（日本円で換算すると 1 万円に相当）であった。でもその後、うちの生活レベルがよくなかった。その原因は二つあった。一つは父が病気になり、血液の透析とかに金がたくさんかかったからだ。もう一つは、新婚用住宅の購入であった。あいにくなのは、父の病気と家の購入はほぼ同時であったことだ。2009 年に父は腎不全だと診断され、私と母は絶望した。血液の透析という手段で生命を維持することができるが、根治する方法は腎臓移植だけだ。腎臓移植は医療保険の範囲を超え、ほぼ自費であり、手術の費用も高い。約 40 万円（日本円で換算すると約 800 万円）が必要だ。私の住宅を買わなかったなら、親たちは 70 万円（日本円で換算すると約 1,400 万円）の貯金を持っていた。わたしの住宅を購入のため、70 万円が必要だった。その場合、私は親から 30 万円を借り、住宅ローンで住宅を買い、残った 40 万は腎臓移植のため貯金しておいてくれと父と相談した。でも父は決して同意しなかった。彼は 70 万円で住宅を買ったら安心できると言った。その結果、親たちの貯金はなくなった。万が一父が腎臓移植をすることになったら、金は足りない。どうする。これに対して私は非常に心配している。偶にこのようなことを夢にみる場合がある。そして、驚いて目を覚まし二度と寝つけない」。

一人っ子の高い生活水準は、自分の努力で獲得したものではなく、親の支援によるものである。一人っ子の高い水準の生活は、親たちのストレスになってしまった。調査の対象としての L・Y 氏は、退職してから修理した中古の雑貨を売り、その収入は息子に与え、息子の外食とブランド品の購入費用になった。多くの親たちは苦勞し一人っ子たちの高い消費を支えている。そして、親世代は子世代からの「経済的搾取」に直面している。親からのものは全部「搾取」ではないが、親子関係は搾取者と被搾取者の関係であると L・Y 氏が指摘した。上述した現象は個別家族だけではなく、数多くの一人っ子家族にみられる。

第 2 節 親の競争に巻き込まれている一人っ子たち

1 消費の競争

なぜ一人っ子の消費が高いのか。子どもの要求、中国の住宅値段の急速な値上りなどは当然に大きな理由である。それ以外、一人っ子同士、あるいは一人っ子の親の同士に存在している消費競争も大きな理由である。簡単に言い換えれば、消費の競争というのは、商品の必要性によるものではなく、他人が買えないものを買うことである。

一人っ子である T・X 氏はつぎのように語った。「大学時代から、私は車で大学に行き、他の学生に羨ましく思われた。車で通学することは、当時、特別なことで、格好いいだと思っていたが、父が私に車を買ってくれたことは私にとって意外だった。そのとき、車は現在より高く、人々の収入は今より低かった。父は手数料込み 15 万元（およそ 300 万円相当）で、私に赤い乗用車を買ってくれた。そして、大学一年の後半から、私は毎日車で通学していた。他の学生はみんな羨ましく思ったが、私を批判する人もいた。同様に、MP3 や携帯電話を使ったことも早かった。大学の時、収入がなく、小遣いは全部父からもらった。実際、親へお願いしたことはなく、父が私にいろいろ買ってくれたのは多分メンツのためだろう」。

T・X 氏と話した後、T・X 氏の父にもインタビューをした。「うちの息子にケチなことはしない。他の子どもが持っているものならば、絶対息子に買ってあげたかった。メンツの意味も含まれていたかもしれない。僕はもう 50 何歳で、自分の収入も低くないし、お金があれば息子のために使いたい。息子に車を買うことによって、彼が楽しく、僕も楽しいよ」。インタビュー調査を通して、みえてきたのは、一人っ子家族のなかで、子どもは家族消費の中心となったことである。しかし、子世代のために使った金は基本的なニーズを満たすものではなかった。それは、誇示的消費を含む多様な消費動機をもっている。

一人っ子の子どもたちも、消費の競争に巻き込まれている。調査の対象である J・W 氏⁽¹⁴⁾ はいわゆる「土豪の家族」（非常に豊かな家族）に嫁入りした。J・W 氏の姑は 20

年前から離婚し、私営企業を起し、一人でJ・W氏の夫を苦勞して育てた。2012年、J・W氏の息子が生まれ、姑の宝となった。姑に、ベビー用品は全部一流品を買うようにさせられた。J・W氏と夫はともにサラリーマンであるため、普通の子ども服を買うことが多かった。そのため、J・W氏はよく姑と喧嘩した。

一年前から、姑は毎月10,000元（日本円で換算すると20万円に相当）をJ・W氏にあげ、「育児の特別支出金」と姑は言っていた。J・W氏は、姑の話したことを次のように述べた。「これから、私の孫の服は全部ブランド品を買おう。単品1,000元（日本円で換算すると1万7千円）以下のものは絶対買わないでほしい。お金は問題ではなく、友人に頼んで海外から買ってもいい。私の孫の服とか用品とかは、必ず新着商品で、セール品は買わない」。毎回J・W氏がお得なセール品を息子に買ったとき、姑によく怒られた。

両親の立場からみると、もしまわりの人は結婚するとき家と車があり、しかし自分の子供にそれがない場合、自分のメンツを潰されることだと思われる。G・K氏の例では、結婚する前に息子の要求が強かったので、しかたなく買った。G・K氏が、買わなくてもいいと思ったが、息子が強く望むので、G・K氏はしかたなかった。G・K氏はこのように語った。「僕は一生苦勞しており、野菜を買うときでも少ない金額にこだわり、一元でも節約したかった。車を買うためには、10万元以上必要になる。私にとって、何年間節約してもこれだけのお金はなかなか得られない。息子の要求の通り車を買ったのは、他人に負けたくないためだ。しかたないこと、なんだ」。

誇示的消費は、豊かな家族だけに存在している現象ではない。つまり、誇示的消費は家族の豊かさに左右されないのである。現在の中国では、持ち家と自動車の購入は家族の大きいな消費である。男性にとって、持ち家があり、自動車を有することは結婚の際に有利な立場に立てると思われる。

2 子どもへの過剰な期待

子どもに対する両親の要求は、全体的に厳しいものである。「第一世代の一人っ子」の両親の一部はよい教育を受け、高い社会的地位を持っている。このような両親の要求は、特に厳しい。L・C氏の両親は、典型的な厳しい親である。

L・C氏は次のように語った。「将軍の家柄から将軍の子が生まれる、という俗語がよく言われる。私の親は、自分たちの子どもは他人の子どもよりもっと優秀はずだと思っている。私の成績はよくないとき、親はすごく失望した。親は田舎の出身で、都市に移動した理由は、田舎の生活環境への不満足であろう。母は大学に入る前に農作業などに従事し、たくさんの力仕事をした。そして、母は力仕事が一生の仕事ではないと思った。父もそうだった。親は大学の入学試験を受け、大学に入ったため、力仕事から解放された」。

L・C氏は期待されて、さらに優秀なコースを目指した。「私も両親の影響で、自分も優秀だと思い始め、ちょっとずつ既定の生活圏から離れて行っています。入った大学は実のところとても普通の大学で、まあ、もちろん卒業したら就職は心配いらないですけど。でも、そういう大学の卒業生なら、済南市で仕事するなら、いい仕事や企業は見つからないと思いました。上海に行って修士課程に入って、まあこのように一步一步今までにきたといえますね。多少は両親の影響があったでしょうね。でも今の私の人生って、外にいる時間が長過ぎたかもしれません。実家から離れてもうおよそ12年になりましたね」。

客観的に評価すると、L・C氏は優秀な子であり、かつきれいな子である。勉強の成績もよい。両親は田舎の出身であり、ようやく中学の先生になり、あとは学校のリーダーになった。しかし、彼女の両親は彼女がきれいではなく、頭もよくないとつねに言った。「親はいつも一番厳しい言葉を使い、私を責めた」。

L・C氏は、責められることが理解できなかった。それには、彼女の両親の人生経験と緊密な関係があると思われる。「両親は田舎から都市部に移動したので、自分たちを勝ち組と思っている。学校で仕事しているため、たくさんの優秀な生徒と出会った。私を一番優秀な生徒と比べて、私の頭がよくないと思っただろう。親は比較的に優秀な人

なので、自分の子どもが他人よりよくないことを理解できない。中学時期まで、私はこのような理念で教育された。ずっと頭はよくないと思われた。大学院生になってから、私の頭は多少よいと思われた。実は高校のとき、私の成績は良かった。しかし、親が私をほめたことは一度もなかった」。厳しい家族教育はL・C氏を自立させた。彼女は自尊心が高く、勝ち組であり、自分の努力でもっと優秀になりたく思っている。さらに、将来、自分の子どもを教育するとき、両親の教育の欠点を避けたいと、L・C氏が語った。

L・C氏は自分の親子関係からみると、子どもにとって、一番大切なことは親の支えであると言った。「<世界に一つだけの花>という歌が歌ったとおり、他人と比べる必要はない。25歳以降、私はだんだんこのような考え方をもつようになってきた。しかし、幼児期から私はきれいではなく、頭がよくないと言われ、だれも私を支えなかった。私の生活は、両親の表情を見ながら送ってきた。うちでは、ごはんを食べるとき、話すことが禁止された。もし私が話したら、父が必ず私を責める。母が何も言わず、私をかわいそうな表情で見ている」。

X・B氏の父は大学の学長であり、X・B氏に対する要求も非常に高い。「私への期待と父の職業とは、深く関係がある。大学の学長であるため、父は若者の心理をうまく読み取れる。私にとって、父の厳しさは大きいストレスとなった。父は大学教育を受けたので、私も大学生になってほしいと希望した。小さい頃から、私は父からの大きなストレスがたまってきた」。X・B氏の反抗期は長く、家出もあった。初めて上海に行ったのは、家出のためであった。

上述したように、現在、中国での家族は、子どもへの期待が高まる傾向が鮮明にある。しかし、場合によって、高い期待は子どもたちの成長に悪い影響を与える。Z・F氏夫婦は両方とも一人っ子であり、6歳の女の子がいる。Z・F氏の娘は3歳からダンスを学び、そのためダイエットしていた。長年のダンスの厳しい訓練が原因となって、今年から彼女は腰と足によく痛みを感じ、ダンスをやめなければならなくなった。現在でも彼女が参加している教室は三つ以上あり、そのなかに、絵画、ピアノと算数がある。Z・F氏の娘はすでに教室が嫌いになり、よく親と教室の先生に嘘をつき、休んでいる。

この例をみると、子どもへの期待は当然であるが、子どもの身体と心理的な限界を考える必要がある。知能開発の教室は子どもの成長と合わせてもいいと考えられた。なぜZ・F氏の娘にそんなに多くの教室に参加させたかと聞いた。Z・F氏はつぎのように語った。「現在の子どもはみんなそうだ。まわりの子どもたちはみんな一生懸命勉強している。以前、私は彼女に勉強させたくなかったが、まわりの親はみんなそうだから、私もしかたなく勉強や習い事をさせた。子どもの間の競争は、ますます激しくなっていくから、一生懸命に勉強しても、みんなについていけない場合があり、勉強しなければ、絶対無理だ」。

子どもにあまり過剰期待しない、自由放任の親もいる。一人っ子の家族の雰囲気と子ども時代の経験は、子どもへの教育観念に大きい影響を及ぼした。楽しい子ども時代をもっていたD・B氏は、彼の小さい頃のことをつぎのように思い出した。「小さいとき、私は背が低いから、いじめられたことがあったが、楽しかった。小学を卒業する前に、塾に行ったことはなかった。毎日遊びばかりだった。夏休みに、毎晩友達と一緒にトランプをしたり、鬼ごっこをしたりした。すごく楽しかった。人生の一番楽しい時間だ。そのため、私は子どもにとって、遊びが一番よい勉強であると思う。息子の場合、彼自身が教室とか塾とか行きたかったら行かせる。そうではないと、私と妻は息子を塾に送ることに反対する」。

一人っ子の子どもは、全家族の成員から期待される世代である。親からの高い期待だけでなく、祖父母からの期待も負っている。彼らは「親になった一人っ子」の代わりに、家族の新しい消費の中心であり、精神的な中心となった。全体的に、一人っ子の子どもの生活条件は高くなり、知能開発のための出費も高くなったが、彼らの間に格差も大きい⁽¹⁵⁾。

各家族の状況が違うが、一般的に、親は子どもに、ハイレベルの暮らしをしてほしいと期待している。親の出身や職業や社会的地位などは、子どもへの期待に影響を与える。第一代の一人っ子の親の一部は、よい教育を受け、高い社会的地位を持っている。このような親の子どもに対する要求は特に厳しい。そのような親は、自分の子どもの知力が

高く、他の同年齢者より、優秀であると考えている。

親の教育レベルが高く、社会地位も高い場合、生活条件だけではなく、成績や知力、学歴なども比較対象となる。期待される視線のなか、なにごとにも他人と比較されることで、一人っ子は、大きな心理的なストレスをかかえるようになった。子どもたちは親世代の「代理競争」をしている。

また、現在、中国での社会的地位、特に獲得した金銭や職務上の地位などによって評価される。両親もそのような評価方法で自分の子どもを評価し、子どもも優秀な人材になれると望む。G・K氏は「多くの一人っ子がもう部長になった」と羨ましく語った。

一部の親の子どもへの期待は、比較的に簡単である。Y・F氏の母は代表的な一例である。Y・F氏は「母が一番誇りだと思っていることは、小さい頃から私が世話のかからない子だったことです。自慢するわけじゃないけど、よく人に話します。うちの子は世話要らずって。宿題をやるとか、誰と遊ぶとか、全く気にならなかったようです。だから私は小さい頃に誰と遊んでもいい、チンピラでさえかまわないと、母は思っていました」とY・F氏が言った。

他の一部の親になった母であるL・C氏は、自身の現状に基づき、次のように語った。「子どもへの注目は確かに多すぎだ。国内にいたとき、私と主人は毎日仕事が忙しいため、平日に息子は祖父母のところに預けていた。週末に子どもを自分の家に迎え、毎週土曜日に遊楽場に遊びに行き、日曜日は英語と音楽の学習だ。家族は子どもを中心にして、みんな忙しかった」。

F・L氏⁽¹⁶⁾の娘は現在2歳であり、6ヶ月から知能開発の教室に行き、その課程は主要な科目とほかの科目に分けられる。主要な科目は数学と言語であり、ほかの科目には音楽や美術などがある。2歳からF・L氏は娘を連れ、週二回教室に行った。毎回3時間かかる。F・L氏が言ったように、「最初、彼女は行きたくなかった。たまに行っても、どうしたらよいかという顔をみせ、あちこちを這い這いしただけであった。今、彼女はその教室が好きになり、友達と一緒に遊んだり知識を勉強したりしており、楽しんでいる。私は、彼女が知識を学べることは期待しない。同年者と一緒に遊ばせたいだけだ。

学費は私の町では一番高く、毎年 20,000 元だ。今年から幼児の英語教室に参加させるつもりで、そこも学費も高い。来年彼女は三歳になり、私は彼女を芸術的なスキル教室に参加させる予定だ。女の子だから、若い頃からバレエとか学ぶと、将来、気質と体形にすごくよい」。

現在、中国には F・L 氏のように子どもの教育に出費を惜しまない親は多くいるため、英語教室などの子供や幼児の専門教育教室の普及率は高くなった。

それに対して、一部の一人っ子の子どもは収入が低い家族に生まれ、基本的な生活水準さえ保障されない。C・E 氏⁽¹⁷⁾の息子はその例の一つである。C・E 氏と夫は両方とも肉体労働者であり、給料は低く、毎月二人の給料は合計で 5,000 元（日本円で換算すると 10 万円に相当）である。夫婦両方の親の健康状態がよくないため、子どもを世話することはできない。C・E 氏は、子どもを手伝いさんに預けて育てなければならない。部屋のローンもあるため、息子が生まれる前に生活がぎりぎりであったが、現在生活はますます厳しくなった。C・E 氏夫婦は、毎月部屋のローンとお手伝いさんの給料を除き、1,000 元（日本円で換算すると 2 万円に相当）だけの貯金しかできない。

育児の出費について C・E 氏は次のように語った。「私もいいものを子どもに買いたい。隣の子どもは、みんな高級な食べ物とおもちゃを持っている。それは私にとって想像できない出費だ。息子に申しわけないと思っている。息子は 1 歳から離乳し、それから自分で作ったおかゆを彼にあげた。粉ミルクが高いため、息子は粉ミルクを飲むことはなかった。2 歳の子どもの場合、普段一ヶ月 4 缶ぐらい粉ミルクを飲むとほかの母から聞いた。4 缶は大体 1,000 元かかる。私の給料が低いから、その粉ミルク代を負担できなかった」。

D・B 氏は、現在普遍に存在している親の子どもへの過剰な期待を、次のように客観的に評価した。確かに、天才は教育だけでは決められないものである。「中国の親はすべての人が、我が子がジョブズのようになってほしいと願っています。例えば、1000 人の中で 50 人はジョブズになる可能性があり、ほかの条件は足りなくとも、自分自身の素質だけは備えているとします。天才を育成しようとしたら、この 50 人だけに注目します。

この高知能の人、天才予備軍は、たとえジョブズになれないとしても、それなりの能力ある職業人になります。エリートを育成するのに、最も可能性があるのは先の 50 人しかいませんからね。ただ、これは「選民思想」とつながりやすい」。

全体的に言えば、一人っ子の子どもは、親世代よりもっとよい生活条件と教育条件に恵まれている。それと同時に、彼らは親世代よりも大きなストレスを負っている。そのような大きいストレスの原因はまず、大人からの期待、とくに祖父母からの高い期待である。

若い一人っ子は社会競争が激しいため、格差がしだいに大きくなった。それに従って、一人っ子の子どもの間における格差も拡大した。この格差は生活状況に存在しているだけではなく、知識などの格差も大きくなった。

【注】

- (1) C・Q 氏、男性、33 歳、大学卒業、未婚、私営会社の社員である。個人情報の詳しくは文末に記載している。以下の調査対象も同様である。
- (2) L・C 氏、女性、30 歳、既婚博士、3 歳の子どもをもっている。現在、日本の大手会社に仕事している。給料は約毎月 20,000 元。住宅をもっていない。
- (3) Y・F 氏、男性、34 歳、既婚、博士、大学に人事管理に関する仕事をしている。親の支援で 100 平方メートルの住宅を買い、その住宅の位置と学区はよい。
- (4) N・P 氏、男性、29 歳、未婚、短期大学卒業、卒業してから兵役を服し、現在タバコ工場で働いている。短期大学にいた頃、親は N・P 氏に新婚用住宅を買い、親の家と同じ建物に住んでいる。その住宅は 80 平方メートルである。
- (5) C・Y 氏、女性、33 歳、既婚、高校卒業、アルバイトで生活している。C・Y 氏と主人は持ち家を持っていないため、C・Y 氏の親と一緒に住んでいる。
- (6) 中国大多数のバスは定価を 1 元と 2 元に設定し、基本的に同じ線路は 2 種類の価格が自由に選べられる。1 元のバスは一般車でエアコンがなく、2 元のバスはエアコンつきである。
- (7) 劉佳「中国における一人っ子の親子関係に関する研究」『政治学研究論集第 39 号』明治大学政治経済研究科、2012 年、41～55 ページ。
- (8) 石燕『独生子女家庭関係及其影響因素研究——以鎮江市為例』江蘇大学出版社、2011 年、101 ページ。魏莉莉『「90 後」与未来国家競爭力』上海人民出版社、2013 年、28 ページ。
- (9) A・G 氏、男性、34 歳、既婚、高校卒業、国有工場で働いている。5 歳のとき A・G 氏の父が亡くなったため、母一人で彼を扶養した。結婚用住宅を買えないため、A・G 氏夫婦は現在 A・G 氏の母と一緒に住んでいる。
- (10) N・S 氏、31 歳、離婚、大学卒業、日本に留学した経験があり、国有企業に就職した。N・S 氏の親たちは住宅ローンで彼に歴下区に 150 平方メートルの学区の住宅を買った。
- (11) X・N 氏、男性、32 歳、既婚、大学院卒業、上海における科学院に就職した。X・N 氏の家族は豊であり、父は大学の学長である。X・N 氏の結婚用住宅は親たちが

買った。150 平方メートルであり、停車位置などの施設もつれ、学区もよい。

- (12) Y・Z 氏、60 歳、既婚、高校卒業、元国有企業の工場労働者であり、レイオフされた経験がある。は少ない。Y・Z 氏は息子に新婚用住宅を用意するため、田舎に引っ越し、住んでいる住宅を息子にあげた。
- (13) T・X 氏、32 歳、既婚、大学卒業、国有企業に就職し、課長である。T・X の父は腎不全であったが、看病用の 70 万円で TX に 100 平方メートルの新婚用住宅を買った。
- (14) 女性、30 歳、短期大学卒業、夫婦二人とも一人っ子である。看護婦として仕事している。今 2 歳の息子をもっている。
- (15) 梅瑛迪・陳統奎「中国特有の一代——独生父母」『社会掃描』2006 年第 11 号。
- (16) 女性、31 歳、大学卒業、現在陕西省に住んでおり、家庭主婦である。夫婦二人とも一人っ子である。
- (17) 女性、34 歳、短期大学卒業、主人も一人っ子である。自動車学校会計として仕事している。今 3 歳の息子をもっている。

第二章 一人っ子家族における親子関係の実態Ⅱ

今回筆者は、一人っ子家族の聴き取り調査から多くの第一次の資料を獲得した。論文の構成を考え、筆者は親子関係の実態を二つの章に分けて分析する。以下は、一人っ子の優越感と親子間の対立などの項目を中心にし、親子関係の実態を考察してみる。

第1節 一人っ子の優越感と危機感

1 一人っ子の優越感

今回調査した 32 ケースの一人っ子家族のなかに、一人っ子は 29 人、一人っ子の親は 10 人であった。22 人の一人っ子は既婚で、ほかの 7 人は未婚である。既婚者全員 22 人は、結婚する前に新婚用住宅を持っていた。未婚の 4 人も新婚用住宅を買っていた。一人っ子の親たちは、誰もが子どものために住宅を買い、よい住宅を子どもに住ませたがることはなぜであろうか。聴き取り調査から、新婚用住宅は一人っ子の配偶者を選ぶことと、密切な関係があることがわかった。

N・P 氏の母が言った。「うちの子の例で言えば、彼の仕事はいいし、見た目も格好もいい。いい配偶者と結婚することは、難しくないはずだ。でも、もし、私が彼に家を買わなかったら、だれが N・P と結婚するのか。私はテレビの番組で、子どもに家を買わないで、親と一緒に住ませると提唱する人を見た。でも、現在の結婚した一人っ子たちは、みんな親と一緒に住みたくない」。

新婚用住宅を持っている N・P 氏との会話からは、優越感を持っていることが明らかに感じられる。配偶者を選ぶ際、彼も心の余裕を持っている。N・P 氏がこのように言った。「私は今 29 歳だけど、配偶者を求めることは、まったく急がない。私の個人的条件はいいから、心配しない。工場で働いているので、毎日疲れる。でも私の給料もよく、一ヶ月 9,000 元（日本円で換算すると 16 万円に相当）ぐらいだ。父と母の給料も低く

ないし、父は会社で副社長をしていて、母の退職金も高い。私は、今、持ち家がすごく大切だと思う。私はお見合いに何回か行った。お見合いに行ったとき、相手が一番気にしたのは、持ち家があるかないかということであった。お見合いの相手のなかに、何人かは私が好きだと言ったけど、私はもっといい彼女を探してみたい。私は、今、持ち家と車を持っているから、自分で好きな人を探してみたい」。N・P氏と彼の母の話を聞き、新婚用住宅は住むためのものだけではないと考えた。新婚用住宅があるかないかということは、配偶者を選ぶことと密に関連しているのである。

Y・F氏の例からも、新婚用住宅と配偶者探しとの関係がよくみえた。「実は、妻が私を選んだのは、私の仕事と持ち家が決め手であった。私は山東省の一番いい大学に就職し人事管理という仕事をしており、妻と彼女の母は、私のそれらの条件に満足した。私と妻はお見合いで知り合い、彼女の母のクラスメートが、私たちを紹介した。初めて合ったとき、妻は、彼女の母と一緒に来た。彼女の母は、たくさんのことを詳しく聞いた。私は金持ちの息子ではないから、正直に聞かれたことを答えた。私が持っていないことは、『ない』と言った。私は、自分が優秀だと思っている。私は一流の大学に仕事しており、子どもがいたら、済南市で一番よい付属の小学校と中学校に入学させることができる。私の家は一流の学区に付属しているから、住宅の価格も高い」。

一人娘に新婚用住宅を買った親も、だんだん増えてきた。娘が住宅を持ち、安定している生活ができるため、一人娘の親たちも家を買う責任を果たす。新婚夫婦が家を買えない場合、一人息子の夫の親たちの責任はもっと重い。

居住するため住宅を買った例は多いが、ほかの目的で子どもに新婚用住宅を買った例もある。一人っ子家族の財産継承者は一人っ子しかいないため、一部の一人っ子の親は子どもの名義で家を買ひ、早めに親の財産を子どもに贈与する。娘に新婚用住宅を購入した例は少ないが、調査対象のなかに、親は娘が婚姻する前に家を買ったケースもある。

Y・J氏の娘は国有企業の社員であり、娘の夫は市役所の公務員で、彼女は普通の一人っ子より豊かだと言える。Y・J氏の娘の夫は新婚用住宅を買ったが、Y・J氏は、彼女の名義でよりよい地域にある100平方メートルの住宅を買った。なぜ娘にそんなによ

い住宅を買ってあげたのかと聞かれた際、Y・J氏は次のように言った。「私たちは娘一人しかいないから、家の財産とか家とかは、将来、全部娘に残すことになる。私と主人が相談し、遅かれ早かれ家のすべては娘のものだから、早いうち娘に上げほうがいい。早くあげたら、娘もありがたく思う」。

調査からみると、現在中国において、新婚用住宅は結婚の条件になった。新婚用住宅を親からもらえる一人っ子たちは、二つの優越感をもっている。一つは、経済上の優越感であり、二つ目は、配偶者を選ぶことで表れる心理的優越感である。根本的に、この二つの優越感は住宅などの財産から生じる。つまり彼らの優越感は親からもらえるものである。しかし、一人っ子がもっているのは、すべてが優越感ではない。一人っ子の生活からみると、潜在的危機も多くある。

2 潜在的危機感

調査からみると、一人っ子が結婚する前に、生活の危機は少なく、親子関係の対立も少ない。一人っ子の次世代が生まれてから、問題は次々に出てきた。

現在、第一世代の一人っ子が出産期に入っている。第二世代の一人っ子の子育ては大きな問題となり、広く注目されている。今回聴き取り調査した32ケースの一人っ子家族のなかで、出産した第一世代の子どもを、第一世代の両親が代わりに子育てしていることが非常に多い。「母が出産し、お婆さんが育てる」という言葉は都市部の流行語になっている。

第一世代の一人っ子同士の夫婦家族が、若者同士によって構成される家族の大多数を占めている。その場合、もし子どもが生まれたら、だれが子育てをするのか。聴き取り調査によると、全国では、45.7%の一人っ子の子どもは、お婆さんに養育されている。都市部の比率はもっと高く、北京ではその比率は70%といわれている⁽¹⁾。

この状況に若干の問題点がある。G・K氏の家族の場合、「妻のお母さんと一緒に暮らしているので、息子はお婆さんの世話で成長したが、溺愛された。お婆さんは伝統的な

中国女性だから、彼女の教育理念は古くてダメである。僕はずっとそう思っていたが、しかたない。小さい頃、うちの息子はすごくずるくて手に負えなかった。僕が息子を叩いたとき、お婆さんは、棒で僕を叩いた。そうしたら、息子は僕が怖くなくなった。僕の教訓として親子三人家族の場合、祖父母と同居しなくてもいい。子どもの世話を自分でやったほうがいい」。

子育ての主体は両親であるべきだと思う。家族内で両親の地位が弱い場合、家族対立など社会的問題となる⁽²⁾。G・K氏は息子への教育は大失敗だと思っている。「僕の家族では、お婆さんは一番年齢が上の人だから、彼女に反対することは失礼だとみられた。子育てもそうだ。考えが異なるとき、彼女の意見を聞かなければならない」。「長い間、お婆さんと一緒に住んでいたから、親子三人の家族は、お婆さんに依存してきた。一般的には、お爺さんとお婆さんは孫をかわいがる。彼らと一緒に住んでいたら、子どもが甘えっ子になる可能性がより高い。子育ては両親の責任で、他人に頼ることはダメだ」。

G・K氏が繰り返し筆者に言ったのは、「子育てを親に頼ってはいけない。自分の努力で世話をしたほうがいい」。一人娘であるM・T氏の考え方も一緒である。「まわりの友達が、子どもを世話させるため、どこにでもお母さんを連れていく。私は、子どもの世話を母に頼らない。母に子育てさせることは、恥ずかしく感じる。親に頼ることより、ヘルパーを頼んだほうがいいと思う」。

数多くの一人っ子の両親は、一人っ子だから甘やかされて育てられたため、子育ての能力がないと、周囲に思われている。他方、子どもの数が少ないため、一人っ子の両親は、孫を世話する時間が十分ある。現在、中国では一人っ子家族の子育て問題が社会的に注目されている。

「親になった一人っ子」は育児の難しさに直面しなければならない。調査に基づき、「親になった一人っ子」の育児の難しさは次の四つまとめられる。第一、育児の高い出費、第二、祖父母の過剰介入、第三、子どもへの過保護、第四、親になった母の悩み、である。

まず、育児の高い出費といえ、現在、食品安全問題のため、中国の親は海外から粉

ミルクなどのベビーフードを購入することはよくみられる。輸入食品が国産食品より高いため、育児のコストは高くなった。環境汚染と民衆の食品問題への心配は、育児の出費を高めた。輸入食品への態度は違うが、両親が環境と食品問題を心配することは一致している。

F・L氏⁽³⁾は「洋奶粉」(外国から輸入した粉ミルク)について、つぎの話を語った。「私にとって、娘の健康によいものであれば、値段は気にしない。娘は、生まれてからずっと外国の粉ミルクを飲んで、日本からのものもあるし、シンガポールからのものもある。友人に頼んで、買ってきてもらった。通信販売で外国から郵送させたりしている。時間もかかるし、面倒くさいけど、子どものため、しょうがない。」

これに対して、D・B氏は、「洋奶粉」は気にしないと語った。「私の同僚は、たびたびアメリカに出張している。同僚に、アメリカから粉ミルクを買ってきてもらうことはできる。でも、私はアメリカから買ってきてもらわなかった。私は、粉ミルクと健康との関係は少ないと思うからだ。今、子どもたちはきれいな環境に暮らしていないから、粉ミルクだけ変えても、健康への影響は少ない。」

子どもへの出費といえば、主に二つある。その一つは、子どもの知力開発に関連する用品(例えば、外国語を学ぶためのレコーダー、カードなど)である。もう一つは、車・住宅などの子育て関連の消費項目である。これは若い「親になった一人っ子」にとって負担が大きい。そのなかには、子どもの基本的なニーズを超えた出費項目も含まれる。そうであっても、一人っ子の両親は、経済状況が許す限り子どものニーズを満たす。

D・B氏は二歳の息子の基本的な消費以外の消費状況について、以下のように話した。「出費が比較的が多いのは、おもちゃである。多数のおもちゃはネットで買った。息子はたくさんおもちゃをもち、あちこちにおいてある。週末には、私と妻は車で息子連れ、近くのモールで遊ぶ。そのようなところでは、食べ物とか飲み物とか、何でも買える。子どもに買う食品は、必ず高品質のものである。それに対していろいろ考えがある。息子には無添加の食品を飲食させたいから、飲み物は全部新鮮なジュースである。遊樂場に行くこともお金がかかる。一年間で、1,000 元(日本円で換算すると1万7千円に

相当) 以上である。」「車を買ったのも、息子のためである。あの車は二年間に 10,000 キロメートルを走行したが、主に子どものために使った。息子は病気になれば、すぐに車で病院に送った」。

住宅ローンに苦しめられている人は中国語で「房奴」と呼ばれるように、子どもの出費負担に苦しめられている人は中国語で「孩奴」と呼ばれる。これは「育児の難しさ」の経済的負担を表している。一般的に、「親になった一人っ子」は大体 25~35 歳であり、キャリアは最初のステップ、あるいは上昇期である。また、現実を超えた消費行動のため、「親になった一人っ子」の多数は、貯金が多くない。消費計画がないことは、一人っ子の消費の特徴といわれた⁽⁴⁾。

T・X 氏⁽⁵⁾はその例の一つである。貯金の意識がなかったため、子どもの出費がかかったときには、親からもらえた。「息子が生まれる直前に、私と妻の月収は合計で 6,000 元（日本円で換算すると 10 万円に相当）あった。もうすぐ息子の予定日となり、私は出産費用が不足しているからすごく焦った。お金がなければ、入院できない。しょうがないから、親に援助をお願いし、20,000 元（日本円で換算すると 34 万円に相当）をもらった。しかし、20,000 元はまだ足りなかった。子どもの臍帯血を、保存してほしいからだ。それも高かった。そして、息子が生まれた後、黄疸が出たためすぐ入院し、10,000 元がかかった。だから、子どもの出産のため、多くのお金を両親からもらった。その後、貯金の大切さを知り始めた」。

上述した育児の出費以外に、祖父母の孫の世話への過剰介入は大きな問題である。夫婦だけで子どもを世話している、「親になった一人っ子」は少ない。仕事のため、多くの「親になった一人っ子」は子どもを親の家に預けて子育てしてもらおう。一人っ子の両親たちは、子どもの代わりに孫を世話している。これは、中国の深刻的な社会的問題の一つとなっている。

次いで、中国では子どもを世話しないのは、親失格だと言われている。しかし、一人っ子家族の多くの子どもは、祖父母の世話を受けている。言い換えれば、「親になった一人っ子」の育児様式は祖父母の世話を主とする。C・L 氏が言ったように、「まわりの

一人っ子の母はみんな一人っ子に付き添う。孫が生まれてから、孫を世話するため、少なくとも半年ぐらいいは、一人っ子と一緒に住んでいる」。

実際、一人っ子自身は祖父母の世話のデメリットを実感している。C・L氏は、出産する前に母が育児を助けることに、激しく反対した。「その理由といえば、まず、私は自分で子どもを世話できると考えた。もう一つの理由は、私の親は孫を溺愛することだ。また、母に家事させれば、恥ずかしいと感じる。むしろ母にさせるよりも、私がお手伝いさんを雇用したい。」多くの祖父母の世話のデメリットがあるが、C・L氏と夫両方とも仕事が忙しく、子どもが半年間は保育所に入れないため、C・L氏は母を日本に迎え、子どもの世話をしてもらった。

中国では、昔から子どもを甘やかして育てるという伝統があった。それは過保護、あるいは必要以上に世話をするということである。昔から、子どもの甘やかしを表す「嬌生慣養」⁽⁶⁾という中国語の表現があった。ほかの国と比べると、子どもへの過保護がみられる。

アメリカで仕事しているD・B氏は、アメリカと中国の育児を次の例で比較した。「アメリカに中国と異なる現象がよくみられる。子どもの例でいうと、私はよくアメリカの海辺に遊びに行って、ちょっと歩けるくらいの赤ちゃんが、自分であちこち歩くという場面がよくみた。大きい犬にぶつかって転んでも、親も平気だ。中国の子どもが転んで倒れたら、家族全員はあわてて駆け寄り、すぐに抱き起こされる。カリフォルニア州の海辺はきれいだけど、普通のアジア人が我慢できないほど寒い。風が肌を刺すから、大人は夏でも水着の上になにかを着ないと、寒く感じる。しかし、欧米人は一般的に寒さに強く、彼らは海辺から赤ちゃんを連れて海水に入り、海水浴をしていた。水も冷たかったから、当時の私はびっくりした。上海では、このようなことは想像できないことで、中国の親の目でみると、それは虐待にすら見えた。」

また、「親になった一人っ子」の間で、子育ての責任は異なる⁽⁷⁾。一般的に言えば、母のほうは責任が重く、母より父の責任が少ない。母になった一人っ子は特にそうであり、子どもと仕事は二者択一である。D・B氏は、妻の例についてつぎのように言った。

「妊娠する前に、私は妻の仕事を辞めさせた。妊娠の準備と妊娠期は二年間であり、そして授乳期は一年間であり、合わせて妻は三年間、仕事をしていなかった。」激しい社会競争のなかで、三年間仕事しなければ、キャリアの大きな損失になるかもしれない。それに対して、父としての一人っ子 D・B 氏は、つぎのように語った。「子どもが生まれた初期に、私はまったく子どもの世話ができなかった。逃げたいことも、よくあった。あの頃、毎日会社で残業したかったのは、家に帰りたくなかったからだ。一歳までの赤ちゃんは、何もできないし、話せなかったし、いつも寝たり、泣いたりしていた。だから私は残業が最高だと思った。一歳になると、私はだんだん子どもが面白いと思うようになった」。

そのほか、近年海外に住んでいる人が多くなり、そのなかに「親になった一人っ子」が多くいる。仕事などのため、子どものそばにいない親にとって、インターネットなどの電子手段を借り、毎日子どもと連絡することが多い。遠くても、たとえ海外にいても、コンピューターを利用すれば子どもとの距離はなくなる。少数ではあるが、親子関係は新しい情報化時代に入った。一般的に、親は子どものそばにいることはよいと考えられた。ネットでの育児は、子どもの心理に影響があるかどうかはこれまで究明されなかった。

二人っ子の家族では、父親は育児に、一人っ子家族より責任を持っていると思われる。二人の息子を持っている一人っ子の J・J 氏は、次のように話した。「利己的な角度から言えば、二番目の子供は産まないほうがいいです。体にも心理的にも、本当につらいです。大切なのは二人の子ども間の関係です。特に長男の気持ちです。X・F（長男、2 歳）は次男が生まれる前に、X・M（次男）が生まれたら一緒に遊べるなんて言って、精神状態は良かったのです。ところが、本当に生まれたら、X・M はまだ一緒に遊べないとか、ママが X・M に授乳しなければならなくて X・F と遊べる時間が少なくなったとか、ママが前みたいに約束どおりお話をしてくれないとか、X・M が寝る時にママにあやさなければならぬとか、次男がママを奪ったことに気づきました。私が長男をかまわなくなったら、彼は不機嫌になります。長男は普段次男にチューしてあげますが、自分が

可愛がってもらえなかったときは泣いたり、ひどい時は次男を叩いてしまいます。やめさせようと、私は叱ったけど、効果はよくなかったです。長男は、理屈は分かりますが、感情的になった時、理屈を忘れてしまいます。仕方ないですね。まだ二歳の子供ですもの。だから今は、長男が次男をたたかせないようにしています。危険なことが起こらないよう、よく注意するしかありません」。

「それに次男が生まれた後、嫁である私との関係は、前より厳しくなりました。やる事が多くなって、皆、疲れているせいか、すぐかんしゃくを起こしてしまいます。姑は時々長男に、これがダメだよとか、殴るよとか、脅しをします。私はこんなのが嫌なんです。長男だけの時は、姑と一人のお手伝いさんで十分でした。私の父は、五年前に肺がんで手術を受けたことがありますから、母は父の面倒を見なければならないのです。それでたまに来るだけでした。でも次男が生まれたら、母も手伝いに来なければならなくなりました。夫は単身赴任で月に一回家に帰るだけ、子育ては全て私に任せています。母が次男、姑は長男の世話をしてくれます。ですから、次男が生まれた後、家族全員が動員されたので、皆が明らかにづらくなりました。だから、もし二番目の子を産むかどうか聞かれたら、産まないほうがいいと思います。本当につらくて、負担も重くなります」。

子どもが結婚してから、親子関係を維持することは二つある。子どもにとって、一つは親からの経済的支援であり、もう一つは親の老後問題である。しかし、現在中国の若者は、家の購入や仕事など多くの現実的な問題に直面しているため、伝統的な親孝行がますますできにくくなっている。

日本で就職した一人娘 M・T 氏は、親の介護問題を次のように考えている。「できるだけ親孝行をしようとおもっているが、しかし、もし親に仕事を辞め、故郷にもどってこいと要求されたら、無理だと思う。他のことなら全力を尽く。日本で仕事しており、給料はわりと高いので、時間があれば、一年に数回は家に帰る。両親が日本に来たら、私は案内する。しかし、故郷に帰って、毎日親のそばにいることはありえない」。

M・T 氏の例をみると、現在の若者は、多忙な仕事の中で、多様な親孝行の方法を

試しているが、自由が束縛される伝統的な親孝行は、ますます難しくなった。M・T氏の両親も、彼女にそばで親孝行することを強く求めている。「母と性格が合わないから、私と別居したほうがもよりよいと言った」。現在、仕事のため、両親のそばにいない一人っ子が多く、彼らと両親の間には、老後問題に関するいわゆる暗黙の了解がある。親は子どもの邪魔をしない。子どもは多くの現実的な問題があり、自分で親を介護することは困難だとわかってきた。

一人っ子家族では、子どもが他の都市で就職した場合、家族は両親だけになってしまう。これは現在一般的な社会現象であり、子どもは親のそばで親孝行するという、伝統的な介護方式が崩壊した。G・K氏は、今、住んでいる居住区の数多くの家族は、両親だけだと指摘した。「両親だけになるのは、誰も見たくない事実だ。子どもはみんな親孝行をしたいが、現在の若者にとって、社会競争が激しいので、なかなかできない」。

これから、第一世代の一人っ子の両親はだんだん高齢期に入り、病気になる可能性がある。介護などの老後問題は、すでに現実的な問題となった。大学院生であるE・O氏は、もう親の介護を心配し始めた。「小さい頃に、おじいちゃんとおばあちゃんがなくなったことをみて、高齢者は弱く、生きる時間が短いと感じました。私の親孝行できる時間はどのくらいあるのかとよく考えています」。

病気と老化は、人間が直面しなければならない問題である。特に結婚した一人っ子であるN・S氏にとって「親への経済的な支援も必要だが、経済的な支持だけでも不十分である。一人で両親の老後の扶養の責任を負い、もし父あるいは母が病気になったら、介護も必要となる」。一人っ子家族の場合、介護問題がさらに難しくなり、だれかが病気になったら、生活は混乱に陥る。親にとって経済的な支援より、もっと大切なのは、子どもによる介護である。しかし、「極端な場合、親二人が同時に病気になった例もよくみられる。子どもの責任とストレスが非常に大きく、溺愛された一人っ子はそのストレスに耐えられるかどうかは疑われる」。

一人っ子の両親の介護の場合、一人っ子家族における一番大きい問題は、人手不足である⁽⁸⁾。「子どもが二人いる場合、介護のストレスは半分となる。経済的な支援もそう

だ」。この考え方は簡単すぎという感じもあるが、介護の困難があったとき、人手が多いほうがいいと、一般的に考えられる。

現在、介護の人手不足の問題は、主に家族自身で解決されている。親友の助けを求める必要もある。M・T氏が現在考えているのは、「母の場合、将来介護が必要な時、親友から助けてもらえる可能性が高い。母は若い時、自分の努力で兄弟たちを助け、農村から都市部に移動させた。彼らは、いま、私の家の近くに住んでいる。母はいつも兄弟を世話してきたから、介護が必要な時、兄弟は母を介護すべきであろう。私は、ほかの介護の人を頼まなくても大丈夫だと思う」。

寝たきりの場合、親友だけの力で介護することはあり得ない。M・T氏は他の介護方法を考えた。「父だけ残って、もし父が再婚したい場合、私は反対しない」と彼女は言った。要するに、M・T氏はヘルパーを雇用すること、時には親友の力を借りること、そして父を再婚させること、という介護方法を考えている。

前述の介護方法は社会介護ではなく、家族介護という伝統的な手段に属する。新しい介護方法、例えば老人ホームなどは、家族介護の人手不足の問題を解決する有効的な手段である⁽⁹⁾。しかし、現段階における老人ホームの格差は大きいので、人々の老人ホームに対する見方が異なる。インタビュー相手のなかで、多数の一人っ子は、将来、親が老人ホームで介護されることを期待している。

老人ホームの料金の支払い方法について、本人が払う、子どもが代わりに払うほかに、持ち家での支払い方法がある。持ち家は、高齢者の介護の保障となっている。したがって、G・K氏は、持ち家の名義が自分かどうかということが気になっている。「持ち家の名義が私だったら、老人ホームに受け入れられる。いまの持ち家は私の名義ではないので、老人ホーム入所は難しい」。

子どもが一人しかいないため、一人っ子は、親から財産を独占的に継承することを当然と思っている。また、新婚用住宅を持っている一人っ子との会話から、優越感を持っていることが明らかに感じられる。配偶者を選ぶ際、一人っ子はより余裕を持つ。新婚用住宅は住むためだけではないと考えられるべきであろう。新婚用住宅があるかないか

ということは、よい配偶者を選ぶことと関連するからである⁽¹⁰⁾。

一人っ子たちも危機感を持っている。親の老後の介護は、その危機感の重要な要因の一つである。現在、中国の若者は、仕事などの多くの現実的な問題に直面しているため、伝統的な親孝行を行えなくなっている。子どもは、親のそばで親孝行するという伝統的な介護様式が崩壊しているといえる⁽¹¹⁾。

一人っ子家族のなかに、子どもが他の都市で就職した場合、家族は、両親のみが生活している空の巣になってしまい、多くの中高年期の家族は空の巣であると指摘した⁽¹²⁾。介護などの問題は一人っ子家族における現実的な問題となった。一人っ子の親たちはその問題を早めに意識し、介護に関する思考と準備は多いことが調査から知ることができる。

第2節 親子間の対立

1 結婚・出産をめぐる家族関係の対立

子どもを産むと、一人っ子は親になる。そして、一人っ子の結婚・出産をめぐる家族関係に関連する研究は、必要である。結婚・出産のため、家族関係がよくなる例はあるが、私が聴き取り調査で受けた印象としては家族関係が対立するほうが多かった。その対立は、主に一人っ子と親の対立と、一人っ子と配偶者の対立としてあらわれる。

一方では、「多数の一人っ子は、自分の意志で自分のことを決めたく、他人に変えられたくない⁽¹³⁾」。それは一般的に一人っ子が持っている強い「自己意識」と呼ばれる。今回聴き取り調査の実感もそうである。特に結婚・出産活動のなかに、一人っ子の強い「自己意識」が表れた。

結婚・出産についてL・C氏⁽¹⁴⁾は次のように語った。「どんなことをしても、自分のためにしたのだったら絶対に後悔しない。私は親のためではなく、自分のために結婚した。出産も同じ、子どもは欲しいとき産む。」F・Y氏も人生の経験に基づき「自主放任」を強調した。「就職や結婚や留学などは、全部自分で決めたことであって、出産も自主

的に決めたい。親の教育の最も成功したのは＜自由放任＞だ。」

しかし、経済的な原因で、現在多くの結婚した一人っ子は独立して暮らせない。近年、中国の都市部の住居と車の価格が高騰し続けているため、親のすねかじりは、無力な若い一人っ子の選択となった。夫婦二人とも一人っ子であった家族に関する最新調査の結果によると、結婚のため新しい住居を購入する際に、約70%の一人っ子は親の経済的な援助をもらい、自分で住宅を購入した一人っ子はわずか5%である⁽¹⁵⁾。F・Y氏はすでに十年以上中国の一流大学で仕事していたが、すねかじりの話題を言及した際に、「僕は心からすねかじりをしたくないが、実はしていた。僕の場合に、主に家を買うため親のお金をもらった。親は現在でも時々僕にお金をくれようとするが、僕は受けとらない」といった。

他方では、一人っ子の結婚・出産活動は親に干渉され、自分の望みのとおりに行われない。出産について、多数の調査対象は、子どもができる前に親に催促されたことがあると言った。D・B氏の例をみれば、彼の両親の孫への期待がはっきりみえた。「妻が妊娠する前、毎月、父は妊娠について間接的に聞いてきた。例えば、『最近体の調子はいいか?』というメッセージを送ってくれた。父は、妻が妊娠したかどうかと聞いたかったのだ。私は結婚した後ずっと忙しかったため、そんなに早く子どもを持ちたくなかった。当時、出産時期を決めたのは親だった。」

F・Y氏も親からのストレスをもっている。「親は孫の出産を期待しているが、直接に催促したことはなかった。彼らも困っている。一方では孫がすごく欲しい。他方では僕たちにストレスを与えたくなく、妻を怒らせたくないからだ」。

Y・H氏の話によると、一生後悔していることは、大学の初恋の彼女と結婚できなかったことである。二人が別れた理由は、双方の親の反対であった。Y・H氏が次のように話した。「私は小さい時から父を亡くし、母の収入も非常に少なかったので、家はあまり豊かではありませんでした。大学に入って、母からお金をもらいたくなくて、アルバイトや奨学金を申し込みました。それで、冬休みと夏休みもあまり家に帰らず、機会があるたびに、アルバイトをして生活費を稼いでいました。大学期間に、クラスメート

の女性と恋をしていて、大学二年の時から、3年間付き合いました。私達の関係も良く、彼女は優しくて、いつも私のことばかり考えてくれました。彼女はクラスで一番の美人だと思っていました。私達と一緒に大学院生の試験を受け、卒業後一緒に仕事をさがしました。いろいろな経験をしました。あの時、私達は学校の近くで部屋を借りて、同棲していました。夫婦のような生活をしていて、幸せでした。そんな生活が約2年間続いて、大学三年の時から卒業一年後まで、彼女のご両親は、彼女と私の別れを強引に要求しました。」「どうして彼女のご両親にこんなに猛反対されましたか。」と筆者が聞いた。

「双方の家族状況、特に経済的格差が大きかったからです。彼女のお父さんは私に電話をかけてきて、外のレストランで2回話し合いました。私の家はそれほど裕福ではなく、父がなくなってから、母が私を育て、いろいろ苦勞しました。別に金持ちではなかったし、大した社会的地位もなかったです。しかし、彼女の家族は違います。彼女のお父さんは軍の高級軍医で、職位が高く、権利もあります。彼女は一人っ子なので、お父さんに可愛いがられています。彼女のお父さんは道理をわきまえている人と見えて、私を叱ることもありませんでした。君達は若すぎて、物事を深く考えることができなく、人生の大事なことはやはり親の話を聴くべきだと、辛抱強く言いました。それから、私の母も反対しました。自分の家より暮らしがかなりいい女の子と付き合っただけで、家族の生活状態が同じである子、或いは自分の家より暮らしがよくない子がほしいと。私達には、大きなショックを与えました。何年も恋をして、一生一緒に暮らしていけるとずっと信じていました。私達の別れについて、私と彼女はすごくショックを受けて、離婚と同じぐらいの感じでした。」とY・H氏が答えた。「今、各自の生活はどうか。」と筆者が聞いた。Y・H氏が以下のように答えた。「私はまあまあだと言えます。彼女は、あまりよくないそうです。今年、大学卒業10周年の同窓会で彼女に会って、話しかけました。両親に大反対されて彼女と別れた後、私は昔の都市で暮らしたくなかったのも、済南から青島に来ました。私は済南以外の処の仕事を探していました。そして、青島にある銀行に雇われました。最初は銀行の職員を担当して、その後チャンスがあつて、支店の頭取アシスタントに抜擢されました。その後、私は仕事のことばかり考えていまし

た。努力の結果、今はその支店の支店長になりました。銀行でわりに若い中級の幹部になり、仕事に成果をあげていると言えます。妻は青島出身で、私と3年前に結婚しました。娘は2歳以上、私達の収入も少くないです。生活は悪くありません。でも彼女は良くないそうです。同窓会で、彼女は息子連れて参加しました。私と別れた後、彼女は長い間見合いを断って、その後、彼女のお父さんが紹介した、お金も地位もあるニューリッチと結婚しました。ほかのクラスメートによると、彼女夫婦はあまり仲が良くないそうです。夫は息子に関心を持っていないだけでなく、家に帰らないことも多くて、子育てはほとんど彼女に任せっぱなし。同窓会でさえ、息子を連れて来ていました。その時私たちは、一緒にお酒を飲みました。もし私達が結婚したら、息子も3歳だと、私は冗談半分で言いました。そうですね、私も後悔していますと彼女が話しました。最後に、私は彼女の息子を抱きしめましたが、あの子はおとなしくて、私も親しみを感じました。」

「自由放任」と干渉することは、両方とも親子間の対立の理由であり、親子関係に良くない影響を与える、といえよう。

2 二世代の生活習慣トラブル

以上の調査から、一人っ子は、結婚後に親と一緒に暮らしたくない気持ちがよく分かった。一人っ子の親は、子どもと一緒に暮らしているか。「二世代の人は一緒に暮らせないですね。三世代さえ駄目だから、二世代は更に駄目です。例えば、食事です。彼らは（子供たち）は塩分がないと思った料理が、私たちにはちょうどいいと思うのです。私たちはやわらかいものが好きで、料理もやわらかめに作ります。でも彼らはこういうのが嫌いで、炒めすぎと思うのです。だから、一番いいのは若者が若者のものを食べ、私たちは私たちのものを食べることです。一緒に住み、一緒に暮らさないのが一番です。一時的に（生活するの）はいいですが、時間が長くなると駄目ですね。彼らが耐えられても、私たちは無理です。あと、私たちはいい食事を取れないんですね（栄養バランス

に拘らない)、簡単な食事でもいいですよ。でも彼らは食事だけでなく、ダイエットも考
えるんです。私たちがせっかく作ったものでも少ししか食べないですよ。で、口に合わ
ないかと思いました」と一人っ子 X・N 氏の父が言った。

3 親子関係からみる都市と農村

上述したように、一人っ子の親も、結婚後の子と一緒に暮らしたくない。さらに、親
子間の対立は生活上で限りない。

「一人っ子家族の親の良好な経済状態は、将来は、必ず子世代また孫世代に継承され
る⁽¹⁶⁾」。子世代は親の金銭、持ち家などの財産を、先に手に入れるために両親との関係
が崩壊した例はよくある。G・K 氏と息子の事例はその一つである。妻が亡くなる前、G・
K 氏は妻の遺志と息子の要求で、三人で住んでいる家を親から息子の名義に変更しよう
とした。しかし、G・K 氏はまだ 60 歳なので、家を息子の名義に変更することが早いと
考えているようである。毎回、息子が家の名義変更と言及したとき、G・K 氏は怒る表
情をみせた。しかし、怒っているとはいえ、G・K 氏が息子のために貯金し続けている。

1970 年代に生まれた一人っ子の父である G・K 氏は、親子関係が搾取者と被搾取者の
関係だと指摘した。もちろん、親からもらうことは全部「搾取」ではない。「そのうち
の一部は必要だから、親が子どもに、渡さなければならないものである。例えば、学費
など教育費のような教育投資だ」。しかし、親世代が「苦勞して得た金銭や買った家を、
子世代に取られるのは搾取だ」。現在、上述した現象は個別の家族だけではなく、数多
くの一人っ子家族にみられる。現在、「一人っ子家族のなかで、親世代の財産は、子世
代の教育投資と家を持つことへの主な経済的な支えになっている。しかも親世代は、子
世代と孫世代の、いわゆる“経済的搾取”に直面している」。

また、親子間の対立は他の側面でも表れる。T・X 氏の母は農村から都市部に来た一
人っ子の母親である。「私の実家は農村です。村では婦人主任を務めてました。18 歳
の時、お兄さんが都市での仕事を探してくれて、農村から脱出できるようになりました。

最初は淄博、それから済南で働きました。他人は都市に行ったらいい生活ができると思っていますが、どれだけ苦労したかは、私にしか分からないのです。農村から来た娘が、都市に来て経験した苦労は、一般人には分かりません。」「どのような苦労を経験しましたか」と筆者は質問した。「最初は差別されましたね。姑の家には、本当にいろいろと冷遇を受けました。舅姑に見下されて、その時は舅姑には嫁三人いて、全部都市の人で、末っ子の嫁は彼らの同僚の娘でもありました。それで彼女が舅姑の家には、結構いい待遇されました。でも私は駄目で、みんながいやな家事とかは、全部やりました。それでも駄目ですね。ある春節の時、T・X氏のおばあさんの家に行きました。その時はお金がなく、全部実家に送りました。自分に残したのも少なく、生活もすごく節約でした。それで、おばあさんの家に入ったとたん、＜新しい服がないの、ゴミを拾う人みたい＞と言われました。ああ、その時私は、絶対息子を産むと決めました。あの二人は全部娘だったので。私は嫁いだ時、まだ男の子がいませんでした。結婚後すぐ妊娠しましたが、妊娠4ヶ月の時に、女の子であることが分かりました。娘は駄目です、その時一人っ子（政策）が厳しかったで、みんな一人しか生まないですよ。で、何晩もぐっすり眠れず考えた結果、おろすことにしました。その時は、技術も今のように進んでいなかったし、すごく痛かったです。半年後また妊娠しました、それでT・Xができました。息子ができてからは、姑の家で嫁の立場ができました。本当に＜母は子で尊き＞ですよ。都市も農村も同じです。それでも差別はずっとあるんです。知っていますか。今でも姑は、私が家事をすべきだと思っているんですよ。みんな疲れますが、私だけ疲れないと思われているのです。それに農村生まれだから、息子にも時々見下されます。本当に悲しいです。息子と喧嘩したことがありまして、その時、息子に指で鼻を指されて、お前は農村にいたべきだ、何で出てきたんだといいました。他人に見下されるのはいいんですが、何で自分の息子にまで見下されないといけないんですか。それで私は泣きながら息子に、私が田舎から出てこなかったら、今のような君の生活条件はないんだよ。君は農村に生まれることになるのだよ、といいました」。

このような農村の人と都市の人と結婚した家族は現代の中国において少なくない。家

族の親子関係は、もう一つの意味を帯びる。即ち都市部と農村部の関係である。そのため、親子関係も、都市部と農村部関係の縮図にもなるのである。

第3節 自立できない子と子離れできない親

1 自立できない子

社会発展の不均衡が、ある程度高齢者の社会参加の程度とレベルに影響している。現在一人っ子の親の大部分は、彼らの孫の世話をしているので、育児と社会参加の間にも大きな矛盾が存在している。

孫の世話をするのは自分の最大の責務で、どんな活動に参加しても孫の世話は一番優先であると、聴き取りの対象者が話した。住民自治委員会が主催する娯楽活動に参加するかとA・X氏に尋ねたら、彼女は「今、子供連れていそがしいからまだ行ったことはないが、その前はよく出かけて踊ったり、遊んだりしていました。少なくとも気分転換ができましたし、料理など家事もできましたから。今は時間がなくて、まず、孫娘を幼稚園に送らなければなりません。この2年間余り、他のことは一切していませんでした、孫娘を外に連れて遊んだりして、彼女を中心に忙しいばかりでした。たまには、孫娘の踊りを真似して踊ったりして、自分に興じたりしています。用事がある場合、住民自治委員会にも行きますが、ただし忙しくない限りですね。」と話した。

二歳の外孫がいるおばあさんのR・P氏はこう話した。「今、外孫がまだ幼いので、私は全然活動に参加できませんよ。住民自治委員会の委員は、毎回繰り返して電話を掛けたので、しょうがないから一回か二回ほど参加しました。最近の会議もそういう状況で、時間が短いから絶対来てくださいと。私は婚家と一緒に子供の世話をしています。月、水、金は私の当番なので、木曜日の会議には参加します。こういう状況では参加できませんが、月、水と金曜日は参加できません。仕方がないでしょう、子供を世話せずに、活動に参加しては行けませんよ。やはり子供のほうが一番でしょう。今は外出がとても

難しく、火曜日や木曜日など子供の世話をしない時だけに、銀行へ行けます。今日は、銀行の金融商品を買ったので、明日抽選に来てくださいと銀行から知らせが入ったが、私は、明日は金曜日だからだめだと返事しました。何故かと聞かれたら、子供の世話をしますと返事しましたよ。それで、土曜日に行くように約束しました」。

2013年中国の第二子の政策が緩和し、夫婦1人が一人っ子である家族も第二子を生むことができるようになった。既に孫がいる多くの一人っ子の両親は、また第二子を生むよう子供に望んでいるとともに、第二子を生むなら、その子供の世話もすると言う。第二子の政策の緩和は、ある程度一人っ子の親の社会活動にも影響がでて、彼らが社会活動に参加する機会が少なくなったことは間違いない。「今、多くの一人っ子はすでに子供ができていますが、今年の春節に家に帰ると、さっさと第二子を産めと老人に催促されましたでしょう。祖父母の立場から言えば、第二子を産むかどうかは、全く子供たちの決まり次第で、私達はただ助けるよと、言うだけです。孫が、何か悪いことになったら、あなたたちのせいだと後に責められるかもしれないから、私たちは催促をしません。はっきり言えば、そういう義務がないから、嬉しいだけです。しかし手伝いはしなければならぬ、お世話をしなければならぬです。」とA・X氏が語った。子育ての手伝いは、一人っ子の親の社会活動に大きな影響が出た。だが、孫の世話は大部分の人が退職後の生活意義であり、一家団楽を楽しみながらも大量の体力と時間が孫に占用され、それは所謂「辛いけれども楽しい」とのことである。

子どもは生まれた時からずっと親に世話されるため、親への子どもの依存は必然的なものである。しかし、もしある社会のなかに、多数の若者の親への依存度が高くなれば、社会的問題になる⁽¹⁷⁾。経済的な依存の以外に、心理的な依存や人間関係の依存などの側面もみられる。多くの一人っ子は豊かな生活をしており、生活のことを全て両親に頼ってきた。親の社会的地位が高い場合、彼らの子どもも生活上より恵まれた援助を得やすい。陳一心・王玲の調査から明らかにされたのは、一人っ子は生活全般において親への依存度が高い⁽¹⁸⁾。しかし、都市部で生まれた若者は、ほぼ全員が一人っ子であるが、両親への依存度が人によって異なる。その依存度は親の学歴や職業などに関連している。

多くの親の退職後の時間が一人っ子のために使われている。これも一人っ子の親への依存の一側面である。多くの退職後の一人っ子の親たちは、依然、忙しく、子どもの生活応援をしている。一人っ子家族のなかでは、育児様式は祖父母の世話を主とする。一人っ子たちは、子育てから排除された例もよく見られる。親は退職後の生活を子どもに貢献しているため、ある意味で親の老後生活は子どもに邪魔される。人数が少ないが、一部の自分中心的な考えの親たちは、現状に不満を持っている。しかし、多くの親たちは子ども中心的な考えであり、子どもに貢献すること、とりわけ孫を世話することは、彼らの退職後の生きがいとなった。孫がいないと、退職後の生きがいがないと考える人は非常に多い。一人っ子家族から見ると、親に依存している一人っ子がいるが、子どもに依存している親もいる、ということである。

経済的な原因で、現在多くの結婚した一人っ子は独立して暮らせない。近年、中国の都市部の住居と車の価格が高騰し続けているため、親のすねかじりは若い一人っ子の選択肢のひとつとなっている。夫婦二人ともに一人っ子であった家族に関する最新調査の結果によると、結婚のため新しい住居を購入する際に、約70%の一人っ子は親の経済的な援助をもらい、わずか5%の一人っ子が自分で住宅を購入した⁽¹⁹⁾。F・Y氏はすでに十年以上中国の一流大学で仕事していたが、すねかじりの話題を言及した際に、「僕は心からすねかじりをしたくなかったが、せざるをえなかった。僕の場合、主に家を買うため親のお金をもらった。親は現在でも時々僕にお金をくれようとするが、僕は受けない」といった。他方では、一人っ子の結婚・出産活動は親に干渉され、自分の望みのとおりに行われたい。出産について、多数の子世代の調査の対象は、子どもがいた前に親に催促されたことがあると言った。

上述したように、親子間の共依存を引き起こした理由はたくさんあるが、第3章で詳しく分析する。

2 子離れできない親

(1) 既婚の子と緊密な生活上の補助関係

一般的に、一人っ子の新婚用住宅は親の家に近く、同じ町にあった例がよく見られる。一部の親は住んでいる住宅区、あるいは同じ建物で子どもに家を買っている。実際、一人っ子と彼らの親たちは「一緒に暮らしている」という状態にいる。結婚した一人っ子にとって、新婚用住宅は自立的な家ではなく、ホテルのような寝る場所だけである。多数の調査した一人っ子は、自分の住宅で料理とかしなないで、仕事が終わったら親の家に行き、用意されたご飯を食べる。一部の一人っ子の新婚用住宅では、ストーブとか換気扇などの料理用道具を用意しなかった。彼らの持ち家は、ホテルのようになっていたのである。

一人っ子 T・X の新婚用住宅は、親たちの家に非常に近い。「親の家は同じ建物で、姑の家は後ろの建物にあり、50 メートルの距離だ。私が結婚したとき、爆竹を地上に置き、爆竹の長さはこの三つの家を連結した。こんなに近いのだ。当時、近くの人々はおもしろいと感じたから、爆竹を見に来た」。なぜ親と近い住宅を買ったと聞かれた際、T・X 氏はこのように答えた。「しょうがない。父の体はよくなく、腎臓に病気があるので血液透析が必要である。私に家を選んだとき、親たちもよく考えた。彼らは私が近く住むことを希望した。何かあったら、互いに世話できる。また、母は自立できない人だから、父が病気になる前は、すべての家事を父に任せた。母は暗闇が怖いから、夜に一人で眠れない。もし父が腎不全で亡くなったら、私は母を世話しなければならない。近くにすんでいたら、母も安心できる」。

一人っ子の T・X 氏と L・J 氏は結婚してから、双方の親を自分たちと近くに住ませた。双方の親を、同じ建物の同じ階に住ませたいのである。「同じフロアに買ったのは、親の老後を考えた結果です。昼間は仕事があるので、誰もいません。双方の親が近くに住んでいれば、万が一、だれかが病気になった時にも元気な方が手伝えるし、お互いに面倒を見られます。親が年を取ってからも、老人ホームに行かず、お手伝いさんを二人雇って両方を見ていればいいです。一人は料理し、一人は掃除する。双方の親を一緒に介護できます。これは老人ホームの待遇と同じですよ。それに親は自分の家において、子供

も近くに住んでいて、お年寄り同士は会話もできますから寂しくないですよ」と彼らは言った。

親類といえども違う家族であるため、生活や習慣に違いがある。それに、住まいが近ければ近いほど接触が多くなり、トラブルが発生する可能性も大きくなる。そのため、このようなやり方は、少し理想的すぎると思われる。でも、理想的すぎるとは言え、よい点もある。一人っ子の親が互いに協力し、連合をする傾向が強くなることは、将来の一人っ子の親の老後生活に大きく影響するであろう。T・X氏たちのやり方は、一人っ子の親の老後介護に新しい考え方を提供した。

T・X氏の例は特例であるが、新婚用住宅を選んだ場合、親と近い住宅がほしい、という声はよく聞かれる。新婚用住宅の選択について、N・P氏の母は次のように語った。「住宅の位置は、もちろん一番大切だ。当時私たちが住んでいる建物の反対側に、新しい住宅区が設けられた。主人と私は嬉しくて、早くその物件販売所に行った。初回行ったところで、手付金を払った。当時は私たちと近い住宅を買いたかったから、ほかの条件はあんまり気にならなかった。将来、息子たちはそこに住んでいれば、毎日私の家でご飯を食べられ、その後自分の家に帰る。週末にも私の家に来られる。もし孫がいたら、昼間は、私は息子の家で孫を世話する。息子たちが帰ったら、私は自分の家に帰る。子どもと一緒に住んでいたら、問題がたくさん出てくるから、そうしたほうが、両方にとってもよい。近く住んでいたら便利で、私も息子の生活に心配がなく、一番いい。兵役に服した二年間を除き、息子は生まれてからずっと私のそばに住んでいる。彼は私が作った料理が好きで、好き嫌いもあった。うちの子は、ほかの男の子と同じように甘えっ子だ。私はよく果物とかを彼の口元にあげる。そうしなければ、彼は食べない。私が起こさないと、彼は午後まで眠るから、私は彼の健康を心配している。私のそばにいなかったら、どうするか。今は孫がいないが、私は一生懸命体を鍛えている。将来、孫を世話する責任があるからで、私の体の健康が一番大切だ」。

家を買えなく、あるいは新婚用住宅が親から遠いため、親と同居の例もよくみられる。新婚用住宅を買えなければ、親たちと同居しなければならない。持ち家を持たないC・

Y氏は、親との同居生活を次ぎのように語った。「結婚したころは、私と主人は借家に住んでいた。家賃は毎月2,000円（日本円で換算すると4万円に相当）で、当時私の給料は家賃と同じだった。親は主人が嫌いで、私は親の家に住みたくなかった。主人の出身は田舎で、お金がなくて、同居してもなにひとつ権利がない。主人も私の親の家に住みたくなかった。毎回、彼と親が一緒にご飯を食べたら、気分がよくない。自信がないからでしょう。息子が生まれてから、親は私たちの家賃が高いと思ったから、同居することになった。親と同居にはいいところ、よくないところがある。去年、父は突然脳卒中で倒れてから、その後体が不自由になってしまった。私は、親たちと一緒に住んだら、もっと父を世話でき、母の介護負担を減るべきだと考えた。よくないところというと、うちの部屋は小さいので、5人が一緒に住んだら、空間はぎりぎりだった。同居した始めたとき、親と主人の生活習慣が異なるので、親たちは、私に早く家を買って別居しようと言った。でも、父が脳卒中してから、そんな話をすることはなくなった。親たちは、娘がそばにいたらいいなあと言った」。

T・X氏の父親が尿毒症を検出された後、母親はT・X氏に対する重視する程度が、従来よりも高くなった。彼女は「ある日息子が扁桃腺炎を起こして、首が太くなるほど扁桃腺が腫れ、飲食も難しくなりました。1週間ほど点滴注射しても治らず、大病院に転院して治療を受けました。その時、お医者さんに喉の検査をしてもらい、生検（一種の細胞検査の方法）しようという診断に、私は頭が真っ白になったほど驚かされました。生検しようと言われたら、それは癌患者と判断するに違いないと私は思っていたからです。当時、私は自分を制御できず、辛い感じがして、床に座ったまま大声で泣き出しました。またある日、息子がトイレに行った時、私は、突然息子の呼び声が聞こえた気がして、トイレまで行って、彼に状況を聞きました。しかし返事はありませんでした。ノックし続けても、なんの返事もありませんでした。この時の私は怖くて、頭の中では息子が失神していたり、あるいはもっと悪いことも映っていました。私は引き続きノックをした結果、息子がようやくドアを開きました。彼はイヤホンで音楽を聴いていたので、私の叫び声が全然聞こえなかったのです。今考えたらおかしいですが、当時は本当に怖

かったです。うちの場合では、子供が1人しかいないし、おじさんも不治の病にかかったもので、いつの間にか亡くなったこともあり、だから息子は今後私の唯一の頼りになります。私は、小さい頃から一人で寝るのが嫌です。家族がいるなら恐くないが、自分一人で眠ると絶対だめです。万が一、家族の人がいなくなったら、私は息子夫婦と孫と一緒に住みます。息子は問題ないと思いますが、嫁のほうは分かりません。食事の用意や洗濯、掃除、子供の世話などなんでもやりますから、その時また相談します」と話した。

人数が少ないが、調査された一部の一人っ子は、自分の努力で住宅を購入した。親たちは、彼らの自立に対して不安になっている。今回調査した一人っ子のうちに、D・B氏⁽²⁰⁾だけ親からの支援をもらえなく、自分の収入で二つの住宅を買った。しかし、D・B氏が語ったように、彼が自立できても、故郷を離れた彼に、親は不安を感じた。何年前に、D・B氏は済南市から上海に行った。上海に行ったのは、高い給料がほしかったである。「済南で仕事したとき、毎月の給料は2,000元（日本円で換算すると4万円に相当）だった。あの時、済南市に住宅を買ったから、毎月の住宅ローンが1,400元（日本円で換算すると1万7千円に相当）で、ローンを払ったら600元（日本円で換算すると約9千円に相当）しか残らなかった。そのため、私は上海に行きたかった。でも父は反対した。彼は、上海の生活がもっと厳しいと思った。彼は40万元（日本円で換算すると800万円に相当）を私に渡して、残した住宅ローンを私に支払わせたようとし。しかし、私は彼の金を拒絶し、上海に行った」。上海に行ってから、D・B氏は一生懸命に会社で仕事したので、2年前に、アメリカにある会社の本部に異動した。D・B氏の給料は高くなったが、親からの反対はもっと激しくなり、親子間の連絡も少なくなった。現在の状況に関して、D・B氏は次のように語った。「親が年齢をとることに伴い、彼らの考えは保守になった。彼らは、わがままな子どものように、大人の私に依存し、世話されたい。親たちは毎日私を心配しているが、私から助けをえることができない。上海にいたとき、私はよく電話で親たちと仕事の悩みを言ったが、今は彼らに何も話さない。話さなかったら、親は心配しない」。

都市部に生まれた若者はみんな一人っ子であるが、両親への依存度が人によって異な

る。一人娘である M・T 氏と N・Y 氏の家族状況をみると、両者の両親の所得は同じレベルである。M・T 氏は小さい頃から両親に厳しく教育され、豊かな生活条件ではなかった⁽²¹⁾。逆に、N・Y 氏の両親は豊かな生活条件を N・Y に与えた。M・T 氏は高校から、13 年間両親と別居したが、「家を懐かしく思わない」と言った。「もし、家の経済条件が良く、例えば、両親が私のために家や車を買ってくれたとか、あるいは、もし家で家事をする必要は全然なかったとしたら、その後、私は自分で服を洗ったり、部屋を借りて住んだりしたらすることは恐らくできずに、家に帰りたくなっただろう」。「でも、うちの生活条件は私の高校時代になってから、やっと一般的な水準に達し、その前はちょっと厳しかった。私は他の地域で両親と別居しても、小さい頃から苦勞をしたため、全然問題にならなかった」。

N・Y 氏の両親は、彼女に多くの小遣いをあげたり、あるいは、高い服を買ったりしたと L・C 氏が言った。「私の大学時代に使った衣服は普通なものであったが、そのとき、彼女は親から 800 元のコートをもらった。今でも私は、そのコートを覚えている。私にとってそれはとても高いものだった。実際、彼女らの両親とうちの両親の収入は、大体同じレベルだった。彼女の両親は、いつも彼女にブランド品を買ってあげたりして、今でもそうである」。

経済的な依存の以外に、心理的な依存や人間関係の依存などの側面もみられる。廈門市の一人っ子に関する陳一心・王玲の調査によると、90%の一人っ子は結婚するまで一度も両親と遠く離れたことがなく、苦勞したこともない⁽²²⁾。数多くの一人っ子は豊かな生活をしており、生活のことを全て両親に頼ってきた。陳一心・王玲の調査から明らかにされたのは、一人っ子は生活全般において親への依存度が高い。

現在、第一世代の一人っ子たちは、結婚・出産年齢の段階に入っている。子どもを産んだ一人娘は、これまでずっと自分がまだ幼いと思っている。彼女は苦勞したことがないので、出産することは、人生のはじめての苦勞となった。出産してから、親に依存できなくなり、自分の力で子育てしなければならない。妊娠したと彼女の両親に知らせたとき、両親は信じられないと答えた。なぜ彼女の両親が信じられないと考えたか。これ

は一緒に暮らしてきた娘が結婚し、家を離れ、そして妊娠するという事実を認めたくないからであろう。

31歳の未婚の一人娘T・C氏は次のように語った。「実は今、経済的な理由で親と別居できないのではない。親の家から離れることは、心理的に何より難しい」。それとともに、T・C氏の両親もT・C氏に依存している。彼女は恋に落ちた時、母が不安となった。「母のその不安は、私の未婚の一つの理由となった」。実際に、現在、T・C氏のように、両親と一緒に暮らしている結婚適齢期を過ぎても未婚の一人娘の人数がすくなくない。一緒に暮らしているので、両親は一人っ子の娘を結婚させたくなく、ずっとそばにいてほしい。生活条件が恵まれている場合、親は一人っ子と一緒に暮らしたくなり、知らず知らずのうちに、親子の間にいわゆる依存関係が現れている。

幼少時期において親への依存は避けられないが、大人になってから共依存は避けられる。両親の子育てのしかたは、一人っ子の自立に大きい影響を与える。結果的に、子供を自立させる親もいるし、依存させる親もいる。L・C氏は自分の経験を次のように語った。「大学四年生の時、私は自動車の運転免許を取得したかった。これは親へ、ただ一回お金をお願いしたことであつた。母と相談したが断られた。母は3,000元の学費が高く、家は将来車を買わないので、必要がないと言った。その後、私は、両親にお願いすることをあきらめた。また他人にお金をお願いすることは、無理だろうと思うようになった。それから、私は両親にも他人にも、だれにも依存できないと思った。しかし、今になってこのことを言うと、母は後悔していると言う」。

共依存とは、特定の対象と過度的に相互関係に依存する一種の病的状態で、共依存者は頼られる過程で自分の人生価値を発見し、相手を自分の思い通りにやらせて自分の目的に達成する⁽²³⁾。共依存現象は、アルコール依存症患者の介護から初めて発見された。患者は、家族の配慮に依存しているとともに、家族も患者への配慮から自己価値を発見して「愛の名のもとで相手をコントロールする」⁽²⁴⁾。この関係の結果、家族が患者の回復を拒否し、患者の自立を障害して、患者をずっと自分に頼ってもらい、それによって自分の心を満足させる。共依存関係は病的状態の非正常な関係で、その本質は一種の支

配と被支配の関係である。

共依存関係は、アルコール依存症の患者と家族の間に存在しているだけでなく、家族での親と子の間にも存在し、親子の共依存と呼ばれる。親子の間の共依存状態は以下のような状態である。つまり親が自分の立場から子供を自分の所有物として支配し、自分の理想の子供に対する想像を子供に強制して、それを勝手に子供への愛として認識している。その結果、親子の間に多くの断絶と苦難をもたらした。比較的に理想的な親子関係では、両親と子供は2つの独立の円で、乳児期からの依存関係は完全に分離し協力関係に発展し、両親と子供が独立した人格を持ち、それぞれの人生が相手に支配されない。今の中国で、特に一人っ子の家族では、親子関係が共依存に向かう傾向がある。親は子供の全てが気になって、自分のやりたいことを子供たちにやらせ、自分の完成できない夢を子供に完成させる。子供も至る所で親の考えを配慮するようになった。中国の一人っ子の家族に対する調査から見れば、初代一人っ子の家族の親子関係には以下の特徴がみられる。1、親子双方は自立である、2、親が子供を過保護にする、3、親が子供を干渉しすぎる、4、親が子供に過大な期待をしている。これらの特徴は、一人っ子の家族の親子関係では、共依存の傾向が普遍に存在すると証明している。

(2) 退職後の生きがいとしての孫

X・N氏は、両親の孫への期待を言及した際につぎのように言った。「父は男の子でも女の子でもいいから、早く孫を持ちたい。性別も構わなく、君の子どもであれば、認めると父は言った」X.P.の家族は豊であり、社会的地位も高い。しかし、たとえそんな家族であっても、孫の出産は唯一の生きがいになった。一人っ子の場合、もし結婚して数年後、子どもがいなかったら他人の噂の話題になった。両親にとって、メンツがないことである。

F・Y氏の例はもっと極端である。一人っ子とその両親の親子関係だけではなく、子どもを出産しないことが原因となり、一人っ子家族の夫婦関係にも影響を及ぼした。F・Y氏の妻は、結婚して五年たっても子どもを産まないため、嫁と姑の関係はよくなり、夫婦関係も悪くなった。彼女は仕事のため、30歳以内に出産したいと計画したが、

現在 32 歳になり、子どもをまだ産まないため、現在、離婚手続き中の状態となった。

離婚の理由は複雑であり、出産に対する対立は重要な理由の一つとなった。

F・Y 氏. 夫婦は両方とも一人っ子であり、給料が高く、社会的地位も高い。出産をめぐる対立がなければ、離婚の可能性は低い。したがって、一人っ子家族、特に夫婦両方とも一人っ子の家族の場合、子どもの家族内の地位は極めて高い。女子にとって、子どもを産まないと、家族との人間関係によくない影響を及ぼす。極端的な場合、家庭を崩壊させる可能性がある。

子どもを産んで、一人っ子は親になる。この時、一人っ子の結婚・出産をめぐる家族関係に関連する考察は、必要である。結婚・出産のため、家族関係がよくなる例はあるが、私が聴き取り調査で受けた印象としては、家族関係が対立するほうが多かった。その対立は、主に一人っ子と親の対立と一人っ子と配偶者の対立としてあらわれてくる。

(3) 自己中心的な親たち

一人っ子の親の中のごく一部に、孫の世話をするのが自分の責任や義務と思わない人もいて、退職後に自分の趣味に没頭する。このような親は「自由型」だと言えるが、しかし、そのおしゃれな退職後の生活も、子供や他人に理解できなく、甚だしきに至っては「非主流」だと見なされる。

一人っ子である N・S 氏の両親は、まさにそのような人である。N・S 氏の父は、山東省の大型国有企業の幹部であったが、すでに退職した。母親は国有企業から退職した。二人退職後の収入は、月に 15,000 元（日本円で換算すると 30 万円に相当）であり、当地では年金の高い家庭と言える。夫婦関係はとてもむつまじいと、聴き取り調査のときに感じた。二人の趣味は同じで、家で犬二匹を飼って、金魚も少し飼っていて、住んでいる別荘（中国では別荘は金持ちのシンボルの一つである）の近くに土地を少し借りて、いろんな果物や野菜を植えている。

私が聴き取り調査に行った時は、夏であった。夫婦二人から、野菜や果樹園を案内してもらった。「きゅうりはまるまる 30 センチの長さもあり、茄子も大きくて、冬瓜は 30 キロまで大きくなる」と言われた。野菜や果実栽培以外に、彼らの最大の趣味は、

室外活動と観光である。私は主に中国国内の有名な山や川の旅行写真を見せてもらった。二人とも登山愛好者で、登山協会の会員として、毎年5、6か所の山を登っている。N・S氏の父から、彼の登山途中で発生した「探険」経験を教えてもらった。「泰山に登った時のことは、思い出せば面白いなと思う。あの時は沢山の仲間同士、30人かな、と一緒にいて、皆同輩だ。すごく登りにくい道を選んだが、泰山の裏山だった。もともと裏山から登るなら入場料が不要だと思ったが、しかし登り道の途中ほどで検札ポストがあった。その夜に検札ポスト当番のおじいさんが一人いて、夜中二時頃だから、そのおじいさんもドアの前に座って半睡状態だった。30人もいたから黙って通り過ぎるのは、ちょっと怖かったよ、だって切符を買わないで通ろうとしていたからね。隊長が皆に、彼の後ろに付き従うように指示した。おじいさんは深く眠っていたようだ。隊長がそっとおじいさんのいる検札ポストを通過してから、三十数人も全員通った。皆さんは大変喜んでいて。悪いことをした子供のようにだけど、達成感もあって、すごく楽しかった」。

登山以外に、二人ともよく映画館で映画をみたり、一緒に外食に行ったりする。N・S氏の母親は「主人が特に映画を見るのが好きで、小さいときから好きだったという。彼に影響されて、私も好きになった。小さい時は、映画館の環境が悪かったし、あまり新しい映画はなかったが、あれば必ず見に行った。時には真夜中の映画を見るために、夕食を食べたらすぐ切符を買うために並びに出かけた。遅延のこともよくあって、大体映画を見るには一夜も掛かって、帰ったのが朝だった。今は大変便利になったね、切符もネットで買えるようになった。私たちは「ウィチャット」⁽²⁵⁾で切符を買うことを勉強したから、携帯電話で買うことができて、映画館でチケットを取れば良い。退職後に時間も多くなり、いつも月曜日から金曜日の平日に行くから、半額の映画切符を買える。映画を見てから、近くのレストランで食べたことのない美味しいものを食べられるのも嬉しい。去年のバレンタインデーだったが、主人に映画に連れて行ってもらってから、食事でも行こうと誘われた。本当に恥ずかしいと思って、もうこんな年になったので、バレンタインデーなんて一回も過ごしたことが無い。そのレストランで少し注文してから、周りが全てあなたのような若者だと気づいて、彼らが時に頭を上げて私たちを見た

から、もっと恥ずかしく思ってしまった。」

N・S氏は日本留学後帰国してから、ずっと両親の近くで仕事しなく、会社から車で帰宅するには約50分間掛かる。2015年、N・S氏の娘が生まれても、両親の生活には関わらない。N・S氏の妻は、出産する前に母親と「産褥期」⁽²⁶⁾のことを相談してから、N・S氏の母親は、何度も自分が子供の世話をできないから、なるべく実家で産褥期を過ごすようにと言った。子供が生まれた後、N・S氏の母親が病院にお見舞いに行ったが、孫娘を抱かずに帰った。N・S氏の母親は「私は、子供に特別な感情がない。好きは好きだけど、想像のように毎日会わないといけなような感じはない。孫娘が生まれたら、私が子供を抱かないのはその子を愛さないか、または男尊女卑の意識だから女の子を好まないとか、嫁の文句も多くなった。実は、私と主人は一緒に、男の子か女の子かに対して、特に考えがない。定年してから今まで四、五年ほどあって、毎日の静かな生活に慣れた。平日は旅行に行ったり、野菜を植えたり、体を鍛えたりして、私たちの親も亡くなったので、生活上は殆ど二人きりだ。時には友達を誘って、一緒に遊ぶ。周りの友達もあまり孫の世話を見ないが、全て姻戚に頼んでいるからだろう。うちはそうだ。私と主人が、子供の世話を見ないのは、他の理由ではなくて、単に煩い生活が嫌なだけだ。N・S氏の義母にも言ったが、うちの子供だから、当然責任はある。だから、彼らが面倒を見て、私たちがお金を出す、いいジョブシェアじゃない」。

N・S氏の娘が生まれてから9日目に、新生児肺炎で13日間も入院したが、その間は集中治療室であったので、家族が治療室に入れなくて、家で病院の知らせを待つしかたなかった。この間にあった事件が、姑と嫁の二人のけんか原因になった。N・S氏の母親は、子供が入院している間は特に用事もないと思って、普段通り一緒に登山する仲間を誘って、一日、自宅で遊んだ。みんなを連れて自分の野菜や果樹園を回って、新鮮な果物や野菜を取ってご飯を作って、皆が楽しかった。その日の晩、友達たちが帰った後に、嫁から少し不満が出た。「嫁は、私がおばあさんらしくないと言う。子供が生後9日間で入院して、誰でも心配なのに、こんなに沢山の人を家に誘って食べたり、遊んだりする。一体、この子を気にしているかどうかと責めた。そう言われて、私はとても怒

った。子供が入院したけど、家族は見舞いにも行けないから、家で心配していてもどうにもならないだろう。まあ、この嫁は全然私と似ていないのだろう。私は、自分が早く生まれすぎたと、いつも思っている。もし私が今の時代に生まれれば、きつともっと多彩に生活しているだろう。嫁はお金を重く見すぎて、多分、私がそんなに多くの人に奢ったことを、気にしたかもしれないが、私はお金をそんなに重く見ていない。彼女はいつも私の金遣いを指摘しているが、これは納得できない。私が死ぬまで、マンションや貯金を絶対に彼女に渡さないのよ」。

N・S氏の母親に文句あるのは、彼女の嫁だけでなく、N・S氏の母親の姉もそうである。「お姉さんも、私が誰の世話もしないことがひどいと思っている。電話をかけたときに、お姉さんが、あなたは自由勝手すぎるのじゃないか、毎日遊びばかりで、息子も孫も世話をしない。これでは姑としてだめだと責めた。最近、私もどんどん分かったが、姑をするのは難しい。昔は、嫁をするのは難しいと言われるが、今は逆になった。嫁が結婚でこの家入ってから、料理をしてあげたり、子供を見てあげたりして、その上、お金がないときにはあげないといけない。これらができないと、嫁はすぐ不満になるから、息子のために我慢しないとといけない。また、周りの同輩もそうだよ、同輩は、毎日、孫を世話しているから、彼らと違う私の生活は非難されてしまう。これもたまらないのよ、長く非難されると、私が間違っているような感じだから。嫁と仲良くして、彼女の要求を満足させてよ、と言われたこともある。私は一人の息子しかないから、老後も、当然、息子夫婦に頼むしかない。しかし、私は一人っ子に頼むなんて無理だと思っているし、息子は他の都市で働くから、特に頼れない。老後といえ、今のうちに体をよく鍛えて、お金を多く貯蓄して、70歳以降は養老ホームに行く方がよっぽど良いじゃないか、体が良ければどこに住んでもいいから。私と主人の考えが一致している、その時になったら、二人で一緒に行くつもりだ」。

【注】

- (1) 『文汇报』2010年3月15日。
- (2) 同上。
- (3) 女性、大学卒業、既婚、主人は一人っ子である。中型会社で市場部門に仕事している。今2歳の娘をもっている。
- (4) 陽翼『中国独生代消費行為研究』暨南大学出版社、2008年、4ページ。
- (5) 男性、31歳、既婚修士。2歳の息子を持っている。現在大型の国有会社での中間層の管理者である。
- (6) 甘やかされているという意味である。
- (7) 包蕾萍・陳建強、前掲「中国＜独生父母＞婚育模式初探——以上海為例」。蘇頌興「上海独生子女的社会適應問題」『學術季刊』1997年第2号。
- (8) 林光江『国家・独生子女・兒童觀——對北京市兒童生活的調查研究』新華出版社、2009年、13ページ。
- (9) 森岡清美・望月嵩『新家庭社会学』培風館、2011年、123ページ。
- (10) 劉佳「中国における一人っ子の新婚用住宅の購入からみる親子関係の新しい形態」『政治学研究論集』第41号、明治大学政治經濟研究科、2015年、38～49ページ。
- (11) 林光江、前掲『国家・独生子女・兒童觀——對北京市兒童生活的調查研究』、13ページ。
- (12) 陸影・陳岱雲「城市独生子女父母養老保障情況調查及分析——以濟南市為例」『暨南職業学院学報』2008年第6号。
- (13) 陽翼『中国独生代消費行為研究』暨南大学出版社、2008年、18ページ。
- (14) 女性、30歳、既婚博士、一歳の子どもをもっている。現在日本の大手会社に仕事している。
- (15) 陽翼、前掲『中国独生代消費行為研究』、18～24ページ。
- (16) 同上、55ページ。

- (17) 陳建強・陸林森『独生父母——中国第一代独生父母調査』上海辞書出版社、2006年、17 ページ。
- (18) 陳一心・王玲「独生子女家庭の親子関係」『上海教育科研』2006 年第 12 期。
- (19) 陽翼、前掲『中国独生代消費行為研究』、18～24 ページ。
- (20) D・B 氏、男性、32 歳、大学院卒業、既婚、子ども二人を持っている。D・B 氏は IT の仕事をしている。済南市の小会社から上海に転職し、現在アメリカの大手会社に転職した。D・B 氏は済南と上海で住宅二つ購入した。親からの支援が彼に断られた。
- (21) 林光江、前掲書、1 ページ。
- (22) 陳一心・王玲、前掲文。
- (23) 信田さよ子『アディクションアプローチ——もうひとつの家族援助論』医学書院、1999 年 6 月。
- (24) メロディ・ビーティ著、村山久美子訳『共依存症いつも他人に振りまわされる人たち』講談社、1999 年、4 ページ。
- (25) 日本の line と似ているアプリである。
- (26) 産褥期は中国の習慣の一つで、産婦は産後一ヶ月内に体を調整することを指す。産褥期を上手く過ごせないと多くの病気が残り、今後の体にも悪影響をもたらす。産褥期の習慣は中国に普遍に存在しするが、各地域の詳しい習慣は異なる。一般に、産婦は産後一ヶ月内に水に触れることが禁じられ、お風呂もしてはならない。子供を抱くことが禁じられ、基本的にベッドで横になる。そのため、中国で産褥期の面倒を見ることは非常に繁雑なことで、産婦と新生児の面倒を見るのに数人必要とされる。また、子供を産むことは男性家族への貢献と見なされ、姑が面倒見る主要人物となる。

第三章 一人っ子家族の親子関係の背景

筆者は、これまで、第一章と第二章において、さまざまな側面から、一人っ子家族の親子関係の実態を詳しく述べてできた。本章では、一人っ子家族の親子関係が形成した背景を分析する。

中国の家族が、伝統的様式から現代的様式への転換においては、大きな歴史的な変遷が二つある。一つは新中国の成立、もう一つは改革開放である。新中国の成立は、現代型家族の成立のために前例のない条件を創造した。1950年に発行された『婚姻法』に「婚姻自由」と「一夫一妻」の婚姻制度が規定されている。1954年の憲法に「男女平等」と規定され、「中華人民共和国の女性が政治的、経済的、文化的、社会的並び家族生活の各方面で男性と平等の権利を享有する」⁽¹⁾と定められた。

なお、「国家が生産組織と政治組織の確立を通じて、従来の家族制度、都市工場、企業や農村協同組合を潰し、家族の生産機能を国家体制内に移転し、共産党の権威と国家の権威が親の権威を代替するほか、親の子どもへの教育権も国に戻した。このような条件に保障され、中国の家族関係がすぐに『同権化』、世代間や夫婦の間は、平等になりつつある」⁽²⁾。個人が勤め先への「組織依存」⁽³⁾も当時で築き上げられたものである。新中国成立後の制度変革と制度革新は、中国の伝統家族の変換に強い原動力を提供したことが明らかである⁽⁴⁾。

もう一つは、改革開放政策の実施である。改革開放以前の計画経済では、個人が勤め先に対して一種の「組織依存」があった。当時の中国人、特に都市住民は、「幼稚園、入学・就職、住宅、医療、年金ひいては家族紛争の解決が全て勤め先に頼っていた」。しかし、現在、このような「組織依存」はすでに崩壊され、親子間の依存関係が、正に「組織依存」⁽⁵⁾の崩壊された表れである。

現在、子どもの幼稚園教育と小学校は、既に親の職場とあまり関係がなくなり、ごく一部の職場（例えば、大学などに付属幼稚園や小中学校がある）を除き、子どもの幼稚園と小学校は、基本的に親の住宅所在地の「学区」⁽⁶⁾で決められる。また、就職も就職

市場で解決でき、求職者と雇用者の間は「双方向選択」の関係になった。住宅や医療も市場化になり、勤務先によって住宅を割り当てられる時代が過ぎ去って戻らない。なお、中国の都市部住民の医療も昔のような国が負担する局面がすっかりと変えられ、国家、勤務先と個人が一緒に負担するようになった。

「20 世紀、90 年代以降実施された 3 つの主要な改革、即ち住宅、教育並び医療の市場化改革のため、個人がより多くの責任を担い、積極的に市場競争に投入し、リスクの増加とともに独立性も高くなっている。世代間関係はリスク社会において、一層に複雑化・多様化になった」のである⁽⁷⁾。

次は、一人っ子政策の実施、文化大革命、社会の富裕化、メンツ文化の影響などの項目を中心にし、一人っ子家族の親子関係の背景を分析する。

第 1 節 一人っ子政策の実施

人口問題は現代社会問題の一つであり、人口の量は、多くの社会問題を引き起こす直接の原因の一つになっている。21 世紀以降、世界総人口は急激に増加している。国連の 2011 年版「世界人口白書」によると、2011 年 10 月 31 日に世界人口がすべに 70 億人に到達したと推計されている⁽⁸⁾。

人口問題が国によって異なるため、各国は自国の人口問題に対して、異なる対応策を講じてきた。20 世紀、80 年代まで、少なくとも四分の三の途上国は、人口抑制政策を実施した⁽⁹⁾。世界一の人口超大国としての中国はまだ途上国である。人口問題は中国の経済や社会発展のなかに重要な地位を占めている。1970 年代末から、中国は計画出産政策を実行した。一人っ子政策はその計画出産政策の重要な一環であり、世界人口史において前例のない政策である。1979 年の一人っ子政策が実施し始まってから現在まで、中国の一人っ子の総人数は 1 億人に達した⁽¹⁰⁾。一人っ子の集団は、現代中国の社会発展の典型的な特徴の一つとなった⁽¹¹⁾。

中国社会における一人っ子政策の影響が深刻であるため、一人っ子政策の制定とその

実行の過程において、国内と海外の論争は絶えることがなかった。どのように一人っ子政策を評価するのか、新たな発展段階において、どのように一人っ子政策を調整すべきなのは、すでに政府関連機関、人口学・社会学、マスメディアと大衆の注目点となった。しかし、どのように一人っ子政策を調整するのかなどの問題に関して、一致した見方がまだなかった。

上述の問題を正確に理解するため、まず中国の一人っ子政策の形成過程と背景を考察し、それに基づいて中国社会への影響を検討し、そして一人っ子政策の発展方向を探求してみる必要がある。本節は、次の四つの部分によって構成されている。それらは、1、一人っ子政策の概要、2、一人子政策の形成過程、3、一人っ子政策の正機能と逆機能、である。

1 一人っ子政策の概要

計画出産政策は、中国政府による実施した人口抑制政策であり、中国の基本国策の一つである。計画出産政策は「晩婚・晩産・少生・稀・優生」⁽¹²⁾を強調し、すなわち、「国家は総合的な措置を取り、人口の数量を抑制し、人口の質を改善する」⁽¹³⁾。計画出産政策は、一人っ子政策を含む多元的な政策体系であり、都市・農村部・少数民族地域に対する規定がそれぞれ異なる。計画出産政策は、憲法、婚姻法、母子保健法、人口と計画出産法などの法の下で実施された。1992年まで、チベットを除き、全国の29の省・市・自治区は『中华人民共和国人口と計画出産法』（以下は『人口と計画出産法』と省略）を根拠に、各地域の計画出産条例を制定した。

一人っ子政策の形成過程について異なる区分方法がある。若林敬子は、一人っ子政策の変化によって一人っ子政策の発展過程を四つに分ける。1、1979～1984年、2、1984年～1985年、3、1986年～1987年、4、1987年以降、である⁽¹⁴⁾。於学軍は一人っ子政策の背景によって一人っ子政策の形成過程を四つに分けた⁽¹⁵⁾。

一人っ子政策の歴史的な評価について、異なる見方がある。その見方はおおむね一人

っ子政策の人口抑制の貢献を認めたうえに、両面からその歴史的な機能と限界を分析した。近年の研究のなかに、一人っ子政策がもたらした逆機能についての討論が多くなっている。そのうち、王豊は一人っ子政策の悪影響は「大躍進」と「文化大革命」を超えると考える。その原因は、「大躍進」と「文化大革命」の中国社会への損害は相対的に短く、しかし、一人っ子政策の影響は一代の人だけではなく、影響された人口も多いので、現在、その問題ははじまったばかりである⁽¹⁶⁾。

2 一人っ子政策の形成過程

本論文では比較的に大きい政策の変化を中心に、一人っ子政策の形成過程を二つの段階に分けた。つまりそれは一人っ子政策の草創期と形成期である。

(1) 一人っ子政策の草創期

1978～1979 年は、一人っ子政策の草創期である。中国共産党第十一期全国人民代表大会（以下は全人代と省略）第三回会議以降、計画出産政策は、社会発展において重要な地位を占めてきた。中国の基本国策の一つになったため、計画出産に関する行政は「新しい時代に入った」⁽¹⁷⁾。

一人っ子政策の草創期において、代表的な出来事はつぎの三項目がある。それは1、1978 年中国共産党中央委員会第 69 号文件、2、『一人っ子提議書——革命のため、子どもは一人に』（以下『一人っ子提議書』）、3、1979 年全国計画出産事務室主任会議の開催、である。

中国共産党中央委員会第 69 号文件によると、「計画出産方針を確立したうえに、（中略）政策に関する問題を解決する」。第 69 号文件が明記した計画出産の方針は「夫婦一組について子ども一人が最も好ましく、多くても二人」である⁽¹⁸⁾。

多数の地方政府は、すぐに第 69 号文件の内容を伝えたため、計画出産政策の方針は中央から地方まで順調に推進された。例えば、「江蘇、湖南、天津、福建、浙江、山東、広東などの省・市は計画出産に関する会議を開催した。広東は計画出産に関する条例三

十項を制定し、天津は八項を制定した（中略）。多くの省と解放軍全軍は第 69 号文件をコピーし、関連機関に配った」。その結果、地方政府は計画出産と「四つの近代化」⁽¹⁹⁾の関係を認識し、計画出産に関する活動は各地方の中国共産党委員会の重要な議題の一つになってきた。『安徽省人口概述』によると、「1979 年初、計画出産が強化されたため、安徽省計画出産事務室は、革命委員会に直接に管理されてきた。計画出産の関連機関も強化された」⁽²⁰⁾。

民間において相次いで『一人っ子提議書』のような提議書や宣言などが発表された⁽²¹⁾。1978 年、女兒を一人もつ天津機械工場の 28 歳の女性工場労働者である馮宏鵬は、もう一人男の子を産みなさいと家族に強く期待された。しかし、彼女自身は国家に貢献するため、少生・優育の決心を表明した。彼女は家族の期待に反し、一生懸命に働き、「生産と建設のため、もう男の子を欲しがりません」と宣言した。その意志を発表した後、彼女は工場の最高の奨励をうけた⁽²²⁾。

1978 年 12 月 3 日、これを伝え聞いた天津医学院（現在天津医科大学）の女性 44 人の連名で「一人っ子提議書——革命のため、子どもを一人に」という提議書が出された⁽²³⁾。その提議書の主要内容は、「中国の経済発展のため、人口の量を抑制しなければならない。夫婦一組について子ども一人が最も好ましい」⁽²⁴⁾。提議者の一人であった李敬之は、現在産婦人科の専門家である。『天津日報』のインタビューをうけた際に、李敬之はつぎのように語った。「当時、私と主人は共産党の党員ではないが、『夫婦一組にとって子ども一人が最も好ましい』と提唱した主な原因は私たちの仕事が非常に忙しいからです。その時期、一生懸命に仕事しなければ、心から祖国に罪があると気がしました」。そのほか、当時に李が産婦人科に仕事をしているため、「人口抑制政策がなかったとき、産婦人科の病室はいつもたりないと感じた。ベッド一つに、産婦三人が一緒に寝ていることがよくある」と李が回顧した⁽²⁵⁾。

「中国政府には、1978 年に『一人っ子政策』という考え方がすでに存在していた。群衆の提議は恐らく中央の『一人っ子政策』の先行提案である」⁽²⁶⁾。

1979 年 1 月 4～17 日、天津における『一人っ子提議書』を契機に、全国計画出産事務

室主任会議が北京で開かれ、全中国レベルの一人っ子政策が検討された。検討した結果は、第 69 号文件の主要内容として盛り込まれた。即ち「夫婦 1 組について子ども一人が最も好ましく、多くても二人」が明文化された。この会議で、「第三子またはそれ以上出産する者には、経済面で必要な懲罰を加えるべきである」と制定され、経済面で一人っ子政策の実施を保障するという基本路線が確立された⁽²⁷⁾。

次いで、陳慕華は、「計画出産行政の重点は、夫婦一組について子ども一人である。それは中国人口問題を解決する戦略的な任務である」と強調した⁽²⁸⁾。具体的に、陳慕華はつぎのように語った。「以前は『子ども一人が最も好ましく、多くても二人』でありましたが、現在は『子ども一人が最も好ましい』となった。後半の『多くても二人』を取消しました」⁽²⁹⁾。陳慕華が提出した「一人っ子を産むことを励ます」というのは、実際は「夫婦一組について子ども一人」の最初の政府側の表明であった。それから、「一人っ子政策」の方向性が明らかになった⁽³⁰⁾。

一人っ子政策は「子ども一人が最も好ましく、多くても二人」から「子ども一人が最も好ましく」、そして「夫婦一組について子ども一人」と変遷していった。そのとき、多くの論争があった。ある学者は「特定の年度に新生児を産まない」、「孫の指標を分配する」という具体的な方法を提案した⁽³⁰⁾。

そのほか、中国共産党の責任者であった鄧小平、華国鋒、陳雲は相次いで公開の場で、「子ども一人」を提唱した⁽³¹⁾。鄧小平は外国来賓と話した際に、「われわれは計画出産と人口増加率の抑制を戦略的な任務にします。『子ども一人』を励まします。一人っ子夫婦に経済的な奨励を行います」⁽³²⁾。陳雲は、「人口問題をよく解決しなければ、将来は大問題を引き起こします」と述べた⁽³³⁾。1979 年 6 月 1 日、上海市革命委員会のリーダーとの会話で、陳雲は、「法令を作り、夫婦一組において子どもを一人しか産んではいけないと明らかに決定しましょう。(中略)以前は『子ども一人が最も好ましく、多くても二人』と私に言われましたが、私はもっと強くて、明確的に『子ども一人』と規定したほうがいいです。われわれは、息子と孫がいないと叱られる、という心理的な準備ができました。そのようにしなければ、将来（人口問題）は解決できません」⁽³⁴⁾。

政府の責任者の話しからよくわかったのは、当時の中国政府は「子ども一人」の決定はしかたない選択であり、「中国共産党の中央指導の思想が徹底的に貫徹した結果」であった⁽³⁵⁾。そして、一人っ子政策は、すでに全国レベルの政策となり、具体的な実施方法は全国での政策ができてから、各省・市で試行することになった。

(2) 一人っ子政策の形成期

この段階における一人っ子政策は、いわゆる「こは一人しか産んではいけない」という厳しい政策であり、全国各地で実施された。宋健など四人の今後 100 年の人口予測、第五回全人代第三次会議と『中国の人口抑制問題についての共産党員と共産主義青年団員全員に対する公開書簡』（以下『公開書簡』）がその時期の代表的な出来事であった。

1979 年から、上述したとおり、一人っ子政策がすでに全国で実施されたが、中国の人口基数が巨大なため、人口の量を抑制することは依然に難しかった。その結果、中国政府はマスメディアで大いに人口抑制の重要性を宣伝した。1980 年 2 月 11 日において、『人民日報』は、『必ず計画的に人口増加を抑制しなければならない』という社説を発表した。その社説は人口増加の具体的な目標を出した。

1980 年 2 月 13 日、宋健、田雪原、李宏元、於景元は、共同に今後 100 年の人口を予測した。彼らによると、「1985 年までに完全に『一人っ子化』を達成すれば今世紀末の人口増加率はゼロに近づく、全国人口総数は 11 億以下に抑えられる」⁽³⁶⁾。同時に、彼らは、「人口高齢化は少なくとも今世紀内に生じない。しかも 21 世紀の初めの 20 年以内には深刻化しない」⁽³⁷⁾と言った。その人口予測のレポートは、一人っ子政策に対する大きな影響を及ぼすものであった。そのレポートを発表したため、その後、宋健は『公開書簡』の著者の一人となった。1980 年 9 月 7 日、華国鋒総理は第 5 期全人代第三回会議で「夫婦一組に子ども一人を幅広く強力に提唱し、今世紀末の全国総人口が 12 億を超えないようにしなければならない」と述べた⁽³⁸⁾。

1980 年 9 月 25 日、中国共産党中央委員会が、中国の人口抑制についての共産党員と共産主義青年団員全員に対する公開書簡を出した。『公開書簡』のなかで「中央はすべての共産党員、共青団員、とくに各級幹部が、実際の行動で率先して国务院の呼びかけ

に応じ、積極的に責任をもって辛抱強く、丁寧に、広範な大衆に宣伝教育をするよう求める」⁽³⁹⁾。「人口抑制のための一連の具体的な政策として、保育・入学・医療・従業員募集・学生募集・都市住宅・農村住宅用地分配などの面において、一人っ子とその家族に配慮する」⁽⁴⁰⁾。『公開書簡』によると、高齢化や少子化がもたらす老人の介護問題を心配する必要がない、とした。その原因を以下のように述べた。

「1、高齢化は今世紀には起こりえず、早くて40年後にはじめて現れるが、中国は事前に対策を講じて、こうした現象を防止することは完全にできる。2、(中略)。3、老人扶養については、将来生産が発展して人民の生活が改善されれば、社会福祉と社会保険は必ず増え改善されるだろうし、老いても養われるようになり、高齢者の生活も保障されるようになる」⁽⁴¹⁾。中国共産党は、各界の専門家を集め、今後一人っ子政策の実施によっていかなる問題が発生するかについて論じた。出生順位と知力、労働力不足や家族構造、高齢化などについて議論し、25～30年の間政策の継続を決定するとした⁽⁴²⁾。

中央から地域までの「子ども一人しか産んでいけない」という運動動員と宣伝は、一人っ子政策の実施に対する大きな影響を与えた。1983年全国計画出産宣伝月の間に、全国で中絶手術をうけた人数は268万に達し、1981年一年間の総出生人数より多かった⁽⁴³⁾。

1980年から1984年までの4年間に、中国は、確実にある時期に、厳しい一人っ子政策を実施したが、1984年において、一人っ子政策の仕組みはすでに現在の仕組みとなった⁽⁴⁴⁾。言い換えれば、1984年から、一人っ子政策の仕組みは安定しており、比較的に大きい政策の変化がなかった。しかし、その後一人っ子政策への調整は絶えることはなかった。

3 一人っ子政策の正機能と逆機能

一人っ子政策の実施は、中国社会と中国家族に大きな影響を及ぼした。つぎに、中国社会における一人っ子政策の正機能と逆機能を分析する。

（１） 一人っ子政策の正機能

A 人口増加を抑制

一人っ子政策の直接的な影響は、人口増加を抑制したことである。一人っ子政策は都市戸籍者に対する政策であるが、農村人口の増加及び全国人口増加の抑制にも寄与した⁽⁴⁵⁾。1979 年、一人っ子政策が実施されてから現在までの 30 数年間において、中国は世界の人口抑制に対して大きな貢献をした。一人っ子政策の効果として、3 億人以上の出産を抑制し、中国の近代化に貢献した。

B 女性の社会的地位の改善

中国の伝統的な社会のなかで、女性の社会的地位は非常に低かった。男性は家族の後継者と考えられたため、男性は社会でも家族でも中心地位を占めていた。したがって、人々はだれでも男児を期待していた。それに対して、女性は主に家事や子育てであり、従属的な地位を占めた。

一人っ子政策の実施は、「必ず男児を産む」という考え方をやめさせた。一人娘を産んだ場合、一人娘は一人の男の子と同様に、家族の唯一の期待と消費・精神の中心となった。一人っ子政策が実施されたため、一人娘と一人息子の家族内の地位は同様になり、よりよい教育を受けられる。一人っ子の両親にとって、一人っ子しか産んではいけないため、性別差がない。一人っ子政策は中国社会の男女平等、特に女性の社会的地位の改善に寄与した。

C 人口素質の向上

他方では、一人っ子政策が実施され、家族内の子どもの数が減ったため、子どもの健康と教育に対する重視度が高まってきた。「優生」の観念も人々に浸透し、妊娠期において子どもの身体素質と知力を高めるため、栄養などに注意するようになった。「優生」というのは、「遺伝的障害がなく次代が徳・知・体などの面でも全面的成長をとげ、中華民族が繁栄するよう資質を高める。1980 年婚姻法ではいとも同士の結婚を禁止したことはその代表的な一例である」⁽⁴⁶⁾。胎児が携帯、コンピュータからの電波を避けるため、親はたくさん関連道具を買う。それ以外、ダウン症に関する出生前検査と胎児の

医学診断は、現在中国に十分に普及されている。優生検査に対する重視度も高くなった。

他方では、児童芸術教育の普及率も高くなった。「確かに中国であっても日本であっても、バレエを学ぶのはぜい沢なことである。中国ではここ数年、児童芸術教育の普及率が高まり、大・中都市の多数の子どもが、芸術関連の学習経験を持ち、楽器・声楽・美術に関してはすでに十分に普及しているといえる」⁽⁴⁷⁾。

(2) 一人っ子政策の逆機能

A 一人っ子両親の扶養問題

中国人口計画出産委員会主任である李斌は、つぎのように語った。「中国の人口転換はすでに完成した。現在、中国での特徴の一つは生産、結婚、出産、老後扶養などの伝統的な家族機能が弱まってきたことである」⁽⁴⁸⁾。現在、中国では、高齢者人口の規模が巨大であり、高齢化の速度もはやく、豊かになる前に高齢化する、という三つの特徴がある⁽⁴⁹⁾。2011年において、60歳以上の高齢者の数は1.85億に達した。「高齢化社会がもたらした問題はたくさんある。しかし、扶養だけでは高齢化社会の問題を解決することできない。高齢者の精神的なケアが足りないと、巨大な社会的な圧力になる」⁽⁵⁰⁾。

一人っ子政策のため、一般的に家族のなかに子どもは一人しかいない。一人っ子の親が高齢者になると、一人っ子家族は三人の家族から、いわゆる「空き巣家族」や「单身空き巣家族」と変わる可能性が高くなる。中国社会科学院の調査によると、空き巣家族の高齢者の生活水準は比較的に低い⁽⁵¹⁾。したがって、2013年7月修正した「高齢者权益保障法」は、親と一緒に暮らしていない子どもは「よく家に帰り、親の面倒を見るべき」と訴えた。その規定は、現在の高齢者の介護の難しさを反映した。

B 一人っ子の教育問題

一人っ子政策は、人類社会の人口抑制に対する大きな貢献をした。しかし、一人っ子の教育的な配慮をしていかなければならない⁽⁵²⁾。

多くの両親は生活の教育と愛の教育を軽視し、勉強の成績だけに注目する。このような両親は、現在一人っ子の両親の大多数を占めている。なお、一人っ子は家族の消費的な中心と精神的な中心になり、親の世話で成長してきた。一人っ子は、普通に小さい頃

から親に叱られたことがなかった。近年、学校の先生に叱られ、自殺した一人っ子がいる。一人っ子は「小皇帝」と呼ばれた。一人っ子の教育は、第一世代の一人っ子にかかわる問題だけではなく、彼らの子どもにも同様な問題が抱えている。

そのほか、一人っ子政策の逆機能の一つは、人権と政府のイメージの低下に関することである。一人っ子に関する国外と国内からの批判は多かった。違反者には高額な罰金が科されるため、人工妊娠中絶を強いられる女性が後を絶たず、人権団体などから批判を浴びていた⁽⁵³⁾。

また、一人っ子政策は、中国の若者の「親のすねかじり」の客観的な条件となった。一人っ子は家族の消費中心となり、消費文化やメソ文化などの影響で、若者の消費意識は彼らの親とかなり異なる。部屋、車、ブランド品への欲求は大きくなった。子どもの数が減ったため、一人っ子は一人っ子ではない人より親からより多くのものをもらえる可能性が高い。また、親は自分の子どもがほかの子どもに負けさせたくないため、できる限り、子どもの経済的な要求を満す。その結果、「親のすねかじり」という現象は多くなった。

第2節 文化大革命

1 「文革両親」⁽⁵⁴⁾である一人っ子の親たち

ほとんど一人っ子の両親は、子どもに対する期待が高く、子どもを溺愛することもよく見られる。その理由の一つは、彼らにとって子どもは、家族の唯一の希望だからである。もう一つの理由は、彼らは青少年期に文革大革命の経験があったからである。

第一世代の一人っ子の両親は、1950～60年代に生まれ、身体の成長、教育など人生の過程のなかで文革の影響を受けた。文革は彼らの人生を変えた。前述した一人っ子T・X氏の父が言ったように、児童期においての飢えの経験は、彼らの共有している経験である。貧困より厳しいのは、文革のため、彼らはよい教育を受けられなかった。D・B

氏の父はつぎのように言った。「私は『文化大革命』の過程に小・中学校を過したので、まったく本を読まなかった。小学校から卒業した際、小数点の加減もできなかった」。

教育レベルの低下は、第一代の一人っ子の親たちに極めて悪い影響を与えた。1990年代から、国有企業を改革したため、多くの人はレイオフされた。40～50歳であった一人っ子親たちはレイオフされる目標となってしまった。子どもは、中年期である一人っ子の親たちの生きがいとなった。F・Y氏の母はつぎのように語った。「成年後、社会転換期に遭い、教育レベルが高くなかった。僕たちは改革の犠牲者になってしまった。唯一の子どもは私たちの生きがいとなった」。

第一代の一人っ子の親たちは、人生のなかで社会転換期に出あったため、たいへん苦労した。彼らが、自分の子どもに苦労させたくないのは理解できる。一人っ子の親たちは、小さい頃の自分の生活が厳しかったため、子どもに自分が享受できなかった生活条件を与えたいとなる。

以上述べた一人っ子の親たちの人生経験も、一人っ子への溺愛の原因の一つとなった。そのほか、現在流行している社会的な文化が、その溺愛を加担している。それは負けたくない気持ちであり、仕方がない気持ちも含まれる。現在の中国で、若者たちは親への依存度はかなり高い。親が社会地位の高い場合、彼らの子どももいい生活支援をもらいやすい。その環境の中で、親たちは全力でいい生活条件を子どもに与え、子どもはほかの若者に負けないように努力している。これが溺愛の客観的な原因になった。特に男性にとって、新婚用住宅がなかったら、結婚することは難しく、いい配偶者ができない。調査の結果によると、一人っ子の親たちはほとんどみんな息子に家を買って与えた。家を買えない親たちは自分が住んでいる家を息子に与え、ほかの住宅を探す。

一般的に、溺愛は親から幼い子どもへの愛情であろう。しかし、一人っ子たちは成年後も親に溺愛される。一人っ子家族において、溺愛は多くの側面で現われる。中国において、親が一般的に子どもに新婚用住宅を購入することは、2000年からのことである。子どもに住宅ローンを負担させたくないため、一部の親たちは早めに子どもに住宅を買って与える。以前の中国社会では、このような状況は信じられないことであった。一方

では、これは中国の住宅改革と密切に関わっている。他方では、親たちの一人っ子への溺愛も重要な原因である。

前述したY・J氏の例からみると、親たちは、Y・J氏が結婚する前に娘の名義で家を買った。その中では、多くの考えがあった。一方、娘が結婚する前に彼女に買い与えた住宅は娘の個人的財産であり、もし離婚したら、娘は依然に持ち家を持っている。また、娘に住宅を買ったことは娘への「投資」であろう。娘がよい配偶者を探せるため、彼女に家を買って与えた。娘が結婚すると、その住宅は娘の夫の家族内のステータスを上げることに役立つ。親は子どもに新婚用住宅を購入したことは、子どもへの溺愛だと一般的に思われた。子どもへの溺愛の本質は、子どもを苦勞させたくないことである。親から新婚用住宅をもらえたことは、「親のすねかじり」だと表現されたが、実際、多くの場合ではそれは親の望みでもある。

文革の経験は、一人っ子の親たちの、子どもへの期待を高めてきた。しかし、期待される視線のなか、他人と比べられることは、一人っ子に大きな心理的なストレスをかけた。各家族の状況が異なるが、両親の出身、職業、社会的地位などは子どもへの期待に影響を及ぼす。両親は当然に子どもがそれなりの人材となり、ハイレベルの暮らしをしてほしいと期待する。両親の教育レベルが高く、社会地位も高い場合、生活条件だけではなく、勉強や学業成績、知力、学歴なども比べようになる。そのような両親は、自分の子どもの知力が高く、他の同年齢者よりもっと優秀だと考えている。実際に、一人っ子の間の競争は、単純に子どもの競争ではなく、「二重の競争」⁽⁵⁵⁾である。言い換えれば、子どもは親世代の代理競争をしている⁽⁵⁶⁾。

大多数の一人っ子の両親は、よい教育を受けなかったため、子どもの教育を重視し、子どもによりよい教育を受けさせたいと希望する⁽⁵⁷⁾。彼らは、子どもがよい教育を受け、大学生になり、自分の人生を変え、親の実現できない理想を実現してもらいたいという希望を持っている⁽⁵⁸⁾。要するに、子どもが自分の幼い時にあった苦勞をさせたくなく、自分ができないことを子どもにさせたい。日本もそうであった。1950～60年代に、日本人の両親が子どもにピアノを勉強させたことは、その典型例の一つである⁽⁵⁹⁾。

しかし、多くの両親は生活や感情にかんする教育を軽視し、勉強の成績だけに注目する。このような両親は、現在一人っ子の両親の大多数を占めている。彼らは生存競争を強調しすぎる。親の高い期待によって子どものストレスは大きくなる。これは文革と改革開放などの社会変動が、一人っ子の両親に与えた影響の帰結の一つである。

葉萱は『紙のような婚姻』という本のなかで、次のように指摘した。「1980年代に生まれた子どもは、小さい頃から親の期待とストレスのなかに暮らし、他の同年齢者と闘い続けてきた。その結果、一人っ子が両極端になったのは必然である——弱い人はさらに弱くなり、強い人はもっと強くなる」⁽⁶⁰⁾。このような「格闘のような戦い」は、子ども自身の勝ち気だけではなく、文革両親からの子どもへの期待にも影響されている。でも、その「格闘のような戦い」が、一人っ子の心理によくない影響をもたらす。M.T.が指摘したように、『世界に一つだけの花』という歌が歌ったとおり、他人と比べる必要はない。

子どもにとって、他人との比較という闘いからの一番大きい影響は、集団のなかで「相談できる人」を失ったことである。小さい頃の友達でも、学生同士でも、ある段階になると自分と比べる可能性がある。例えば、小学校の成績レポートを持ち帰るときに、一緒に帰る友達の成績がどうだったかと両親から聞かれる。30歳になっても結婚していない場合、両親は同年齢者の友人が子どもを生んだと間接的に催促する。知らずのうちに、友達は敵になり、潜在的な比較と競争は一人っ子の友達を失わせる。インタビューによると、一人っ子はみんな「相談できる人」を探している。それは友達を失い、孤独になった表れの一つである。人間は思いを語る欲望と欲求がある。一人っ子にとって、「相談できる人」の価値がもっと大きいだろう⁽⁶¹⁾。

2 「下放運動」

一代目の一人っ子の両親を「文革親」と呼ぶのは、文化大革命の衝撃が彼らに最も大きいためである。文革親世代の人生経験は複雑で数奇であり、三年自然災害と文化大革命

命を経験しただけでなく、国が主導した重要な人口の遷移活動である「下放運動」も経験した。

「下放運動」（中国では「上山下郷運動」と呼ばれる）は、計画経済の一部であるほか、政治運動としても展開された。この運動は、「都市の中・高校を卒業した知識青年が山村・農村に定住して、貧農・下層中農から再教育をうけつつ農業に携わる運動」⁽⁶²⁾である。「この運動は、一世代の都市部青年に深い影響を及ぼした。数百万の青年（当時その世代の都市青年の総数の約半分）の生活秩序を狂わせただけでなく、彼らの両親や兄弟姉妹、ひいては都市の社会全体に影響を及ぼした」⁽⁶³⁾。

ある意味では、この運動は文革より一人っ子世代の親の人生軌跡を一層直接に変えた。この運動は持続時間が長いため、多くの「知識青年」、実は中等学校以上の都市部青年が田舎で五、六年ほど下放され、十年以上の者もいた。その内、一部の人が農村で教育された期間に結婚し子どもも作ったので、都市に帰らなくなり、そのまま農村で生活した。文化大革命と下放運動の影響により、一世代目の一人っ子の両親は、勉強すべき年齢に田舎で政治改造されたせいで、よい教育を受けられなかったため、より生活の現実が分かっていることもあり、青年として持つべき幻想を放棄した。

また、彼らが少年・青年期に多様な苦難に見舞われたので、子どもや若者としての権利と幸せを享受しなかった。これは国がもたらした苦難であり、その苦しみが一生の生活に影響している。80年代の中国の経済発展に伴い、国有企業の転換により、大量の労働者が失業した。一人っ子世代の親は、殆どが高い教育を受けなかったため、職場を追われてしまった。失業後、生活が苦しくて、聴き取り調査を受けた一人っ子の親は、単純労働で生活を維持してきたと語った。「失業後の4年間に、金銭も勤務先からもらっていなかった。当時は40代だから、他の仕事もできなくて、保険を売るしかなかった。昔の同僚は、僕と同じような失業者で、レストランで食器を洗ったり、セーターを編んだりした。一番かわいそうな人は、病気でアルバイトすらできなかったため、夫婦2人共、数年間収入がなくて、最も難しかった時は野菜さえ買えずに、野菜市場の閉店時に、残りの葉を拾うしかなかった」。一人っ子世代の親に見舞われた苦しみは、一人

っ子世代には、想像もできないことである。

しかし、潘鳴嘯の言う通り「確かに、この世代は教育を受ける権利が奪われて、幻想もいちいち破滅されたが、これを全面的に否定することはない。彼らは政治、経済、社会の現実で唯一無二の経験をしたが、それは次世代（1978 年後の世代）として経験していないことであり、また多くの分野において重要な切り札となる。この世代の幹部、特に工場や企業の指導者が持つ、現実を尊重する態度や決意・根性は、すべて高く評価されている。この世代の中で、すでに芸術家、特に数多くの作家が出ている。彼らはすべて自身の経験より靈感を汲み取って、独特の風格を備える作品を創作している」⁽⁶⁴⁾。

3 一人っ子の親たちの間の競争

以上の聴き取り調査から見抜けるように、親は子どもに心血を注ぐのを自分の責任だと見なしている。子どもを育てるには、「損」が必要なことと思われる。子どもに結婚用マンションを購入するのは、最も代表的な例である。現在、中国一世代目の既婚した一人っ子は、殆ど自分の家を持っている。自宅が無いから親と一緒に住む既婚者は少なく、借りたアパートで結婚するのは更に少ない。両親が一人っ子のために、結婚用マンションを購入するのは普遍的な現象になった。一人っ子の親が甚だしきに至っては重病を患っていても、あるいは生活が苦しくても、依然として子どもに良い生活条件を提供しようとする。その中に、なんらかの必要とする要因を含んでいる。

次から筆者は、子どもに結婚用マンションを購入する現象を分析する。子どもに結婚用マンションを購入するのは、居住条件に限られるわけではない。一人っ子として、自分がマンションを買えなくても、結婚後に両親の家に住むことができるし、中国は元々親と同居する伝統文化もある。また、結婚してから親と別居したいが、購買力がない場合、しばらくアパートを借りてもいい。現在、中国の都市において、住宅賃貸の市場が日々発達しているため、借りたアパートで結婚するのも理想的な過渡方法である。アパートを借りるのは、一人っ子が自由生活への追求を満足できるほか、経済的にもさ

ほど無理なものではない。

どうしても家を借りるのではなく、買わないといけないか。調査には、なぜマンションを買うかについて、一人っ子と親の説明が違っている。一人っ子としては自分ではなく、両親の意志であると答えたが、それに対して、両親の答えは「他人も買っている」、「買わなきゃいけない」である。それにより、一人っ子の親がマンションや車を買うには、微妙な競争意識があることが覗ける。他人ができるから、自分ができなければ負けたという感じである。

一人っ子の親が子どもにマンションを買うことでは最も主要な動機が「他人に負けない」である。彼らの思想は、他人ができれば、自分もすべきと、できなければ「メンツ」がない、という。この角度から見れば、親が食費を切り詰めて節約しても、子どもに大きなマンションを買うことに理解できるようになった。他人との競争を通じて、一人っ子の親が満足感を得られる。その満足感は子どもからではなくて、ただ他人との子どもに関わる競争からである。時には、子どもが比較されたツールだけのケースもある。

その異常な競争意識は、現代の中国社会での競争し合う集団心理の反映である。かつて中国知名作家の梁曉声がある大学で講座を行った時に、大学一年の男子学生と対話した。その学生が30歳前に、遅くとも35歳までに、それなりの業績を残せないと、自殺すると言った⁽⁶⁵⁾。梁が非常にショックをうけた。この男子学生の考え方は普遍的であり、数多くの中国の若者の理想と志向を代表している。彼らは人に負けることを恐れ、さらに平凡を恐れる。しかもこの思想は、若者が理想への追求を反映するほか、さらに親たちからの彼らへの要求の反映でもある。

社会のさまざまな家族形態の共通点と言えるかもしれないが、両親すべてが自分の子どもが立身出世し、先祖の名を揚げることを望んでいる。具体的には事業が成功して、同世代を超えることである。しかし、過度の望みで、子どもの平凡を恐れるのは中国の親の集団心理であり、過渡期にある人間がすばらしい未来への極度の渴望、それに数十年の経済急速発展にもたらせた、自己膨張と成功しか許せない奇形な心理状態の反映でもある。

とにかく、十数年の政治的混乱によって、中国家族での家族関係への見方が変わってきた。親子関係、兄弟関係、夫婦関係は政治運動に伴って、複雑かつ多变的になった。特に親子関係及び子どもや親に対する認識について、従来、中国人の伝統観念では子どもは両親や家族に属するものであったが、十年間の文革を経過してから、その観念も変わった。子どもは自分より、国に属するものであり、親が子どもと異なる「派閥」に属する場合、子どもが親と「一線を画して」、親子の縁を切ることもよくあった。下放運動は更に子どもを両親から長く分離させて、一緒に生活できなくなった。それ故、十年激動が親子関係にもたらした最大の影響は、極端な状況下であるが、親子関係の脆弱性と破壊性を見られた。このような深刻な認識も、一人っ子世代の親が子どもに対する見方に影響している。

第3節 社会の富裕化

1 豊かな社会の到来

一人っ子家族の家族関係が形成した重要な背景の一つは経済的背景、即ち中国社会の豊かさである。中国において、社会の富裕化に伴い新たな問題が出てきた。一人っ子は改革開放政策が実施されてから生まれた一世代である。彼らは改革開放の過程に伴い成長した。親世代の苦しい生活を知らず、生活状況はしだいによくなった。一人っ子は改革開放の利益を受け、より高いレベルの生活を求めている。一人っ子は中国社会の富裕化のなかで成長してきた。

現在の「親になった一人っ子」は以前「小皇帝」（小さい皇帝）と呼ばれていた。1978年から改革開放政策が実施されてから、中国の経済が急速に発展してきた。経済発展とともに、人民の収入と購買力が高くなった。親が子どもに家を購入して与えることは可能になった。改革開放の前に、現在のように何十万元あるいは何百万元で子どもに家を買って与えることは、信じられないことであった。

2 豊かな社会のなかの個人

経済発展のおかげで、国民の教育レベルは向上してきた。若者たちが学校にいる時期が長くなり、仕事を始める就業年齢は普遍に遅くなった。今回調査した 29 人の一人っ子のうちに、13 人は大学卒の学歴を持っている。学歴が高い人も比較的によく、博士 2 人であり、修士は 7 人である。大学教育を受けてない 3 人は全員高校を卒業した。そのため、一人っ子が自身の力で新婚用住宅を買うことは難しい。特に学歴が高い若者にとって、結婚は在学中にする可能性が高く、学生は収入がないため、親の金で新婚用住宅を買うのはしかたないことである。この場合、経済成長は直接に中国家族の親子関係に影響を及ぼした。

第一世代の一人っ子は、ほとんど中国が豊かになった過程と同時に成長してきた。個性を追求する誇示的消費の時代は、一人っ子の共通した成長の背景であった。子ども時代から、一人っ子は家族の消費中心の地位を占め、誇示的消費の対象として成長してきた。そして、大多数の一人っ子にとって、誇示的消費は自然な消費状態である。

現在、第一世代の一人っ子は、すでに親になった。豊かな生活をしているため、「親になった一人っ子」は、当然自分の子どもに一番よい生活を提供しようとする。前述したように、ベビーフードなどを海外から購入することはよくみられた。一人っ子の子どもたちは、一人っ子の代わりに、新しい高い消費の対象となった。

一人っ子の子どもは、親世代だけでなく、祖父母の高い消費の対象もなった。多くの高い消費は、子どもの基本的な欲求と関係なく、親の心理を満足させるものである。実際、子どもの成長によくない影響を与えている。誇示的消費の要求は消費社会におけるよく見られる現象の一つであり、本質は他人との競争である。

富裕化の急速化、都市住民生活レベルの向上は、一人っ子の親が子どもに巨大な出費を払える根本条件である。まず、富裕化は一人っ子世代の親の生活水準を向上させたほか、老後の年金や医療保障も大いに向上させた。老後保障の向上により、親として老後

の心配が少なくなるので、蓄積や年金で子どもの生活を支援できる。一人っ子の親は、殆ど都市内の企業や事業部署からの退職者なので、都市医療システムの恩恵を全面的に享受でき、年金で退職後の良い生活を保障できる。子どもの生活問題に援助して、マンションや車を買うことに蓄積を使い果たしても、老後の保障に全く影響されない。

その点について、農村と都市は大きな違いがある。ごく一部の人を除き、農村の親は、子どもが成人した後でも引き続き援助する場合は少ない。農村の親は、年金制度や都市住民のような全面的な医療保障を享受できないので、子どものマンションのために蓄積を使い果たせないのは、主に老後を考慮しているからである。それより、過半数の農村の親は、子どもからの支援が必要であり、特に医療に関して顕著である。

富裕化のため、都市部の親はより多くの時間とお金を子どもに投入できるようになった。改革開放以前の中国は計画経済の時代であった。計画経済時代の中国家族において、経済レベルが低いため、生活水準も低かった。米や小麦粉を含む日常食品はすべて食糧配給切符で受給した。その食糧配給切符は、家族人口によって取得したものである。当時、家族資源が非常に限定的だったので、親が子どもにより多くの食べ物や服をあげたくてもできなかった。当時の平均収入も低いので、テープレコーダー一台を買うには数ヶ月の給料も掛かった。当時、自家用車を買うのは一般中国家族にとって、ただ一つの夢であった。

改革開放以後、特に 2000 年以降、中国経済が大きく成長し、住民の収入も高くなってきた。2000 年以降、中国の都市では、親が子どもに結婚用マンションや自動車を買うのが普遍的な現象になった。過半数の家族で、子どもにマンションを買い与える時、経済的に苦しくなって、親が借金したり、定年後に再就職したりするが、結果から見ると、最終的に買えるようになった。この結果から、都市住民収入の普遍向上と社会の富裕化が覗ける。

なぜ中国の一人っ子の両親に、孫を持つ期待が強いのかというと、現在多くの第一世代の一人っ子の両親は、すでに退職しているからである。彼らの経済的な条件は比較的によく、暇も多い。孫を持つことは、精神的な支えになった。これも社会富裕化の影響

の一つであろう。

一代目の一人っ子の親は、良好な老後の経済条件、及び子どもと同居または近くに住める地域条件を備えるので、互助関係を築くに有利である。そのため、一人っ子の親の体力と時間は殆ど子どもの代わりに孫の世話をすることに使われている。

しかし、一人っ子の子どもの間には、大きな格差がみられる。これも豊かな社会、あるいは経済発展の影響の一つである。前述したように、一部の「親になった一人っ子」は、海外から高い食品と服を子どもに買ったが、それに対して、収入が低い一部の家族は生活必需品にも恵まれなかった。一部の一人っ子の子どもは2歳から高い学費を必要とする知能開発の教室に参加し始めるが、ほかの一部は一つのおもちゃさえ持っていないのである。

3 豊かな社会がもたらした親のすねかじり

全体からみれば、一人っ子の新婚用住宅の質は、自身が持っている貯金の量と関係なく、彼らの親たちの貯金と関係しており、親の職業と社会的地位と関わっている。言い換えれば、一人っ子が持っている住宅は、一人っ子が努力して購入したものではなく、親たちの財力によってである。テレビなどの媒体が報道したように、子どもに住宅を購入するため、親の苦労や疲労が重すぎる例もよくみられた。

調査からみると、一方、若者たちは「親のすねかじり」を本心からしたくないが、高学歴化で終業が遅くなり始め、貯金も不足しているため、自身で新婚用住宅を購入できる可能性が低い。親の力を借らなければならない。また、多数の一人っ子の親たちはより早く子どもに家を買ってあげることで自身を安心させると言っている。子どもに住宅を買ったら、責任をはたしたと感じているようである。

しかし、以上述べたような現状は、若者に強い失敗感をもたらし、奮闘しようとする情熱を冷やました。F・Y氏が言ったように、30歳でも自立ができなく、10年以上大学に就職したが、住宅を買えなかった。そのため、彼は自分が失敗者であると感じていた。

若者が早すぎる住宅を持っていることは、奮闘精神と貯金意識の欠如をもたらす。筆者の聴き取り調査をみると、中国の一人っ子たちは、30歳以内に持ち家を持っている。一部の一人っ子は大学の時期に住宅を持っていた。韓学志が指摘したように、物質的条件が良いため、多くの一人っ子は安定している仕事が欲しがり、起業家精神が足りなく、社会全体の発展によくない。アメリカ、日本などの発達した国家において、一般的に若者たちは35歳後に持ち家を持ち、20代に住宅を持っている人は少ない。彼らの新婚用住宅は借り家であり、購入したものではない。自分で家を買う欲求があったら、日米の若者たちは奮闘し、せっせと貯金しなければならない。

豊かな社会の到来は、親子関係を変貌させた。上述したように、子どもの高い消費、親のすねかじりなどの現状の背景の一つは、中国社会の豊かさである。

第4節 メンツ文化の影響

親子関係に対して、文化の影響も大きい。以下メンツ文化を中心にして論述する。

メンツは目に見えない記号であり、その目に見えない価値を追求するために、人々は消費している。「中国人にとって、メンツを守るため、命を捨ててもいい」という言い方がある。つまり、一部の中国人の心に、メンツは大切である。したがって、金銭によってメンツを買うのは、中国人にとって意味が大きいことである⁽⁶⁶⁾。

改革開放の政策が実施されてから、中国都市部の家族は短期間に豊かな生活を得た。第一世代の一人っ子は、ほとんど親が豊かになった過程と同時に成長してきた。それは消費文化のなかでよくあらわれている。消費行為は社会的行為であり、一旦消費すれば、言語と同様に交流体系に入り、他人と結びつける。その体系のなかで、消費行為は人と家族を階層で区別した。すなわち、消費行為に格差があるため、階層が見えてくる⁽⁶⁷⁾。中国人と中国家族に対する消費社会の影響は大きく、また中国社会の固有の「メンツ文化」が関係している。メンツを大事にすることは一般的であるが、メンツ文化は中国の特有な文化要素といわれてきた。

以上述べたように、G・K氏の息子はメンツにこだわって、服、靴などはすべてブランド品を買う。今の子どもは親からお金をもらって、必要でもない車を買ったりする。必要でもないものを、一切買わないようにしてほしい。親が苦勞して稼いだお金は、子のメンツのためだけに、消費されている。他人の子が持っているものを必ずうちの子にも、というのはどうにもならない心理である。G・K氏が語ったように、「他の子どもが持っているものを、どうしても息子に買ってあげたかった。メンツの意味も含まれたかもしれない」。

1980年代から、経済が急速に発展してきた。多くの家族が「三種の神器」（洗濯機、電気冷蔵庫、テレビ）など、耐久消費財を保有することができた⁽⁶⁸⁾。それは日本の高度経済成長期と似ている。現在の中国では、当時の「三種の神器」は生活の必需品となり、一般的な中国人にとって、車と家の購入は核家族の新しい消費形態となっている。都市部の若者は、結婚する前に家と車を買うことが一般的になり、家と車を持ってない青年は配偶者を選ぶときに不利になる。車を購入する需要が高まっていると同時に、北京、上海という大都市にある多くの車は、使わずに放置されている。また、駐車スペースは少なく、駐車するのは難しい。車の数が多くなったので、交通渋滞がひどく、車の便利性が十分に現れていない。

しかし、中国の家族にとって、車の記号的な価値は、実用価値よりもっと大きい。これは消費社会の特徴であり、消費文化は現代社会における商品の記号性を強調する。人々は商品の「記号的な価値」に注目し、消費は必要な範囲を超えている。一人っ子家族のなかで、親は子どものために必要ではない商品を買うというのは、典型的な誇示的な消費であり、家族のメンツのための消費が顕著になっている⁽⁶⁹⁾。

改革開放政策を実施した前、中国の経済水準が低下したため、人々の消費は基本的に「必要なものを買う」という消費であった。改革開放によって、中国は生産がしだいに増大し、人々の欲求や需要を十分に満たすようになった。そして、消費の動機はいわゆるメンツ誇示を求めるために転換された。誇示的消費は真実の需要を満たすことより、財産や社会的地位を誇示するための消費活動である。つまり、誇示的消費とは「自己満

足もふくめて、他者との関係における『社会的意味』において消費」することである⁽⁷⁰⁾。

2013 年、中国の流行語の一位は「土豪」であった。1949 年前の中国社会において、金銭をもち、悪事をする者という意味であった。しかし、最近頻繁に使われていた「土豪」は金遣いの荒い富豪、無教養のお金持ちという皮肉な意味である。上述した「土豪」という金遣いの無教養のお金持ちは、誇示的消費の典型的な例である。

文化は「適応」－「超越」－「自省」という三つの機能がある⁽⁷¹⁾。その三つの機能は近代が生み出した自我の性格類型と関連されてとらえることもできる。浅野智彦は、近代的自我を系譜的に整理する論考において、ピューリタニズム、スノビズム、ダンディズムの三つをその類型として取り上げた。そのうちに、スノビズムは成熟し始めた市民社会において上層の人々を称賛・模倣する一方、下層の人々を軽蔑・隔離するという上昇志向的な行動パターンである⁽⁷²⁾。

誇示的消費は真実の需要に満たされなく、財産や社会的地位を誇示するための消費活動である。誇示的消費の動機は、消費活動を通して、外部に自身の地位などをみせ、心理的な満足を得るためである。現在中国の誇示的消費の主体層をみると、富裕層は彼らの地位を示すためであり、一般人の消費も同様である。両者ともメンツを求めるためである。

中国において、地域によって、メンツ文化の影響は違う。調査地である済南市は、メンツ文化の影響が比較的に深い。M・Y 氏が言ったように、地域によって、メンツに対する態度も違う。「山東の人みたいに必死に住宅を買ったり、貯金したりして、息子や孫に残すことはないです。私の東北の友達も楽な生活をしていますよ。家は狭くても全然気にしていないし、数十万のミンクのコートを着ています。東北の人口流動が大きくて、若者は皆北京や南方へお金を稼ぎに行きます。親は普通地元で住宅を買わないです。買っても無駄です。若者は、海外へ行って帰らないですよ。でも山東は違います。皆、山東を出ていきたくはないですよ。皆済南や青島に集中しています。私は大学を出る時、クラスメートだれもが、全国に履歴書を提出して就職活動をしました。しかし、北京の会社に採用されても、済南の会社に採用されませんでした、不思議ですね。山東

省の人は皆省内に集中したがるせいで、済南の就職状況は北京より厳しいですよ。山東はいい処だというわけではなく、地元の人が他の処へいきたがっていないからですよ」。

中国における一人っ子家族を観察し、中国社会にある「他人指向」がよくわかった。つまり、中国人の幸福に関する理解は、他人の視線で左右される。例えば、まわりの人が車をもったら、車は「必需品」となった。もし、まわりの人の子どもは結婚し、自分の子どもは結婚しなかったら、親も子ども、おかしい人たちと思われた。簡単にいえば、現在の中国人は他人の視線で生活している。他人の生活水準以上となったら、幸せになった。また、現代の中国において、個人主義が強くなっているため、中国人が今までよりも自分を主張する機会が多くなった。そのため、「誰でも自分を主張する舞台を持つ時、従来の家族も完全に変わったというか、現在の家族は昔のように社会に属す機能を多く含むものではない。自分の親のように家族を大事にする人が少なくなり、それはより多く自分の価値を発揮できるのは家族生活にあるのではなく、社会生活にあるからである」⁽⁷³⁾。

一人っ子世代は、親世代と家族や子どもに関する見方が違う。若い世代の自己中心主義は、家族や婚姻に不利であり、20代若者の日々上昇している離婚率は、正に有力なその証明である。前述の分析から分かるように、すでに親になった一人っ子世代も子どもを可愛がっているが、両親のように何でも子どもを中心にすることはない。一人っ子世代も子どもを中心にする傾向があるが、選択もしている。例えば子どもが自分の自由と衝突する時、往々にして子どもを最も重要な位置に置かない。婚姻危機の場合、一人っ子は子どもや家族のために、強引に婚姻関係を維持することはしない。

しかし、子どもにお金をかけることで言えば、確かにはるかに両親を超えている。それは主に両親からの経済支援があるため、子育ての経済的圧力が小さいので、子どもにお金がかけられるのであろう。一人っ子世代の子どもを中心にすることは、両親に比べれば、片面的で、条件付きなことと言えるのであろう。

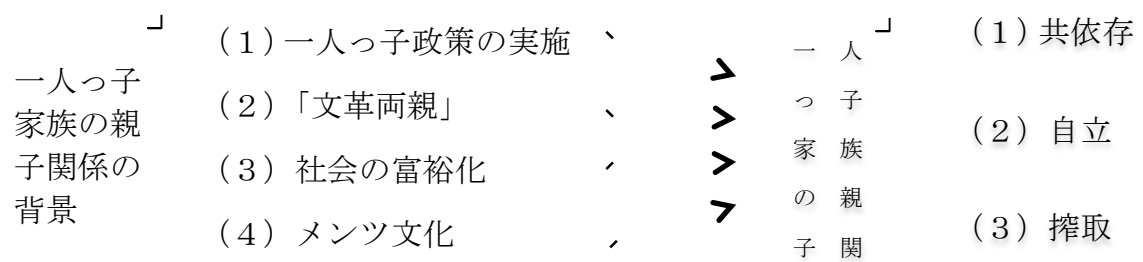


図 3-1 一人っ子家族の親子関係への影響要因

一人っ子家族の親子関係への影響要因は、図 3-1 のようにまとめられる。一人っ子家族にとって、親子関係の変動は多様な要因で決められる。そのうち、経済的な背景は根本的な要因であり、一人っ子政策などの政治的背景は最も直接的影響要因であり、文化的背景は根深い要因である。

【注】

- (1) 『中华人民共和国憲法（1954 年）』第 48 条、中国人大網（www.npc.gov.cn）。
- (2) 謝志強・王劍鏐「宏觀環境对家族關係變遷的影響觀察」『人民論壇』、2013 年第 23 号。
- (3) 石金群『独立与依頼——轉型期的中国城市家族代際關係』社会科学文献出版社、2015 年、7 ページ。
- (4) 謝志強・王劍鏐、前掲文。
- (5) 石金群、前掲書、7 ページ。
- (6) 学区（がっく）とは、ある学校に通学する児童・生徒の居住地を限定したときのその区域をいう。中国語の学区は日本語と同意である。資料により、「学区房」とは、「優れた学校の学区内に立てられている住宅を指す。ここで言う「房」とは、住宅のことを指す。不動産関係で使用される言葉で、一般的に広く用いられているが、行政文書や正規の場面には登場しない単語である。中国の保護者達は非常に教育熱心である。子どもの将来を思い、子どもを優れた教育を実施する学校へ入学させようと望む。そして中国で希望の学校（小学校）に入学が認められるための必須条件の一つが、「その学校の定められた学区内に居住している（戸籍がある）ことなのである。この条件を満たすために、保護者達は競って「学区房」を求め、自らの通勤条件や経済状況を省みず、何よりも子どもの学習環境を第一優先に住宅を購入する。結果として「学区房」の価格はどんどんつりあがっていく」加納理子「中国における教育について」、2012 年（www.pref.shizuoka.jp）。
- (7) 石金群、前掲書、7 ページ。
- (8) 国連人口基金『世界人口白書』（www.unfpa.or.jp）。
- (9) 王均・丁丁「発展中国家的な人口政策」『国外科術動態』1995 年第 4 号。
- (10) 風笑天「中国独生——涉及一億人和兩代人的命題」『中国社会科学』2009 年第 141 号。
- (11) 郝克明・汪明「中国独生子女群體分析報告」『中国教育報』2012 年 9 月 17 日。
- (12) 『中華人民共和國人口和計劃生育條例』、第 18 条。
- (13) 同上。

- (14) 若林敬子編著・筒井紀美訳『中国人口問題のいま——中国人研究者の視点から』ミネルヴァ書房、2006 年、65～69 ページ。
- (15) 同上。
- (16) 王豊「博源基金会成立五周年學術論壇」におけるスピーチ、2013 年 6 月 30 日。
- (17) 山東省省情資料庫『安徽省人口概述』、www.sdwqw.cn。
- (18) 同上。
- (19) 「四つの近代化」とは工業・農業・国防・科学技術の近代化のことである。
- (20) 山東省省情資料庫、『安徽省人口概述』、www.sdwqw.cn。
- (21) 梁中堂「試論＜公開信＞在＜一胎化＞向現行生育政策轉變過程中的作用和地位」『人口与發展』2010 年第 5 号。
- (22) 搜狐网 (www.sohu.com)。
- (23) 若林敬子・聶海松、前掲『中国人口問題のいま——中国人研究者の視点から』、127 ページ。
- (24) 同上。
- (25) 『天津日報』、2009 年 9 月 25 日。
- (26) 楊敏「独生子女政策出台始末」『解放日報』2011 年 1 月 14 日。
- (27) 若林敬子・聶海松、前掲『中国人口問題の年譜と統計——1949～2012 年』、16 ページ。
- (28) 前掲、梁中堂「試論＜公開信＞在＜一胎化＞向現行生育政策轉變過程中的作用和地位——写在中共中央致党、团员＜公開信＞發表 30 周年之際」。
- (29) 楊敏、前掲「独生子女政策出台始末」。
- (30) 同上。
- (31) 同上。
- (32) 楊敏、前掲文。
- (33) 同上。
- (34) 『陳雲文集』（第三卷）中央文献出版社、2005 年、460 ページ。
- (35) 梁中堂、前掲文。
- (36) 同上。
- (37) 同上。
- (38) 同上。

- (39) 若林敬子・聶海松、前掲『中国人口問題の年譜と統計——1949～2012』、23 ページ。
- (40) 同上。
- (41) 同上。
- (42) 「關於控制我国人口增長問題致全体共產党員共青团員的公開信」『人民日報』1980 年 9 月 26 日。
- (43) 若林敬子・聶海松、前掲『中国人口問題の年譜と統計——1949～2012』、21 ページ。
- (44) 同上。
- (45) 同上。
- (46) 若林敬子・聶海松、前掲『中国人口問題の年譜と統計——1949～2012 年』、228 ページ。
- (47) 於文「農村の子どもに伝えるバレエの魅力」『人民中国』、2013 年 10 月 11 日。
- (48) 李斌「中国人口の經濟帳」『财经国家周刊』、2011 年 10 月 8 日。
- (49) 同上。
- (50) 郝洪「承欢膝下是我们共有的福利」『人民日報』、2013 年 7 月 4 日。
- (51) 同上。
- (52) 若林敬子『中国——人口超大国のゆくえ』岩波新書、2012 年、124～125 ページ。
- (53) 「中国、一人っ子政策の緩和を発表、労働教養所の廃止も」『人民日報』2013 年 11 月 16 日。
- (54) 「文化大革命を乗り越えてきた両親」と定義された。若林敬子・聶海松『中国人口の問題の年譜と統計』お茶の水書房、2012 年、356 ページ。
- (55) 鍾家新『中国民衆の欲望のゆくえ——消費の動態と家族の変動』新曜社、1999 年、207 ページ。
- (56) 同上、207 ページ。
- (57) 陽翼、前掲『中国独生代消費行為研究』、279 ページ。
- (58) 費孝通、前掲『郷土中国——生育制度』、203 ページ。
- (59) 若林敬子『日本の人口問題と社会的現実』（第一巻）東京農工大学出版社、2009 年、44 ページ。
- (60) 葉萱『紙婚』国際文化出版社、2010 年、88 ページ。

- (61) 林光江、前掲『国家・独生子女・児童観』、9 ページ。
- (62) 若林敬子・聶海松、前掲『中国人口問題の年譜と統計——1949～2012 年』、230 ページ。
- (63) 潘鳴嘯著、歐陽因訳『失落的一代——中国的上山下乡運動 1968～1980』中国大百科全書出版社、2014 年、1 ページ。
- (64) 同上、414 ページ。
- (65) 梁曉声『我相信中国的未来』中国青年出版社、2014 年、19 ページ。
- (66) 同上、279 ページ。
- (67) 陽翼、前掲『中国独生代消費行為研究』、201 ページ。
- (68) 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学』有斐閣、2011 年、346 ページ。
- (69) 馮文猛『中国の人口移動と社会的現実』東信堂、2009 年、51 ページ。
- (70) 清水克雄『ゆらぎ社会の構図』TBS ブリタニカ、1986 年、89 ページ。
- (71) 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志、前掲書『社会学』、482 ページ。
- (72) 馮文猛、前掲書、482 ページ。
- (73) 余華『我们生活在巨大的差距里』北京十月文芸出版集团、2015 年、18 ページ。

第四章 親子関係の変化からいえるもの

本論文の主要な発見は以下の四点である。これは、親にとっての子どもの価値の転換と幸福の表現形態の多様化、儒教文化の衰退の加速、四つの偶然性の歴史的「遭遇」、である。

第1節 親にとっての子どもの価値の転換

人類はなぜ子どもを生むのか。子どもは親にとって価値があるからである。価値は本来経済学の概念であり、主体と客体の相互関係から生じると考える⁽¹⁾。子どもの価値というのは、主体である親と客体である子どもの間の「効用的関係」である⁽²⁾。親にとってのあるニーズを満たす場合、子どもは親にとって価値がある。

本論文は親の角度から、子どもの価値を分析した。子どもの価値は、ここでは子どもの価値と効用を結びつけて理解する⁽³⁾。親にとって、子どもの価値は多様であり、それらは代々血統を継ぎ、労働生産、両親の代わりに自己を実現することなど、いろいろな面に現れる。

子どもの価値は、国や文化など多様な要因に影響されるほか、歴史の変動につれて絶えずに変化していく。概して言えば、子どもが親にとってのどのような存在であることによって、大きく二つに分けられる。即ち、生産財としての価値と消費財としての価値である。

ある意味では、子どもが大人の世界に出るのは「侵犯者」となり、子どもが大人の行動や価値志向を変える可能性がある⁽⁴⁾。子どもの価値は、様々な面に影響し、例えば子どもを出産する意欲や子どもの素質など、甚だしきに至っては国家の出産率の変化にまで影響する可能性もある。当然、子どもの価値は、家族関係、特に親子関係及び老後の生活の各方面に影響を与える⁽⁵⁾。

今の子どもは、だれもが親の「最愛の存在」とされて、「神聖な児童」と呼ばれ、家

族の消費的中心であり、また精神的な支柱でもある。しかし、子どもの数が割に多かった時、家族の中心人物は父親であり、子どもは従属の地位にあった。親にとっては、子どもがコストを計算できる労働力及び介護してもらうための存在だけである。

フランス学者のアリエスによると、少なくとも中世の西欧では「子どもという概念は、まったく存在しない。幼いメンバーの誕生は、家族にとっては主に未来の労働力と親の養老保険として見なされる。約7歳頃から成人の生活世界に入って、相応の社会的責任を引き受ける」⁽⁶⁾。アリエスの調査の対象には、カルダーノという男の子がいて、5歳から父の仕事上の助手になった。「法律顧問である父は、いつも法学典籍を詰めた重い藤かごをカルダーノの背中に括って、彼を引いてミラノ町で顧客を訪問して回る」⁽⁷⁾。

フランスだけでなく、世界中の多くの農業社会において、親が子どもに対する教育などに関する投資を少なくして、早くから労働させることで生活技術を獲得、つまりはお金を稼ぐことを憶えさせて、家族を養ってもらおうと期待していた。

近代以前、子どもは、親や家族にとって実用的な価値が主要であった。この実用性は狭義の実用性であり、また血統維持や有用性とも言える。狭義の実用性とは、親は、子どもを手段にして、実際の利益、または特別な目標を達成しようとする。実用的な価値は、主に子どもが代々血統を継ぐための存在であり、家族の一般労働力として使用することでもあった。低開発社会において、子どもが親に対する実用的な価値は、より明らかである。親が子どもを作る目的は、自分の生命を維持することと、家族の子孫繁栄のためである。子どもが一定の年齢になると、家で両親を手伝うか、または工場に送られて家計を助ける。その時、子どもたちは労働を通じて、自分の「有用性」を発揮して、家族に貢献する。

また、子どもを育てるコストも非常に低かった。子どもを学校や塾に読書させるのは金持ちに限られた。一般家族の子どもは家族で、または工場で労働する。1820年、アメリカのある紡績工場での55%の労働者は児童であった⁽⁸⁾。アメリカだけでなく、20世紀以前の中国、日本などの他の国も同様の状況であった。

中国では、昔から「養子防老」（老後のために子どもを育てる）という言葉があり、

今でも依然として存在する。「老後のために子どもを育てる」ことは文字通り、子どもを老後の頼りにする意味である。老後のために子どもを育てることには、両親の利己的な一面も含まれている。「老後のために子どもを育てる」とは子どもを老後の収入源と介護手段にしている。1949 年前の中国では、5、6 歳の子どもは大人の代わりに弟や妹の世話をしたり、ご飯を作ったりした。「幼い人が生まれたことは、家族にとって、主に未来の労働力や親の養老保険と見なされている」⁽⁹⁾。

近代以前、子どもは小さい時から労働生産力としてあつかわれ、このような状況は、人類歴史上の長い時期を占めていた。子どもの実用的な価値を中心にした時代では、子どもが親子関係の中で支配される位置に置かれた。1900 年中産階級の改革者が指摘した通り、児童労働は、「親から子への搾取」⁽¹⁰⁾であり、親子関係は搾取と搾取される関係であった。

しかし近代以降、子どもの実用的な価値が段々と低くなり、子どもは生産性の世界から児童の世界に入った。その前時代では、甚だしきに至っては児童や児童期の概念もなかった。児童期が人生のある特定時期に見なされるのは、近代以降である⁽¹¹⁾。近代以来、経済の高速成長などにより、「通常のかわいい子、どんな社会階級に属していても、家族においては非生産性の世界に属し、学校に行ったり、ゲームをしたりして、家から小遣いをもらう」⁽¹²⁾。

親にとって、こどもの価値が転換する最も主要な原因は、社会の富裕化である。富裕化社会において、子どもは親にとって主に感情の託しと誇示的資産としての価値を持ち、労働力としての価値は殆ど消えた。言い換えれば、「子どもの価値は実用的存在から感情的存在に変わった」⁽¹³⁾。19 世紀のアメリカで、里子を養育する目的は、親が労働力を得るためであった。その故、年齢の大きい男の子が養育家族に大いに求められていた。しかし 1920 年になってから、養子を望む両親は、単に「青い目の赤ちゃん、やんちゃな巻き髪を持つ 2 歳の女の子」⁽¹⁴⁾が欲しいと考えはじめたのである。

近代以前と近代以降の子どもの地位の変化を比較すれば分るが、家族における実的存在としての子どもは地位が低い、感情的存在としての子どもの地位が高くなり、両

親の精神的な中心になった。今、子どもは生まれる前にすでに消費者であり、成長の全過程も消費者としての全過程である。

東側諸国も西側諸国も、「子どもの消費が伸びている」との声が頻りに出ている。2014年、アメリカ農業省の試算によると、アメリカ家族が子ども一人を大学まで育てると、養育コストは約24万ドルである⁽¹⁵⁾。2013年、中国メディアの報道によると、北京家族の子ども育成のコストは276万人民元（日本円で換算すると5,500万円に相当）まで達している⁽¹⁶⁾。

子どもの養育にかかる費用はますます高くなっているが、労働力としての価値はますます小さくなった。親を手伝うどころか、現在中国の都市部の一人っ子は、ほとんど過保護され、両親の家事を手伝う子どもは少ない。彼らは労働者としての、または他人を手伝う生活体験がなくて、ただ消費者、またはサービスされる人の立場にいる。一人っ子は、両親の経済上においても、普段の世話においても、あまり役に立たず、家族内における労働的な役割はない。

しかし、このような状況は、両親の意志に沿うものである。親として、子どもを労働に参加させるより、多くの教育を受けさせることで、より高いレベルの生活を楽しめるように望んでいる。親は子どもに強く期待し、多くのお金・時間を掛けるが、そこから喜びと満足を得ているのである。

一方、工業化と都市化の進展に伴い、子どもが親の養老を行う子どもの価値も、どんどん下がっている。その低下は、養老保険制度が発達したためである。社会保険制度の発展は、親の老後の憂いを減少した一方、子どもを「解放」して、親元を離れて他国で仕事や生活をできるようになり、親の老後を心配しなくても良いようにした。ハリス氏が言った通り、「現在、我々は老人保険と医療保険で、工業化以前のような、子どもが両親の世話をする制度をなくした。これが終わってから、親子の間の相互扶養関係の遺跡もなくなる」⁽¹⁷⁾。

19世紀前の子どもの価値と19世紀後の子どもの価値は、図4-1のようにまとめられる。

図 4-1 19 世紀前と 19 世紀後の親にとっての子どもの価値の転換

	19 世紀前の子どもの価値	19 世紀後の子どもの価値
1	労働力	精神的中心
2	血統を継ぎ	消費者
3	親の「養老保険」	誇示的「道具」

中国の一人っ子家族での親子関係は、その独自性を備えている。伝統的な中国社会や西洋の工業社会と違って、典型的な「子ども中心」であり、つまり子どもを高い位置に置いている。子どもが現代中国の家族では、最高の地位に置かれるのは中国の伝統に抵触することである。

伝統的な農業社会では、年長の男性が生産資源を握ると同時に、より多くの農業技術を身につけているので尊重された。老人になってからは、子どもに扶養されるのは当たり前なことであり、つまり「老人を重く見る」風潮があった。西洋の工業化社会では、老人としての優位が、農業社会ほど重んじられなかったので、子どもに扶養されないことも少なくなかった。そのため、老後の年金と医療保険で自分を保障するほか、子どもも解放されて、より多くの時間と空間を個人価値の向上に使える。世代間関係の弱化につれて、夫婦軸が親子軸の代わりに家族の重心になって、大人が家族の主力となる。

現在の一人っ子の親は、なぜ無条件でお金、体力と退職後の時間を子どもにつかうのか。確かに中国は、古来から「子どもを愛顧する」伝統があるが、おそらく現在の両親のように、奉獻信徒の如く、あるだけ子どもに支払うような時代は無かった。このような奉獻は、義務としてではなく自己意志、少なくとも半自己意志によることが明らかである。その原因を分析すれば、それは現代の親、特に一人っ子に関する親の価値観の変化である。親子の関係の様々な側面から、親が子どもに対する価値観の変化が見られる。

また、子どもの価値の変化も親子関係の変化を影響し、それに極めて大きく影響して

いて、甚だしきに至っては、二世代間の経済関係と居住選択及び老後の生活方式などの様々な面に影響している。しかし子どもの価値の変化は現代中国の都市家族における親子関係の変化をもたらす唯一の原因と根本的な原因ではない。その原因は主に、中国社会の急速な富裕化である。そのほか、一人っ子政策と文化の転換によって、人々が子どもに対する認識の変化も重要な原因であり、これらの突発的な要素はその変化を加速させている。子どもの生産活動への参加は、社会の貧困と遅れと緊密に繋がっていて、社会の発展の進歩に伴い、子どもの労働力としての価値は下がっていく。

第2節 幸福の表現形態の多様化

幸福への追求は全人類の共通追求であり、どの年代の人でも、幸せな生活を求めることは同様である。しかし、何が幸せか。どのようにしたら本当の幸せを得られるか。その解答は人によってそれぞれである。一人っ子の家族を調査と分析してから、一人っ子時代の中国人が、幸せを求める方式も多種多様であることが分かった。一人っ子家族内の親子関係への研究を通じて、生き生きとした中国家族を描く絵巻が目の前に現れた。この絵巻を解読すれば、一人っ子時代の中国人がこのように幸せを求めるということがはっきりと分かる。

まず、以上の考察から判明することは、現在の中国人の幸福感は物質を基礎にする「自慢」である。それは、本当の幸せではなく、他人の目から見られる幸せを追求している人が多い。エンゲルスが言ったように、「幸せを求める欲望の極めて小さな一部は観念上の権利によって満足できるが、ほとんどは物質の手段によって実現する」⁽¹⁸⁾。総じて言えば、エンゲルスが言った通り、少数人は「観念上の権利」で幸福を求めるが、過半数は物質手段で幸福を追求する。現在中国の「土豪」文化は正にその典型的な代表であり、幸福を外見化し、他の人に見せたくて、それが金銭や社会的地位によって実現する。

今の中国人にとって、幸福の追求は、もっと複雑であるかもしれない。それは子ども

も幸せかどうかを判断する重要な基準になったからである。時には、子どもがもたらす中国の親への幸福感は、エンゲルスの「物質的手段」や「観念上の権利」がもたらす幸福感を超える。この現象は、中国の一世代目の一人っ子の両親でより顕著にみられ、しかも普遍的な現象である。つまり、現在の中国では、生活水準が高く「土豪文化」が氾濫する状況では、お金や「観念上の権利」しかないので、幸せへの追求が未だ完全に実現されていないのであろう。

その二に、中国人の幸せが子どもを基礎に築かれたので、子どもは幸福感の最高の表れである。中国の一世代目の一人っ子家族、特に彼らの親にとっての幸せは、これまでと違う意味合いを持つ。それは彼らの幸福は、子どもを基礎にしているためであり、つまり金銭と社会の地位のほか、子どもとも緊密に関係するからである。

しかも、一代目の一人っ子の親にとっての幸せは、子どもから何かを得ることだけでなく、子どもに無償で財力と労力を投入することからさらに幸せを感じている。彼らがあらゆる手を尽くして、子どもに財力と労力を投入して、仕事、住宅、結婚などを手配した上、孫の世話までするので、「疲れてはいても楽しい」のである。子どもへの義務と責任に苦しいときもあり、子どものために借金する場合の無力感もあるが、子どものために少しでも多くできれば、心から満足感と幸福感がわいてくる。逆に、彼らが幸せと感じないのは、能力不足で子どもになにもできないか、またはなにかする機会がない場合である。

種々の現状から分るが、現在の中国社会では、子どもがいるかないか、または子どもが優秀であるかどうかは、親の人生を大きく左右する。子どもがいない、または親子関係が崩壊された場合においては、親の人生は欠陥と思われやすい。即ち、子どものいない場合、幸福感のどころか、親の人生は否定されることすらある。

子ども、特に男の子を持つかどうか、または子どもが優秀であるかどうか、幸福感に対して決定的な意味を持つ。本論文では、子どもが中国人の幸福の実現に対して二つの基本的な役割があると思っている。その一は誇示的記号としての役割、もう一つは家族と人生の価値の実現へ貢献する役割である。

また、中国人にとっては、子どもの幸せこそ幸せの最高状態であり、つまり幸福は「無我」というか、利他的なことである。一人っ子の両親の子育ての損得から見ると、一人っ子家族の親子間の関係性は、極めて緊密である。経済上の往来にしても感情上の交流にしても、一人っ子の家族では、ほかの形態の家族より多い。すべての親にとって、出産や子育ては得もあり損もあることである。子育てには多くの代価、たとえば時間とお金を払わないといけない。しかし「収獲」も多くて、例えば子どもが進歩を取得した時の喜びや、成人した後は両親にお金や介護を与えるような報いなどである。国や時期によって子どもを育てるタイムスパンや養育責任は違うので、親が子どもへの支払いと期待も異なる。西側諸国の親より、中国の親が子どもを育てる時間は、長くて責任も重いので、子どもへの期待も相対的に高い。

従来の研究の中、最初に経済学の理論と方法によって子どもの扶養コストと効用を研究したのは、西洋学者のライベンシュタインである。葉文振は、現代化につれて、子育てのコストも増加しつつあると思っている。世代の関係を強調する連続性の社会において、子どもは地位を維持するなどの大きな家族効用を持つ⁽¹⁹⁾。葉文振氏が研究を通じて、一人っ子であるかどうかは子どものコストや効用に影響する要素であり、それは一人っ子の養育コストが比較的高いからであると語った⁽²⁰⁾。中国学者の風笑天は一人っ子の親が子どもに効用の予想を研究した。風は、中国の一世代目の一人っ子の親による子どもへの効用期待は、主に経済や介護に関するが、子どもの性別によって違う、と言う⁽²¹⁾。

これまでの研究では、両親が子どもを育てるのは、さまざまな要素に影響される動的な過程である。そして、一人っ子の家族は特殊な家族形式として、親が子どもを育てる損得には特殊性がある。親が子どもを育てるには一定の時間、お金と精力を入れないといけないが、その代わりに親としても一定の「収益」を獲得できることは、あらゆる社会で普遍的存在の事実である。一人っ子の親が、子どもを養育することで受けられる損得から、中国の一人っ子家族で、子が親に対する価値の変化が覗ける。子どもは、家族の労働力と親の老後保障としての生産財価値が低下しつつあるが、親のメンツと精神

上の満足感をもたらす消費財価値は上昇しつつある。一人っ子の親が、子どもに払った高価な物質代価と時間コストは、子育て時に獲得する喜びと満足で補填される。

一世代目の一人っ子の親は、子どもを人生の目的と幸福の究極目標だと思っているので、退職後、人生の意義も子どもに集約される。退職後でも人生が面白いままであるが、子どものほか、人生を楽しめる有意義な事は沢山ある。ごく一部の一人っ子の親は、既に自分を生活の中心に置いているので、退職後の生活も豊かである。

しかし、現在の中国において、殆どの一世代目の一人っ子の親は、依然として子どもを退職後の最も重要な人生意義と生活中心に見なしている。このような傾向は、彼らの老後生活のレベルと社会活動への参加度に影響を与える。中国の親にとって、自分の個人生活より、子どもにあらゆる意味で援助することこそ幸福感をもたらす。子どもに大量の時間とお金が掛かったが、これは彼らの心からの願いである。

最後、一世代目の一人っ子の親が子どもを中心に幸せを求めることは、彼らの子どもの生活観念と子どもへの態度に深刻な影響を与えた。親の影響を受けて、一世代目の一人っ子も、殆どが家族や子どもを自分の中心にしている。80年代に生まれた若者には、家族がすべてと見なす人も多い。現在、一世代目の一人っ子の子育てからよく見られる現象であるが、つまり子どもが、親の社交活動のツールとする価値が新たに出てきたのである。

一世代目の一人っ子が続々と出産年齢になってから、ウィーチャット⁽²²⁾やマイクロブログで、自分の子どもの写真や子どもをきっかけにインタラクティブしたような活動がよく見られる。80年代の若者が、子どもを通して社交活動に入っているので、この社交システムに入るためには子どもを産む必要である。

彼らは自分の社交空間に子どもの生活写真、例えば子どもを連れての旅行や外食や遊びの写真などを載せる。それは一人っ子世代が、家族幸福に対する重視の表れであるほか、幸福感に対する自慢でもある。しかもこのような子どもを中心にする自慢は、甚だしきに至って生活の一部になった人もたくさんいる。これは中国の新世代若者が子どもを自慢するための新たな形式であり、ますます発達するネットメディアに頼っている。

社会というのは、見えないし触れないものである。それは、人と人の中に関係の中にあり、沢山の生命の共生システムである⁽²³⁾。あらゆる家族は、この大きな共生システムの細胞である。家族の形成は一定のニーズを満たすためなので、一定の利他性を持つと考える学者が多い。

例えば、費孝通は、家族が社会的分業を満足するために組織される社会生活の基本単位だと思っている。康嵐氏は、家族が巨大な利益を備える社会組織だと思っている。張江華は、家族がお互いに相手の幸運を成し遂げる社会単位であると言う。ファラーチの観点は割に極端であるが、家族が人をより良く支配するために建てた巣であり、彼らを法則と伝統に一層に服従させる場所であると出張している。神聖性と尊厳は実際には存在しない。また、家族も利己的な一面を持っている。例えば、劉汝蓉は、家族が自己価値の実現する中の一部だと思っている。「家族」とは何かについて、人によって理解と見方が異なる。

中国の一人っ子家族の考察を通じて、筆者は、家族が幸福を実現するための最も重要な場所であり、子どもが現代の中国人にとって個人幸福の最高表現である、と言う事を理解した。家族には、利己と利他の両面性が共存しているが、中国では調和的な家族価値観を尊ぶため、利己と利他の両方がバランス良く取れるこそ、家族の幸福を得られると思っている。

第3節 儒教文化の衰退の加速

どのような文化を持つ人間社会でも、血縁関係は人々を結ぶ最も自然なかつ重要な様式である。伝統的な中国社会において、家族の形成、家族や宗族の組合せ方とされる血縁関係が特に重視された。血縁関係の注目度は、その他の関係よりはるかに高い。杜正勝氏が言ったように、「中国人の人間関係は五倫を重んじる、すなわち君臣、親子、夫婦、兄弟、友達である。五倫に血縁関係が三倫も占める。君臣の関係は親子関係の如くで、友達兄弟関係如くで、広義に言えば全て血縁関係と言える」⁽²⁴⁾。

伝統的な中国の家族は、即ちこのような血縁関係を重視する基本的な倫理秩序によって築かれてきた。伝統的な中国の家族では、父親は一家の主であるため、親子関係に濃厚な不平等な色彩が見られる。父の地位が上で、子どもの地位が下であるので、父は子に対して絶対的な支配力を持ち、「父の命令は違反不可」。まさに梁啓超が『中国文化史』という本の中で述べたように、「古代では、子どもが親の純粋な所有物であり、子どもの独立人格が認められない。親は勝手に子どもの命を奪うのも珍しくない。一般の平等原則はその社会で適用されない。両親がいる限り、財産は全て親に属し、私財として持つことができないのが従来教育である」⁽²⁵⁾。

梁が中国伝統家族に対する描写から分かるが、伝統的な中国家族での親と子どもの地位は平等ではなく、親に比べて子どもの地位が下である。子は親の付属品で、甚だしきに至っては子どもの独立人格すら認められない。財産については、親が生きている限り、子どもが私財を持つことができない。唐時代や明時代などの時代では、親が生きているのに、子どもが分家や財産を分割することは、当時の法律によると重罪であった⁽²⁶⁾。国家の法律まで、庶民の家族財産分割のような家族内のことについて干渉と制裁することから、伝統中国社会の支配者による、家父長制への保護が覗ける。

基本的には、秦時代以後の王朝において、両親が生きているかぎり、子どもが財産を持つことは良俗をけがし、法律を犯すことと見なされた。このような体制は親子関係が自由と平等に向けて移り変わることを大いに妨げ、しかも、このような状況は中国歴史上の過半の時間に存在した。

また、中国の伝統的な家族制度は、極めて安定的だと言える。梁啓超の分析によると、中国家族の構造と組織や家族同士間の関係は、周時代から近代まで殆ど激しい変化がなかった⁽²⁷⁾。家族構造の種類としては、主に中心家族と主要家族であり、親密関係と財産共有化の中心家族の集まりが大家族になり、家族メンバー同士が封建社会の基本倫理を守った。

数千年前から、延々と引き継がれてきた中国家族は、全てこのような基本的な枠組みによるものとなる。社会の基本的な細胞として、家族の存在は安定的であった。時代の

交代や社会生産力の発展につれて、家族制度も多少異なってきたが、現在まで家族形態の変更のような激しい変化はない。家族メンバー同士も、依然五倫の秩序に従い、父は一家の主である。

中国の伝統的な多子家族では、長幼の序があり、世代の間での役割は明らかであり、両親は主に管理者の責任をもつ。子どもに対して両親の地位はかなり上である。一般的に、伝統的な家族のなかで父は家族の中心であり、彼らの中心的な地位は、経済的な地位によるものであった。

しかし、現在、数多くの一人っ子家族のなかで、両親の地位、特に父の中心地位は下がってきた。子どもは経済的能力がないにもかかわらず、家族の精神的な中心になった。一人っ子家族の中心的地位は伝統的な家族と異なり、経済的な能力で決められなかった。精神的な中心としての子どもの地位は上がり、それに対して、両親の地位は低くなった。一人っ子と親との関係には交換関係とみられる。

子どもは親から経済的な支援とほかの支援をもらえる。また、第一世代の一人っ子は、いつか親の介護をしなければならないと期待されている。一人っ子家族の親子関係は、以前の家族よりもっと緊密となったが、それは交換関係の形で現れた。康嵐は、中国都市部の世代関係の様態の変遷は、二つの特徴を持つと指摘する。一つは、家族価値の安定であること、もう一つは、子世代の個体意識が強く現れることである。この二つの特徴は、現在の中国都市部の家族の現代化の特徴を構成していると、康は論じる⁽²⁸⁾。一人っ子と彼らの親たちの親子間に、「無制限な責任」問題がみられる。「無制限な責任」というのは扶養の責任ではなく、それは親が全力で成人後の子どもを助け、それにたいして、子どもは親と近く住んでおり、親を世話することを親に要求されることである。親子間の「無制限な責任」は、子どもの自由度を減じ、制約も多くなった。これは一人っ子家族の構造上の問題である。

「家の継承を重視する直系家族制度のもとでは、父子関係が重視されるのに対して、親による子どもの養育と社会化を、親子関係の中心的な機能としている夫婦家族制のもとでは、親子関係の実体は、哺乳や身の世話をしつけにあたる母親と子どもの関係の

なかに集約的に存在する⁽²⁹⁾」。しかし、第一次産業革命以来、「世界の各地において、あらゆる社会制度が早かれ遅かれ、ある形式の夫婦式家族制度と産業化に近づき、これは人類の歴史上で破天荒のことである」⁽³⁰⁾。中国の伝統的な生産生活方式も産業革命の展開につれて、崩壊しつつあり、一人っ子家族を中心とする中国の都会家族における親子関係は変わりつつある。「家の継承を重視する直系家族制度のもとでは、父子関係が重視されるのに対して、親による子どもの養育と社会化を親子関係の中心的な機能としている夫婦家族制のもとでは、親子関係の実体は、哺乳や身の世話をしつけにあたる母親と子どもの関係のなかに集約的に存在する」⁽³¹⁾。

しかも、「長く果てしない歳月の中で、中国家族での親子関係も多く変化され、社会学者達の見方もさまざまである。しかし、中国では基本的な親子関係が<フィードバックモード>と認定されて、すなわち親が子どもを扶養する義務がある一方、成年の子どもは親を養う責任がある」⁽³²⁾。このモードでは、子どもの扶養と親の扶養が同地位となっており、フィードバックモードが安定できるのも、そのストーリーに頼っている。現在、中国の一人っ子家族で、子どもを扶養するのは時間的にも、内容的にも大幅に強化されているが、親を扶養するのは弱体化しつつある。中国家族の親子関係が「反哺モード」から「リレーモード」に転化する特徴が出ているが、それは過度期特有のモードである⁽³³⁾。

数千年以来、中国の親子関係は始終としてこのような反哺モードであったけど、現在になって、反哺モードかリレーモードかは、はっきりに言い難くなった。または、両方とも違うと言えるかもしれない。親は子どもだけでなく、孫の世話もなるべくする。これは、根本から西洋のリレー式と違って、実は反哺形式が強化された後の新たな形式である。このような形式では、親の経済圧力も養育圧力も大きくなりつつあり、子どもだけでなく、孫まで責任を持って世話をしないといけない。しかも、人間平均寿命の継続増加につれて、親が子どもや孫に費やす時間も、ますます長くなっているのも、反哺される機会もさらに減少されるかもしれない。

また、中国家族の暮らし方も徐々に変化してくる。現在、中国都市部の家族、特に都

心地域にある一人っ子の家族は、親子二世代同居ではなく、完全独立してそれぞれ生活するのでもなく、その両者の間に介在する二世代が同居するか、または近くに住むような形の中心家族がその主要な形式である。これは新しい状態に移りゆく途中の暮らし方で、従来のような数世代が同居する大家族の形とも違い、西洋社会での家族規模が最小化される完全意味上の中心家族形式とも違う。

中国一世代目の一人っ子と両親にとっては、お互いの依存性が非常に高いので、親子が同居、または近くに住むのは心理上、精神上からも求められることであり、現実生活による選択でもある。しかし、この居住様式は新しい状態に移りゆく途中の暮らし方であるため、変化しつつある。中国社会の近代化の推進や家族機能の変化につれて、世代間の依存性が徐々に低下し、親子双方は独立になりつつある。親子双方の独立につれて、親は子どもや孫を生活の中心とせずに、各自の生活、特に退職後の生活を中心にして、親子間が別居し、平日にあまり往来しない状況がますます多くなっていく。

儒教文化が衰退したもう一つの象徴は、一人っ子家族の中での姻戚関係がますます密接になり、従来の宗族関係による家族制度が衰えていく傾向が見られることである。既婚の一人っ子は、両親と高い依存関係があるほか、夫婦の両親同士、つまり姻戚同士の間の往来が密接であるため、姻戚間の親密度と依存度も大幅に上がった。

筆者が調査を通して、一人っ子の結合によって成立された姻戚同士が従来の伝統家族や現代の一人っ子ではない家族より緊密に連絡していることを感じた。中国の歴史及び年長者の口述から分かるが、伝統の中国社会から新中国成立後の長い間、一般的には、中国社会の姻戚間の往来が多くなかった。娘は結婚後に夫の家族に「帰属」し、その家族の一員になり、一年間の重要な祝日のみ実家に帰省できたのである。養老や祭りなどは息子の責任で、既婚の娘は親の養老に責任を負わない。

現在でも、山東省の一部の農村で、親が亡くなっても、既婚の娘が両親の墓参りをしない習俗がある。姻戚間の往来も、殆ど礼儀的なもので、連絡の機会が少ない。生活においては、姻戚間が手伝いし合うことや、協力し合って子どものために孫の世話をすることも少なく、従来の社会意識によって、孫の面倒を見るのは男性の両親、特に母親

の責任であり、女性の母親ならその義務がない。そして 2000 年頃から、情況が少し変わった。しかし、当時の家族として主流の形態は多子家族なので、姻戚が連携して、ある子の子どもの世話をするのは、それほど見られなかった。何か困難に遭っても、支援を求める対象は主に両親や兄弟姉妹などで、姻戚に求めるのはあまり見られない。

2000 年以降、一人っ子家族が主流の形態になり、姻戚間の連絡も以前と大分違って、緊密になった。そして、その緊密関係はさらに強くなる傾向がある。現在では、両方の親が孫の世話をするが、それは姻戚関係が密接になる一番の原因である。しかし調査によつては、お互いにお金を借りたり、病気時にお互いに面倒を見たりする状況も少なくない。一人っ子の時代では、姻戚間の往来とその役割が多くなりつつあるので、ひいては兄弟姉妹関係を超える傾向も見られる。一人っ子夫婦は自分の家、つまり独立の生活空間を持つので、既婚女性が相手の家族に属さなくなる。既婚の一人っ子が、男女を問わず、結婚後に相手の家族に「入る」ことはない。しかし、既婚の一人っ子と両親との緊密な依存関係により、姻戚関係も密接になった。親が協力して孫の世話をするなどにより、子どもをめぐる結びつきになる。夫婦とも一人っ子の場合、このような状況がもっと目立つ。一人っ子が結婚してから、その新家族が両方の親と緊密に繋がるだけでなく、両方の姻戚間の関係も密接になる。

また、伝統的な家族文化の崩壊においては、指摘しておきたい重要なことは、観念上の変化である。従来 of 農業社会家族では、親が子どもを育てる最も主要な動機は子どもがイコール労働力だという観念である。その故、中国の伝統観念では「子どもが多いほど福が多い」と言われる。子ども（男性子孫）がいらない、または数が非常に少ないのは、家族の生産力の低下または家運が落ちたことを意味する。1949 年後もずっと「人が多ければ力が大きい」と人々に信じられた。

当時、親が子どもを育てるための時間は短くて、投資も少なく、しかも割に早く報われた。そのため、子どもの教育水準が普遍的に低くて、十代頃から一般労働に参加し、労働点数で自分を養い、甚だしきに至っては家計を補った。そして、子どもは親の老後の保障でもある。だから昔の中国家族では、子の数はつまり財産の象徴であり、親が子

どもの力で家族の生産を拡大したのである。

しかし現在の中国家族、特に一人っ子の家族においては、子どもは家族労働力としての役割を非常に小さくしている。親が子育てに掛かる時間が長くなり、かけるお金も以前より大幅に増えた。一人っ子達は幼い頃から良好な物質条件を享受し、より多くの教育を受けている。甚だしきに至っては結婚しても、両親に時間とお金を払わせる。しかし、期待される報いは非常に限られる。両親がお金や介護が必要となったとき、子どもからの支援をもらえる例は極めて少ない。

筆者の聴き取り調査をみると両親が一人っ子を扶養してから獲得できるのは、殆ど心理と精神上的の報いである。子育てに払ったコストは多いが、子どもからの楽しみも獲得でき、自己成長もできる。親は、なるべく子どもに豊かな生活と学習条件を提供し、子どもが傑出な人になれるように望む。またなるべく子どもがマンションを買うためのローンに苦労しないように、マンションを買って与える。彼らの願いは、ただ子どもが学業、事業で一定の成績を獲得し、早く結婚して子どもを作って家族に貢献することだけである。このような「利益」は無形的なものであるが、彼らの人生にとってとても貴重なものである。一人っ子政策は、中国の伝統的な介護方法に大きな衝撃を与えた。

一人っ子家族の中で、以前のような子どもが介護する観念は弱くなった。現実的に、第一世代の一人っ子の親は、子どもに介護してもらう可能性が低くなった。新しい多元的な介護方法が必要である。時には子どもに与えられる心理上の喜びと満足感、実物の報いよりも貴重である。家族の中心が子どもへ移動したことは、必ず一人っ子の成長に大きい影響を与え、新しい問題を引き起こす。これらの問題をさらに研究する価値がある。

だが、工業化が儒教文化の衰退を加速している一方で、儒教伝統文化は、引き続き家族生活に大きな役割を果たしていることも無視できない。現在の中国で、両親が子どもの婚約に干渉する現象は、依然として散見されているが、それはやはり「家柄がつり合う」という伝統思想の影響である。家族背景が、子どもの階層上昇に大きな役割を果たしていることも一つの要因として考えられている。

そのため、一人っ子の親たちは、子どもの幸せを確保するために、相手の人柄や学識、経験、潜在力などの要素より、相手の現有条件をもっとも重視して、子どもの婚約を配慮する。もし多くの選択肢があれば、一人っ子の婚約を配慮している親たちは、穏当な対象を選択するのが殆どである。発展の潜在力など一時的に見えない要因は、親たちの評価基準にはなれない。このような干渉は、婚姻安定の不確定要素として、一人っ子の結婚生活に「時限爆弾」を埋めたように、一定の危機をもたらす可能性がある。

一人っ子の婚姻に、特に夫婦双方も一人っ子である場合、離婚率が一人っ子でない場合より高い。しかし、一人っ子の家族の離婚比率が上昇する要因は、一人っ子の身分だけではない。親たちが婚姻や配偶者の選択に対する干渉こそ、その重要な原因の一つである。両親の干渉に対し、一人っ子達がしようがないと考える一方、ある程度の抵抗もしている。しかも、一人っ子の婚姻に対する自主選択の傾向が強まっている。

家族は社会の最小単位であり、親子の関係は家族の基本的な関係である。親子関係の良し悪しは、直接家族の生産性や生活の質、個人の気分と生活状態に影響を与える。留学した一人っ子が、学費のために母親を殺した凶悪事件もあったが、全体から見れば、そんな極端的な事件はやはり例外である。現在の親子関係は、おおむね歴史的家族制度に影響されている。中国は昔から「家国関連」(家族と祖国は関わっている)の社会で、長幼の順序で築いた社会基本順序は、現代社会に依然として普遍的な存在であり、且つ一定の合理性がある。また、一人っ子は、親の一生の苦勞に対して感謝する。この感謝が、どれほど彼らの子育ての実践に実行され、また「養育－扶養」という中国の伝統的なフィードバックモードに反映させるか。

第一世代の一人っ子の家族から見れば、親の老後危機を早めに招く可能性が高い。中国の親たちが子どもを重視しすぎるため、老後の蓄えを使い尽くして、老後の生活に支障が出ることもある。また、子どもの家族地位の上昇と価値の向上、子どもに対する親の価値の変化に伴い、既存の親子関係にも変化がもたらされた。親が絶え間なく投入すれば、「資源の提供者」として子どもに認識されることになる。一旦、親が老齢期に入って、十分なお金や時間、体力などの「資源」を提供し続けない場合、孝道が衰退しつ

つある現在では、親が子どもにとっての価値がまだあるのか。これは今後どれほど新たに問題を起こすのか。これらの問題は何れも真剣に考慮すべきである。

工業化は、伝統的な中国文化の崩壊を加速していた。李銀河が指摘している通り、西洋では農業社会から工業化の現代社会に転換する中で、親子の関係も反哺モードからリレーモードに変わった。中国においても、工業化と都市化が進めていくとともに、こういう転換も現れるはずである⁽³⁴⁾。家族が工業化の影響を受け、工業化と付き合いながら、工業化にいくつかの抵抗ももたらしている。一人っ子の家族を近代化に適応させるため、必要なデバッグを行うべきである。

第 4 節 四つの偶然性の歴史的「遭遇」

上述したように、中国の第一代の一人っ子が誕生した背景は、過渡的、一時的、且つ突然的なものである。以下の図 4-2 が示しているように、一人っ子家族の親子関係は必然的に形成したのではなく、四つの歴史の偶然性から形成した一時的な産物である。

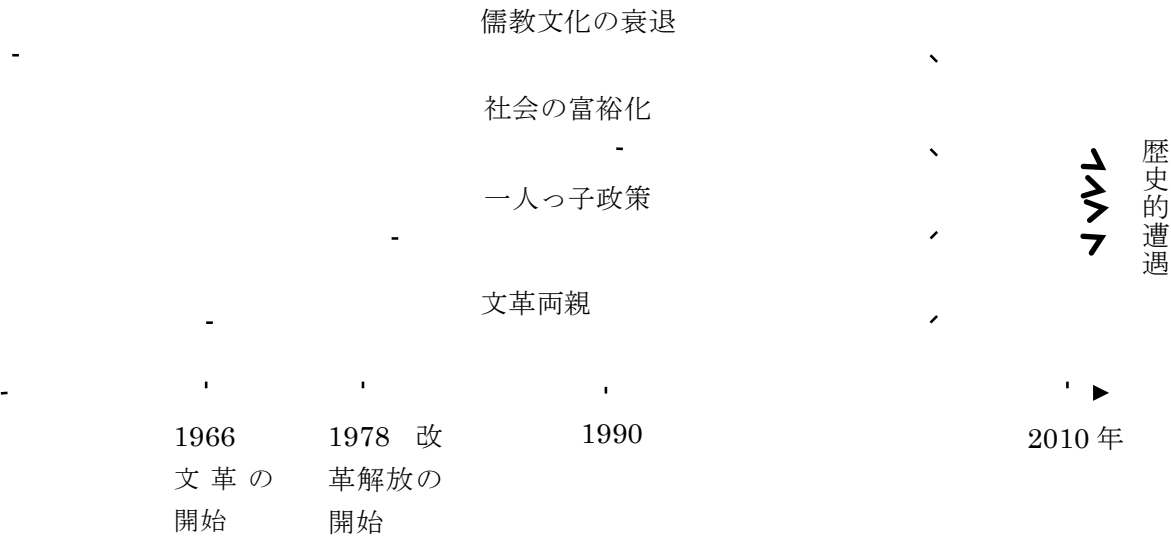


図 4-2 四つの偶然性の歴史的「遭遇」

1 突然に実施される一人っ子政策

20 世紀、70 年代末の中国では、「夫婦ごとに子ども一人だけ生む」という一人っ子の政策が実施された。一人っ子政策の実施は、改革開放政策に引き続くもう一つの重大な歴史事件である。一人っ子政策は、多方面から中国にきわめて深い影響を与え、そのうち家族への影響は革命的であった。中国では、都市家族の規模が伝統の「五人家族」から「三人家族」に縮小しつつあり、家族関係も変わっていった。兄弟関係がなくなり、親子関係が家族関係の中でもっと重要な役割を果たしていた。

一般家族の親子関係と同様に、一人っ子の家族の親子関係も変化する過程であり、その内容や形態がずっと変動し続けている。現在、中国の第 1 世代の一人っ子の多くはもう結婚していて、子どもも出来ているが、元々一つの核家族の関係は、二つの核家族の関係に変わっていた。一人っ子と両親との関係にも、いくつかの新しい形を呈してる。このような激しく急速な変化は、一人っ子家族の親子関係の研究に新たな内容や視点を提供している。

一人っ子政策の形成と発展は、1950～1960 年代における人口政策に対する探究の結果であるといえる。1949 年に社会主義中国が建国したことで、社会秩序が長年にわたる戦乱の不安状態から徐々に回復し、人々も安穩に暮らすことができるようになった。したがって、1949 年から人口増加率が高くなった。しかし、高い人口増加率は低い経済水準に大きな圧力を与えた。

その背景のもとで、中国の人口政策は、人口抑制の実践からしだいに生まれてきた。出産の奨励——産児制限——出産抑制という紆余曲折な過程を経たのである。⁽³⁵⁾毛沢東の人口問題についての認識と実践は一定の限界があり、中国の人口政策に直接的な影響を与えた。要するに、「寧批一人、不増三億」（一人を誤って批判したがために、三億人の人口を増やしてしまった）は 1950-1960 年代における中国人口政策とその結果の要約的な表現である⁽³⁶⁾。

1950 年、邵力子は最初に産児制限を主張した。邵力子は、中国は生産力がかなり遅

れ、国力がまだ強くない社会であると出張した。今後さらに発展する必要があるため、人口が急激に増加すれば、人口と経済の発展は矛盾となる⁽³⁷⁾。50年代の半ば、中国の有名な人口学者馬寅初は『新人口論』を提出し、さらに産児制限を強調した。『新人口論』の要旨としては、中国の人口政策は人口の数を抑制することだけではなく、人口の資質を高めなければならないことであった⁽³⁸⁾。馬寅初の主張は中央指導者の支持を得て、周恩来、陳雲などは『新人口論』の提出に対して高く評価した⁽³⁹⁾。

しかし、50年代末に行った「大躍進」運動などの政治的な原因によって、全国的に馬寅初と『新人口論』に対する批判がでてきた。その間違った批判は、当時制定された正しい人口政策を妨げたが、「50年代から産児制限・人口抑制を実行する傾向を変えなかった。毛沢東も完全に人口抑制政策をやめなかった⁽⁴⁰⁾」。「文化大革命」の間、特に一九七三年以降、中国は「計画的に人口を増加する」ことに基づき、「晩・稀・少」という人口政策を形成した。「文化大革命」がおわった70年代末、中国の計画出産政策がほぼ形成した⁽⁴¹⁾。それは一人っ子政策が実施された背景の一つになった。

人口政策の策定と実施について、必要性和可能性の両方面から考察しなければならない。一人っ子政策も例外ではない。国家にとって人口の重要な価値の二つ、は兵士としての価値と労働力としての価値である。例えば、50年代に中国が建国した際、生産回復の必要がかなり大きいため、多くの労働力が必要であった。そのほか、朝鮮戦争における多くの兵士が犠牲になったため、軍隊は新しい兵士を募集しなければならなかった。したがって、50年代には人口抑制政策を実施する可能性がなく、必要もなかった。50年代において、政府はより多くの人口を必要とし、「人多力量大」（人口は多ければ多いほど力が強い）という思想が主流であった。

70年代になると、中国の経済力や国防力など総合力は上昇し、ミサイルと核兵器も作られた、建国してから20年以上を経て、政権はすでに安定した。建国初期における対外戦争のリスクも減少したため、大規模の兵士募集の必要もなかった。

70年代に入り、多くの新たな問題が、集中して出てきた。特に1978年前後、改革開放がまだ開始したばかりで、当時の都市における国有企業は生産効率が上がらなかった

ため、労働者の数が相対的に過剰し、多くの潜在的な失業者が存した。都市において労働力の過剰現象が著しくなっており、農村における労働力も過剰だったが、都市に移動できなかった。

1978 年前後、経済や人口や社会など多くの問題は、同時に集中してきた。多くの潜在的な失業者が存在していたが、計画経済体制のため、新たなポストがつくられなかった。過剰労働力を減少する必要性もあった。過剰人口を減少するため、人口抑制の必要性も高くなった。

中国の歴史における賢明な君主は、一貫して「広土衆民」（広い土地と多くの臣民）と主張した。官僚も臣民は多くの子どもを産めと奨励した。平民は、みんな例外のなく「多産」であった。中国では、「多子多福」（男の子どもが多ければ多くほど福も多い）、「不孝有三、无后为大」（不孝に三つあり、後継ぎがないのが最大の不孝である）、「養儿防老」（年老いたら男の子に扶養してもらおう）という伝統的観念が根深かった。1949 年建国以前、人口問題に関する専門的な研究が少なかった。人口センサスがなかったため、中国人口の正確な数はわからなかった。毎年の人口増加率と人口死亡率もわからなかった⁽⁴²⁾。

1949 年建国してから、中国政府は人口問題を重視するようになった。1953 年、中国歴史における初めての人口センサスが全国で行われた。センサスの結果によって、1953 年 6 月、中国人口は 6 億を超え、毎年 1200～1300 万人が増加していることが判明した。センサスの結果は人口政策の根拠となり、それ以前より合理的になった。

一人っ子政策に対してのセンサスと人口予測は、非常に重要な役をはたしたが、中国共産党の執行力も必要であった。「公開書簡」の発表した過程からみてもわかる。それらは、「公開書簡」の一人っ子政策の形成過程における里程標であった。1980 年において「公開書簡」が発表され、あの時期の中国は現在の中国と比較してみれば、国防力や人々の観念など、どちらの側面から比較しても、大きな格差がみられる。

1980 年前後、改革解放がまた開始したばかりため、人々の思想は非常に固定的かつ保守的だった。出産活動に対する考え方は出産が自然行為であり、人々の計画出産に対

する意識と覚悟は、ほとんどなかった。さらに、「多子多福」という伝統的な出産に関する観念が、すでに千年以上存在していたため、多くの子ども、特に男児を産むことは、人々のあたりまえの考え方となった。当時の多数の中国人にとって、一人しか産んでいけないと規定することは、たいそう厳しい現実であった。

その歴史的な背景のもとで、中国共産党中央政府は「公開書簡」において、中国の人口問題を深く分析し、全国の人民を動員した。人民は国家の置かれた状況の難しさを理解し、自分の行動で国家の経済建設に貢献すると希望した。『公開書簡』の公表は、全党と全社会が人口問題を重視すること、また全国の人民は自覚的に計画出産することに対する重要な役をはたした。「公開書簡」の提出前後、多くの中央指導者はさまざまな場合において「夫婦一組において子ども一人」をよく宣伝した。

そのほか、「公開書簡」は規定の形ではなく手紙の形で公表し、全国人民に対して現状の難しさを説明し、また問題と対策を挙げた。その結果、人々の老後扶養などの問題に対する心配を減少し、順調に一人っ子政策をうけ入れたのである。

もちろん、一人っ子政策の形成過程に、短期間における民間からの激しい反対に遭った。強制妊娠中絶事件もあったが、全体にみると、一人っ子政策の実施は、予想より順調であった。言い換えれば、有力な中国共産党の推進がなければ、一人っ子政策という世界人口史に前例のない政策は、絶対に実施されることができなかった。

少子化は、親の子育ての損得感情を変化させた要因である。子どもの数は、子どもの家族における地位と密接につながっている。近い昔、中国の家族で子どもの数が多かった。家族内で父親が中心地位を占め、子どもが従属的であった。変わって、今の子どもが親にとって「心頭の肉」のような存在になり、特に中国の一人っ子の家族では、子どもは世帯の消費中心だけではなく、家族の精神中心でもある。家族中心の一人っ子は、親の経済資源と時間の使用方向を決めている。一般的に、家族収入と時間が豊かではない場合、親は子どもの数と能力によって収入や時間を配分している⁽⁴³⁾。

もし子どもが1人以上である場合、すべての子どもに新居や自動車、子育てなど一切の世話を負担するには、一般の両親にとって財力から見ても精力から見ても不可能にな

る。だが、一人っ子の家族ではこのすべてが可能になり、しかもこのような現象は、とても普遍的な事実でもある。一人っ子の家族では、子どもが1人しかいないことから、子どもの数と能力は既定的であるため、親は子どもの数と能力によって所得と時間を配分しなくてもよい。一人っ子の親は、自分のすべての資源を最大限に子どもに提供してもよい。

そして、中国で一人っ子の家族は人々の自然選択ではなく、一人っ子政策によってもたらされた、突然で強制的な変化の結果である。だから、両親は一人っ子の子どもに対して利害得失のような複雑な感情を持っている。このような心理要素に駆り立てられて、親は代価にこだわらず、何の恩返しも図らず、一人っ子の子どもに時間、財力を投入することになる。

2 急速な豊かな社会の到来

過去の20年において、中国の経済増加の速さが世界一であるのは中国人自身も想像しなかったことである⁽⁴⁴⁾。急速な経済発展は、深く中国の家族関係を変化させてきた。親世代の豊かによる親子関係の変化は、明らかに現れた。家族によって資産の格差がよくみられる。子どもによい生活条件を提供できる親たちは、子どもに崇拜される。これに対して、子どもに新婚用住宅も購入できない親たちは、無能者であると思われる。また、親の社会的地位が高い一人っ子は、成功しやすい。一人っ子にとって、親の力を借りずに、どのような仕事をして親よりもっと多い財産をもらえるかが現代の課題である。

しかし、中国の経済成長は、貧乏人と金持ちと両方とも急激に増えた「分裂の社会」をもたらした。富裕化の到来は非常に速く、それは中国人の間に、巨大な格差をもたらした。現在、中国社会には大きな格差が存在しているが、全体から見れば、その格差が歴史のギャップと現実のギャップという二つの次元に分けられる。「歴史のギャップ」では中国人がヨーロッパの四百年の激動をわずか40年の短時間で経験し、また「現実のギャップ」では、同時代の中国人が違った時代に分裂された。経済的格差により、同

時代の中国人であっても、今のヨーロッパに生活しているような人もいるし、四百年前のヨーロッパに生活しているような人もいる」⁽⁴⁵⁾。

中国では、社会の急速な発展が急速な富裕化ももたらした。人々は豊かな成果を楽しみながら、富裕化によるたくさんの問題にも直面している。たとえばお金持ちで教養がない「土豪」現象や、そして散見されている「財力を見せびらかす」行為などである。先日、ある人が社交ネットで、自分のペットの犬「夕食」とその製造方法を発表したという面白いニュースを読んだ。その夕食は、東北のコーンや山東省の小麦粉、江蘇省のニンジン、日本の赤ちゃん専用塩、イタリアのオリーブオイルで作られていると言う。ペットでさえこの程度であるが、まして子どもであれば、尚更である。

また、以上の分析から見れば、中国では家族が社会全体の所属階層によって、育児の観念と子どもに対する親の価値観なども、明らかに違っている。全体としては、現在、中国社会の富裕層、いわゆる上層がもっとも子どもの能力や視野の育成に重視している。例えば、子どもを連れて海外旅行や遠足をするなどである。その一方で弱者層は、それより子どもの成績や趣味、特長の育成などを重視し、育成の内容も外国語やダンスなど具体的なカリキュラムを偏重している。

その原因については、各階層間の経済力や社会地位などの相違と、緊密に繋がっていると思われる。それに、その相違性は、実際に中国社会の各階層分化の表現でもある。これもアブラハム・マズローの欲求段階説に合わせ、つまり人はレベルが高いほど欲求がますます抽象的になり、逆には低いと具体的になりやすい。

中国の親たちは、急速な発展を遂げる社会のなかでみずからの享受を放棄した。日進月歩の発展に伴い、両親は子どもの日常生活を世話するしかなくなってきた。たとえば、一日の三食が子どもの成績と将来性に繋がっているため、ご飯を作ったりする。全社会の急速な発展と転換がこうした変化の原因として見られているが、その一方、子どもの価値の転換で、親たちが享受を放棄し、人生の重心は子どもに移った。両親は喜んで自分の時間を無条件に子どもに捧げ、子どもが進歩して「出世」できれば、何を犠牲してもかまわない、と思っていた。

見田宗介氏は、今の日本人の感じている歴史を三つの段階に分けている。高度成長期は“理想”の時代で、「夢」の時代で、または「架空」の時代でもあると、彼は主張している⁽⁴⁶⁾。現代に生活している日本人が感じている歴史の変化は、経済発展の段階と密接に繋がり、経済発展に決められるものである。異なる時代の人、生活に対する感覚や心理状態が違っているように、異なる国と歴史段階に生活している人々は、歴史に対する感覚も違うに決まっている。社会の発展が共通の規則に従っているように、同じ発展段階の人々にとって、時代に対する感覚と心理状態は、たくさんの相似性と共通点があるはずである。高度経済成長期の中国は、何十年前の経済高度成長期の日本社会と類似する特徴が多く現れているのである。

今の中国も“夢”の時代である。この時代には時代なりの特徴があり、親子関係は生き生きとして面白く、親子関係の内容はまさにこの時代を反映している。この時期の一人っ子の家族では、両親と子ども両方とも比較的に高く依存または期待し合っている。双方とも甚だしきに至っては、親子関係に多少実際に合わないほど高く期待している。この期待は現実生活に必要ではあるが、経済の発展と家族の変化の推進につれてだんだん変わって行く。しかし夢の時代には、両親が子どもに対する高い期待こそ夢の一部となっている。

3 これまでになかった「文革両親」

全体的に、一人っ子の親たちは厳しい環境で生まれて、育てられた。第一代の一人っ子親はほぼ1950～1960年代に生まれた。1959～1961年は三年困難時期と呼ばれ、全国的に食料が不足となった。1967年から文化大革命が始まり、学生は教育を受けられなかった。T・X氏の父はつぎのように言った。「記憶の中の子ども時代は、すごく大変だった。あの時、国家は貧乏で、みんな貧しかった。記憶の中の子ども時代は、飢えと寒さに尽きる。僕は5人の家族で、兄弟二人がいた。僕の小さい頃、家は貧しかったので、ほしいものがあっても、親からもらえず、泣いても無理だった。一生忘れない」。

T・X氏の父が言ったように、「文化大革命の影響は間違いなくあると思います。その影響で、僕は長い間田舎に住んでいた。僕はね、大学に入る前、ずっと畑仕事をやっていました。鶏の世話も田植えもやらなければならなかったです。でね、そういうことは、僕の一生をかけてやるものじゃないと思うようになりました。その生活圏から出たかったんです。力仕事をやることもなかったです」。「僕のような1950年代に生まれた一世代は、幸せではない一代だ。身体の成長期には三年の自然災害に遭い、教育を受ける時期には、10年の＜文化大革命＞に遭い、子どもを産む時期は一人っ子政策が実施され、子どもは一人しか産まないと規定された。その他、仕事をうまくしているはずだったのに、国有企業改革がされ、多く的人是レイオフになった。僕たちの人生にいろいろ困難に遭い、それは個人的な原因ではなく、社会転換期のためだった」。

作家張承志がかつて「私たちがどのように驚かされる傷付きがあっても、如何に生活のペースと秩序が乱されても、どのように未だに青春を感嘆せざるを得なくても、私たちがとりわけ恵まれた世代で、幸せな人であることは私が依然として思っている⁽⁴⁷⁾」と書いた。

4 社会主義から資本主義への急激な移行

中国における親子関係の現状は、史上初なこともあり、各種の偶然の衝突で中国の一人っ子家族の親子関係は、様々な様相を呈している。その中には温情の一面も、冷酷無情な一面も見られる。もっと重要なのは、一人っ子家族の共通性や、各家族が現実生活の相違で現れる独自の個性も見られる。

すべての人は、その核になる生活圏がある。社会生活が豊かである現在では、核になる生活圏の人ごとに分配される時間や資源、感情、品質などが異なっているため、人間関係も違っている。人の核生活圏に付いている各種類の関係を一種のエネルギーとしたら、この関係に配置する時間や感情などの「資源」が多いほど、この関係のエネルギーが高くなり、このリンクも強くなる。そして、中国では子どもの価値が変わったため、

子どもに配分される時間や感情などが以前より大幅に増加し、その一方で両親や友人、同僚、近所に配分される量は減少した。

マズローの欲求段階理論で分析すれば、現在に至っても、欲求の段階も階層間の変化のメカニズムも変わっていない、変わったのは人間の欲望である。欲求とは実現できる思いで、欲望とは求めない思いである。もとの社会では発展速度が遅く、社会が安定したので、人々は比較的満足しやすかった。今の社会では発展速度が速く、求められないものが多いので、欲望が膨張している。

人の欲望は容易に満足できないものである。社会全体の資源は限定されて、人は、自身の能力や努力、チャンスによって欲求の満足度を決める。本質的には、人が変わっていないくても、社会発展速度に慣れない可能性もある。一定の価値観や生活状態を見出すのは、人が幸せを見つけるひとつのポイントである。人は相変わらず食、色、性などの欲望と欲求を追及している。中国が、もともとの单元化社会から今の多元化社会に変わっていくとともに、人の欲求も複雑になってきた。

「人間は欲望的存在である。欲望は人間につきものである。生を営むということにはく欲望の生起—欲望の解消—新たな欲望の生起—新たな欲望の解消>という過程がある」⁽⁴⁸⁾。社会主義は人間の欲望に影響を与える⁽⁴⁹⁾。「かつての社会主義社会においては、禁欲的人間を理想的人間として宣伝する、あるいは演技することが普通であったが、完全に実行することは難しかった。人間は個のため（自分のために生きる）と公のため（他者のために生きる）という二つの欲望を同時に抱いている。社会主義のもとで、個人の欲望を犠牲にして、他者・公・国家のために生きよと宣伝され、共産党・国家への貢献は、強制されつつ自発という形式でおこなわれた。1949-1978年の改革解放の実施まで、民衆の欲望は抑制された。改革開放以降、抑制された民衆の欲望は短時間に爆発し、社会主義の改革は民衆の個人としての欲望を一定程度に満足させる方向で行われている。しかし、1970年代後半以降、人口抑制政策の本格的な実施によって、中国民衆の『多くの子ども、特に男児が欲しい』という欲望は制限されてきた」⁽⁵⁰⁾。

「家族関係、家族構成の変化は、家族生活の各方面に深刻な影響をあたえると同時に、

敏感に社会の変遷と時代の特徴を反映している。未来の中国では社会経済の発展レベル、政策の規定とガイド及び人々がどの程度に伝統を継承し、近代化を認めるなどの要因から家族関係の行方を決まっている。その中で、政策は最も家族関係に影響をあたえる要素である。したがって、社会経済が持続的に発展し、伝統と現代観念が引き続き駆け引きをしている背景では、政策の影響力と誘導性はいっそう際立っている。現在、最も切実なのは計画出産政策を真剣で全面的に評価する上で、迅速的で合理的な調整を出すものである」⁽⁵¹⁾。

一人っ子時代において、中国人の愛情の表現方式は複雑である。一人っ子家族の親子関係には、三種類の社会形態の愛情の表現方式を混合している。例えば、封建社会では主に子どもに対する厳しさで、社会主義社会では子どもの成長で、資本主義では主に子どもに対する寵愛である。現在のところ、中国家族の親子関係は、社会主義と資本主義と封建主義を含むこの三つの要素を混ぜ込んでいる。全体としては、資本主義の要素が多数占めているが、社会主義の要素も少なくない。封建主義の要素は衰退していくが、まだある程度残っている。現在、中国の一人っ子家族の親子関係は、社会主義と資本主義と封建主義の家族親子関係の混合形である。

今の中国では、第一世代の一人っ子家族の一部の現状は、一時的であり過渡的なものである。社会の発展と改革や人の価値観の転換に伴い、子どもに対する中国両親の時間と金銭の使い方はもっと理性的になり、現存の問題も解決されるはずである。これらの問題は、一人っ子家族の構造上での問題である。現在現れた家族関係は、以前からの家族構造の変動の結果もある。将来、中国の家族に大きな影響を及ぼすため、これからも一人っ子家族の親子関係の新しい形態に注目することは必要である。同時に、これらの現象は特定時期の一時的な存在であり、永久に存在する筈がないことも、認識すべきである。

【注】

- (1) 本田和子『変貌する子ども世界——子どもパワーの光と影』中公新書、2001 年。
- (2) 王俊祥「孩子的価値及对孩子数量、素質和性別的選択」『中国人口科学』1990 年、第 2 号。
- (3) 葉文振『孩子需求論——中国孩子的成本和効用』復旦大学出版社、1998 年、148～150 ページ。
- (4) 日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善出版、2010 年、309～310 ページ。
- (5) 日本放送協会放送世論調査所編『日本の子どもたち——生活と意識』日本放送出版協会、1980 年、30 ページ。柏木恵子『子どもという価値——少子化時代の女性の心理』中公新書、2001 年、99 ページ。
- (6) 馬春華・李銀河・唐灿・王震宇・石金群『転型期中国城市家族変遷——基於五城市的調査』社会科学文献出版社、2013 年、67 ページ。
- (7) 西閃「一個孩子価値幾何」『大家』2014 年 9 月 24 日。
- (8) 维维安娜・泽利泽、王水雄訳『給無価的孩子定價——変遷中的兒童社会価値』格致出版社、2008 年、7 ページ。『新週刊』『我的故郷在八十年代』中信出版社、2014 年。
- (9) 西閃、前掲文。
- (10) 维维安娜・泽利泽、前掲書、54 ページ。
- (11) 石川実『現代家族の社会学』有斐閣、1999 年、97～98 ページ。
- (12) 同上。
- (13) 维维安娜・泽利泽、前掲書、3 ページ。
- (14) 見田宗介『まなざしの地獄-尽きなく生きることの社会学』河出書房新社、2011 年、35 ページ。
- (15) 西閃、前掲文。
- (16) 同上。
- (17) 山際寿一『家族の起源——父性の登場』東京大学出版会、1994 年。
- (18) 馬克思・恩格斯『馬克斯恩格斯全集』（第四卷）人民出版社、1995 年、239 ペー

ジ。

- (19) 葉文振、前掲『孩子需求論——中国孩子的成本和効用』、148～150 ページ。
- (20) 葉文振、前掲『孩子需求論——中国孩子的成本和効用』、195～201 ページ。
- (21) 風笑天『中国独生子女問題研究』経済科学出版社、2013 年、112～123 ページ。
- (22) 日本の line と類似する社交アプリである。
- (23) 見田宗介『社会学入門——人間と社会の未来』岩波新書、2015 年、2～3 ページ。
- (24) 杜正勝『中国式家族与社会』黄山書社、2011 年、9 ページ。
- (25) 梁启超『中国文化史』商務印書館、2012 年、8～9 ページ。
- (26) 杜正勝、前掲書、27 ページ。
- (27) 梁启超、前掲書、31～45 ページ。
- (28) 康嵐『反馈模式的変遷——転型期城市親子関係研究』上海社会科学院出版社、2012 年、201 ページ。
- (29) 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂、1987 年、111 ページ。
- (30) 威廉・古德著、魏章玲訳『家族社会学』桂冠図書公司、1988 年、248 ページ。
- (31) 見田宗介・栗原彬・田中義久、前掲書、111 ページ。
- (32) 高健生・劉寧「論我国家族親子関係演變和趨勢」『東岳論壇』1987 年第 5 号。
- (33) 同上。
- (34) 李銀河『生育与村落文化』内蒙古大学出版社、2009 年、207 ページ。
- (35) 王広州・胡耀玲「我国生育政策的歴史沿革及發展方向」『中国党政幹部論壇』2012 年第 11 号。
- (36) 黄宏「50 年代以来我国解决人口问题得失的再评价——兼评一种流行的人口問題歴史観」『中共党史研究』2001 年第 2 期。
- (37) 若林敬子・聶海松、前掲『中国人口問題の年譜と統計——1949～2012 年』、209 ページ。
- (38) 馬寅初『新人口論』新華出版社、2014 年、196 ページ。
- (39) 馬天寅『陳云与馬寅初』華文出版社、2012 年、38～117 ページ。
- (40) 同上。
- (41) 陳文联・蔣太葵「＜文化大革命期間＞中国人口政策演變探討」『中南大学学報社会科学版』2001 年第 1 号。
- (42) 葉文振、前掲書、69 ページ。

- (43) 同上。
- (44) 鄭永年『未竟的變革』浙江人民出版社、2011 年、6 ページ。
- (45) 余華『我們生活在巨大的差距里』北京十月文芸出版集團、2015 年、14 ページ。
- (46) 見田宗介『社会学入門——人間と社会の未来』岩波新書、2006 年。見田宗介『まなざしの地獄——尽きなく生きることの社会学』河出書房新社、2011 年。
- (47) 張承志『老橋』北京十月文芸出版社、1984 年、305 ページ。
- (48) 副田義也「現代における人間」北川隆吉編『講座現代社会学 1——社会学方法論』青木書店、1956 年、133 ページ。
- (49) 鍾家新『消費の動態と家族の変動——中国民衆の欲望のゆくえ』新曜社、1999 年、193 ページ。
- (50) 同上、193～194 ページ。
- (51) 謝志強「宏觀環境对家族關係變遷的觀察」『人民論壇』2013 年第 22 号。

参考文献

中国語文献

- 艾略特『家庭——変革還是継続』中国人民大学出版社、1992 年。
- 安東尼・吉登斯『社会学』（第四版）北京大学出版社、2006 年。
- 包蕾萍・陳建強「中国＜独生父母＞婚育模式初探——以上海為例」『人口研究』2005 年第 29 卷第 4 号。
- 包蕾萍『独生子女神話——習俗、制度和集体心理』上海人民出版社、2012 年。
- 彼得・布劳著、李国武訳『社会生活中的交換与權力』商務印書館、2012 年。
- 辺燕傑「独生子女家庭の増長与未来老年人的家庭生活問題」『天津社会科学』1985 年第 5 号。
- 陳功『家庭革命』中国社会科学出版社、2000 年。
- 陳建強・陸林森『独生父母——中国第一代独生父母調查』上海辞書出版社、2006 年。
- 陳文联・蒋太葵「文化大革命期间中国人口政策演變探討」『中南大学学报社会科学版』2001 年第 1 号。
- 陳一心・王玲「独生子女家庭の親子關係」『上海教育科研』2006 年第 12 号。
- 陳煦「由女兒伝宗接代和繼承財產的調查研究」『西北人口』1987 年第 4 号。
- 丁文・徐太玲『当代中国家庭巨變』山東大学出版社、2001 年。
- 杜正勝『中国式家庭与社会』黄山書社、2011 年。
- 恩格斯『家庭、私有制和国家的起源』人民出版社、1999 年。
- 法規応用研究中心編『婚姻家庭法一本通』（第三版）中国法制出版社、2011 年。
- 凡勃倫著、蔡受百訳『有閑階級論』商務印書館、2013 年。
- 範丹妮主編『中国独生子女研究』華東師範大学出版社、1996 年。
- 範中傑「論轉型時期親子關係的變化」『四川師範大学学报（社会科学版）』2001 年第 28 卷第 4 号。
- 費孝通「論中国家庭結構的變動」『費孝通社会学文集』天津人民出版社、1985 年。
- 費孝通『江村經濟』上海世紀出版集团、2012 年。
- 費孝通『郷土中国——生育制度』北京大学出版社、2013 年。

風笑天『独生子女——他们的家庭、教育和未来』社会科学文献出版社、1992 年。

風笑天「共処与分離——城市独生子女家庭養老形式調查」『人口与經濟』1993 年第 2 号。

風笑天「論城市独生子女家庭の社会特征」『社会学研究』1999 年第 1 号。

風笑天『中国独生子女——從「小皇帝」到「新公民」』知識出版社、2004 年。

風笑天「從＜依賴養老＞到＜獨立養老＞——独生子女家庭老年觀念的重要轉變」『河北學刊』2006 年第 3 号。

風笑天「在職青年与父母的關係——独生子女与非独生子女的比較及相關因素分析」『江蘇社会科学』2007 年第 5 号。

風笑天「独生子女父母的空巢期——何時開始？会有多長？」『社会科学』2009 年第 1 号。

風笑天「生育二胎——＜双独夫婦＞的意願及相關因素分析」『社会科学』2010 年第 5 号。

風笑天『中国独生子女問題研究』經濟科学出版社、2013 年。

馮文「中国的計画生育生活与都市独生女的賦權」『广西民族大学學報(哲学社会科学版)』2009 年第 6 号。

高健生・劉寧「論我国家庭親子關係演變和趨勢」『東岳論壇』1987 年第 5 号。

中国共产党党中央「關於控制我国人口增長問題致全体共產黨員共青团員的公開信」『人民日報』1980 年 9 月 26 日。

国家人口和計画生育委員會編『基本国策 造福於民——党的十六大以来人口計生工作的發展進程 (2002～2012)』人民出版社、2012 年。

顧準『顧準文集』中国市場出版社、2012 年。

郝克明『中国独生子女群体实证研究』廣東省出版社、2011 年。

郝洪「承歡膝下是我们共有的福利」『人民日報』2013 年 7 月 4 日。

郝大海「独立与依賴——新時期親子關係的變動」『中国教育報』2012 年 4 月 26 日。

郝玉章・風笑天「親子關係对独生子女成長的影響」『華中科技大学學報 (人文社会科学版)』1999 年第 5 号。

郝玉章「独生子女結婚成家過程中父母的参与和影響」『广西民族大学學報 (哲学社会科学版)』2011 年第 33 卷第 5 号。

韓俊「北京市独生子女生育意願調查显示——独生子女偏好下一代是女孩」『中国人口報』2003 年 9 月 8 日。

弘浩「關注独生子女与父母同住共住」『上海房產』2012 年 3 月。

- 黃宏「50年代以來我國解決人口問題得失的再評價——兼評一種流行的人口問題歷史觀」
『中共黨史研究』2001年第2號。
- 卡爾·曼海姆著、張旅平譯『重建時代的人與社會——現代社會結構研究』詠林出版社、
2011年。
- 康嵐『反饋模式的變遷——轉型期城市親子關係研究』上海社會科學院出版社、2012年。
- 康嵐「代差與代同——新家庭主義價值的興起」『青年研究』2012年3月。
- 賴特·米爾斯著、陳強·張永強譯『社會學的想像力』三聯書店、1999年。
- 李培林編『費孝通與中國社會學』社會科學文獻出版社、2011年。
- 李斌「中國人口的经济帳」『財經國家周刊』2011年10月8日。
- 李亦園·楊國樞『中國人的性格』中國人民大學出版社、2012年。
- 李銀河「管窺中國親子關係」『百科知識』2005年第2號。
- 李銀河『社會學精要』內蒙古大學出版社、2009年。
- 李銀河『生育與村落文化』內蒙古大學出版社、2009年。
- 李銀河編『家庭與性別評論』社會科學出版社、2009年。
- 李銀河『一爺之孫——中國家庭關係個案研究』內蒙古大學出版社、2009年。
- 李銀河「家庭結構與家庭關係的變遷——基於蘭州的調查分析」『甘肅社會學』2011年第
1號。
- 李銀河『我的生命哲學』北京時代華文出版社、2013年。
- 林耀華『金翼——中國家族制度的社會學研究』生活·讀書·新知三聯書店、1989年。
- 林光江「独生子女政策與兒童觀的變遷」『慶祝黃淑娉教授從教50周年人類學理論與方法
學術研究會論文集』2000年第8號。
- 林光江「中國独生子女和兒童觀研究綜述」『學海』2003年第2號。林光江『國家·獨生
子女·兒童觀——對北京市兒童生活的調查研究』新華出版社、2009年。
- 林惠祥『文化人類學』商務印書館、2011年。
- 梁曉聲『我相信中國的未來』中國青年出版社、2014年。
- 梁啟超『梁啟超論中國文化史』商務印書館、2012年。
- 梁啟超『中國文化史』商務印書館、2012年。
- 梁中堂「試論〈公開信〉在〈一胎化〉向現行生育政策轉變過程中的作用和地位」『人口
與發展』2010年第5號。
- 梁景和『現代中國社會文化嬗變研究（1919～1949）——以婚姻·家庭·婦女·性倫·娛

- 樂為中心』社会科学文献出版社、2013 年。
- 梁建章・李建新『中国人太多了吗』社会科学文献出版社、2012 年。
- 劉汶蓉「家庭價值的變遷和延續——來自四個維度的經驗証摺」『社会科学』2011 年第 10 号。
- 劉艷欣・葛洪「独生子女父母養老——一個值得關注和研究的課題」『社保論壇』2003 年。
- 陸士楨『社会變動中的中国少年——独生子女社会適應性研究』中国少年兒童出版社、1996 年。
- 陸影・陳岱雲「城市独生子女父母養老保障情況調查及分析——以濟南市為例」『暨南職業學院學報』2008 年第 6 号。
- 陸遇編『新中国人口五十年』中国人口出版社、2002 年。
- 羅威廉著、李里峰譯『紅雨——一個中国東域七個世紀的暴力史』中国人民大学出版社、2015 年。
- 馬克思・恩格斯『馬克斯恩格斯全集』（第四卷）、人民出版社、1995 年。
- 馬寅初『新人口論』新華出版社、2014 年。
- 馬天寅『陳云与馬寅初』華文出版社、2012 年。
- 馬春華『轉型期中国城市家庭變遷——基於五城市的調查』社会科学文献出版社、2013 年。
- 馬春華・李銀河・唐灿・王震宇・石金群『轉型期中国城市家庭變遷——基於五城市的調查』社会科学文献出版社、2013 年。
- 馬小紅「北京城市独生子女生育意願研究」『北京社会科学』2008 年第 1 号。
- 潘允康『家庭社会学』重慶出版社、1986 年。
- 潘允康『社会變遷中的家庭——家庭社会学』天津社会科学出版社、2002 年。
- 潘鳴嘯著、歐陽因譯『失落的一代——中国的上山下鄉運動 1968～1980』中国大百科全书出版社、2014 年。
- 潘維『中国模式——解讀人民共和国 60 年』中央編譯出版社、2009 年。
- 日本放送協會特別節目錄制組編、高培明譯『無緣社会』上海譯文出版社、2014 年。
- 上海社会科学院家庭研究中心編『中国家庭研究』上海社会科学出版社、2012 年。
- 石金群『独立与依賴——轉型期的中国城市家庭代際關係』社会科学文献出版社、2015 年。

- 石燕『独生子女家庭關係及其影響因素研究——以鎮江市為例』江蘇大學出版社、2011年。
- 沙蓮香『中國民族性（一）——一百五十年中外「中國人像」』中國人民大學出版社、2012年。
- 沙蓮香『中國民族性（二）——1989年代中國人的「自我認識」』中國人民大學出版社、2012年。
- 沙蓮香『中國民族性（三）——民族性三十年變遷』中國人民大學出版社、2012年。
- 史蒂夫·布魯斯著、蔣虹譯『社會學的意識』訳林出版社、2015年。
- 宋健主編『中國人口問題與人口學發展』社會科學文獻出版社、2012年。
- 山東省省情資料庫『安徽省人口概述』（第五卷）、www.sdwqw.cn。
- 上野千鶴子著、吳咏梅譯『近代家庭的形成和終結』商務印書館、2004年。
- 沈崇麟·楊善華『當代中國城市家庭研究』中國社會科學出版社、1995年。
- 孫沐寒『中國計生生育史』北方婦女兒童出版社、1990年。
- 上海社會科學院家庭研究中心編『中國家庭研究』（第六卷）上海社會科學出版社、2012年。
- 蘇頌興「上海独生子女的社會適應問題」『學術季刊』1997年第2號。
- 上海社會科學院家庭研究中心編『中國家庭研究』（第七卷）上海社會科學出版社、2012年。
- 田豐『當代中國家庭生命週期』社會科學文獻出版社、2011年。
- 托尼·法爾博著、王亜楠譯『独生子女與独生子女家庭』雲南教育出版社、2001年。
- 蘇友真『未適的新土』外語教學與研究出版社、2012年。
- 王均·丁丁「發展中國家的人口政策」『國外科術動態』1995年第4號。
- 王俊祥「孩子的價值及對孩子數量、素質和性別的選擇」『中國人口科學』1990年第2號。
- 王銘銘『社會人類學與中國研究』生活·讀書·新知三聯書店、1997年。
- 王躍生「中國家庭代際關係的理論分析」『人口研究』2008年第4號。
- 王躍生『中國當代家庭結構變動分析』中國社會科學出版社、2009年。
- 王樹新「第一代独生子女父母養老擔心度研究」『人口研究』2007年第4號。
- 王立柱·張偉『馬克思主義箴言 我從哪里來——家庭』天津人民出版社、2012年。
- 王広州·胡耀玲「我國生育政策的歷史沿革及發展方向」『中國黨政幹部論壇』2012年第11號。

王慶榮「独生子女父母養老存在的問題及解決的思路——基於上海市独生子女父母的調查」『法制與社會』2007年4月。

文木『中國人研究——中國家庭、社會與國家角色的歷史分析』首都師範大學出版社、2009年。

威廉·古德著、魏章玲譯『家庭社會學』桂冠圖書公司、1988年。

維維安娜·澤爾澤、王水雄譯『給無價的孩子定價——變遷中的兒童社會價值』格致出版社、2008年。

魏莉莉『「90後」與未來國家競爭力』上海人民出版社、2013年。

西閃「一個孩子價值幾何」『大家』2014年9月24日。

徐安琪·劉汶蓉·張亮·薛亞利『轉型期的中國家庭價值觀研究』上海社會科學院出版社、2013年。

徐安琪「對家庭結構的社會學與人口學的考察」『浙江學刊』1995年第1號。

徐安琪「家庭結構與代際關係研究——以上海為例的實證分析」『江蘇社會學』2001年、第2期。

謝志強·王劍瑩「宏觀環境對家庭關係變遷的影響觀察」『人民論壇』2013年第23號。

亞伯拉罕·馬斯洛『動機與人格』（第三版）中國人民大學出版社、2014年。

陽翼『中國獨生代消費行為研究』暨南大學出版社、2008年。

楊敏「独生子女政策出台始末」『中國新聞周刊』2010年第29號。

楊明沢「關於独生子女家長對其子女期望的社會心理分析」『西北人口』1989年第3號。

楊曉昇『失獨——中國家庭之痛』太白文芸出版社、2013年。

楊書章·郭震威「中國独生子女現狀及其對未來人口發展的影響」『市場與人口分析』2000年第4號。

楊國樞『中國人蛻變』中國人民大學出版社、2013年。

楊國樞編『中國人的價值觀』中國人民大學出版社、2013年。

楊雄『兒童福利政策』上海人民出版社、2012年。

伊萬·塞勒尼著、呂鵬譯『新古典社會學的想像力』社會科學文獻出版社、2010年。

於長洪·楊步月·孫曉勝「中國第一代獨苗——已開始生兒育女」『新華每日電訊』2004年12月26日。

於秀『你們到底要什麼——中國第一代独生子女婚戀調查』知識出版社、2007年。

余華『我們生活在巨大的差距里』北京十月文芸出版集團、2015年。

- 余世存『家世——百年中国家族興衰』北京時代華文出版社、2009 年。
- 王俊祥「孩子的価値对孩子数量、素質和性別の選択」『中国人口科学』1990 年第 2 号。
- 葉文振『孩子需求論——中国孩子的成本和効用』復旦大学出版社、1998 年。
- 葉光輝・楊国枢『中国人的孝道』重慶大学出版社、2009 年。
- 葉萱『紙婚』国際文化出版社、2010 年。
- 趙莉莉「我国城市第一代独生子女父母的生命歷程——從中年空巢家庭的出現談起」『青年研究』2006 年第 6 号。
- 張承志『老橋』北京十月文芸出版社、1984 年。
- 張懷承『中国的家庭与倫理』中国人民大学出版社、1993 年。
- 張学軍「独生子女家庭關係の新特点」『社会』1999 年第 5 号。
- 張偉『人口新論』社会科学文献出版社、2012 年。
- 鄭永年『未竟的変革』浙江人民出版社、2011 年。
- 鄭丹丹『中国城市家庭夫婦権力研究』華中科技大学出版社、2004 年。
- 鄭希付「親子關係与子女行為異常」『中国心理衛生雜誌』1996 年第 6 号。
- 鍾曉惠・何式凝「協商公親密關係——独生子女父母对家庭關係和孝道の期待」『觀察者』2014 年 2 月 20 日。
- 鍾言『愛及家庭』南京大学出版社、1998 年。
- 曾毅・顧宝昌・梁建章・郭志刚『生育政策調整与中国發展』社会科学文献出版社、2013 年。
- 諸天寅『陳雲与馬寅初』華文出版社、2012 年。
- 周錫瑞『葉——百年動荡中的一個中国家庭』山西人民出版社、2015 年。
- 中国發展報告課題組「中国發展報告 2011～2012 年——人口形勢的变化和人口政策的調整」『週末』2011 年 11 月 1 日。
- 中国發展研究基金会『人口形勢的变化和人口政策的調整』中国發展出版社、2012 年。
- 『中国計画生育全書』編輯部編『新聞媒体報道的党和国家領導人論人口与計画生育』中国人口出版社、1997 年。

日本語文献

- アリエス・フィリップ著、杉山光信・杉山恵美子訳『「子供」の誕生——アンシャン・

レジーム期の子供と家族生活』みすず書房、1980 年。

井上真理子『現代家族のアジェンダ——親子関係を考える』世界思想社、2004 年。

石川実『現代家族の社会学』有斐閣、1999 年。

瓜生武『家族関係学入門——ケースで学んだ家族のライフコース』日本評価社、2004 年。

ヴェブレン・ソースティン著、高哲男訳『有閑階級の理論』ちくま学芸文庫、2012 年。

エルダー・グレン著、本田時雄・川浦康至・伊藤裕子・池田政子・田代俊子訳『大恐慌の子どもたち——社会変動と人間発達』明石書店、1986 年。

柏木恵子『子どもという価値——少子化時代の女性の心理』中公新書、2001 年。

岸政彦『街の人生』勁草書房、2014 年。

斉藤学『現代の親子関係——家族の闇をさぐる』小学館、2001 年。

清水克雄『ゆらぎ社会の構図』TBS ブリタニカ、1986 年。

島泰三『孫の力』中公新書、2010 年。

鍾家新『日本型福祉国家の形成と「十五年戦争」』ミネルヴァ書房、1998 年。

鍾家新『中国民衆の欲望のゆくえ——消費の動態と家族の変動』新曜社、1999 年。

千田有紀『日本型近代家族——どこから来てどこへ行くのか』勁草書房、2013 年。

副田義也「現代における人間」北川隆吉編『講座現代社会学 1——社会学方法論』青木書店、1956 年。

武川正吾『福祉社会の価値意識——社会政策と社会意識の計量分析』東京大学出版会、2006 年。

土居健郎『甘えの構想』弘文堂、2014 年。

トッド・エマニュエル著、荻野文隆訳『世界の多様性』藤原書店、2008 年。

日本放送協会放送世論調査所編『日本の子どもたち——生活と意識』日本放送出版協会、1980 年。

信田さよ子『アディクションアプローチ——もうひとつの家族援助論』医学書院、1999 年。

長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学』有斐閣、2011 年。

濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘編『社会学小辞書』（増補版）有斐閣、1982 年。

ビーティ・メロディ著、村山久美子訳『共依存症いつも他人に振りまわされる人たち』講談社、1999 年。

福武直・松原治郎編著『社会調査法』有斐閣、1968 年。

馮文猛『中国の人口移動と社会的現実』東信堂、2009 年。

ベルスキー・ケリー著、安次嶺佳子訳『子どもをもつ夫婦に何が起こるか?』草思社、1994 年。

本田和子『変貌する子ども世界——子どもパワーの光と影』中公新書、2001 年。

見田宗介『まなざしの地獄-尽きなく生きることの社会学』河出書房新社、2011 年。

見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂、1987 年。

森岡清美・望月嵩『新家庭社会学』培風館、2011 年。

森岡清美『現代家族のライフサイクル』培風館、1977 年。

リースマン・デイヴィッド著、加藤秀俊訳『孤独な群衆』(上) みすず書房、2013 年。

リースマン・デイヴィッド著、加藤秀俊訳『孤独な群衆』(下) みすず書房、2013 年。

山際寿一『家族の起源——父性の登場』東京大学出版会、1994 年。

若林敬子編著、筒井紀美訳『中国人口問題のいま——中国人研究者の視点から』ミネルヴァ書房、2006 年。

若林敬子『日本の人口問題と社会的現実』東京農工大学出版社、2009 年。

若林敬子・聶海松『中国人口問題の年譜と統計——1949～2012 年』御茶ノ水書房、2012 年。

英語文献

Falbo, T. and D.L. Poston, 1986, *A Quantitative Review of the Only Child Literature: Research Evidence and Theory Development*, Washington: Psychological Bulletin.

Falbo, T. and D.L. Poston, 1993, *The Academic, Personality, and Physical Outcomes of Only Children in China*, Hoboken: Child Development.

Giddens, A., 2006, *Sociology*, Bristol: Policy Press.

G.H. Elder, Jr., 1976, *Children of the Great Depression: Social Change in Life Experience*, Oxford: Oxford University Press.

Polit, D., 1982, *Effects of Family Size: A Quantitative Review. Journal of Marriage and Family*, 49 : 309-325.

Veblen, T., 1924, *Theory of the Leisure Class*, Dover: Dover Publications.

付録 主な調査対象の概要

	調査対象	性別	年齢	学歴	職業	配偶者の有無	子どもの有無	収入（月額）と住宅	その他
1	L・J	女性	32	修士	学生	有	有。3歳の息子1人。	1万円（日本円で換算すると1元は約20円である。以下は同様である。）100平方メートルの新婚用住宅を主人の両親からもらった。結婚後L・Jと主人は新しい住宅を購入した。	海外で留学している。主人と息子は調査地にいる。
2	L・Jの母 (R・P)	女性	60	高校	元工場労働者	有	有。32歳の娘1人。	2500元。住宅二つもっている。一つ目は125平方メートルであり、二つ目は100平方メートルである。	レイオフのため、R・Pは3年間に収入がなかった。R・Pの主人は給料がよ

									り高い。
3	L・Y	男性	37	短期 大学	私営 会社 の社 員	有	有。1歳 の息子 1人。	3000 元。両親か ら 60 平方メー トルの住宅を もらえた。	L・Yは小さ い頃から 母に溺愛 された。2 年前、L・Y の母は癌 で亡くな った。
4	L・Y の父 (G・K)	男性	63	中学	研究 所の 運転 手	有	有。37 歳の息 子1人。	年金は 4000 元 である。退職し てから、G・K は修理した中 古の雑貨を売 り、毎月の収入 は 1500 元であ る。50 平方メー トルの住宅を もっている。	L・Yは田舎 の出身で あり、退役 の軍人で ある。
5	N・S	男性	31	大学	国有 会社 の社 員	有	有。6月 の娘 1 人。	7,000 元。150 平方メートル の住宅を二つ もっている。両 方とも親から もらったもの である。	日本で留 学した経 験がもっ ている。3 年前は離 婚し、その 後再婚し

									た。
6	N・S の母	女性	58	高校	元工 場労 働者	有	有。31 歳の息 子1人。	5000 元。150 平 方メートルの 住宅をもっ ている。	N・S の主人 は会社 の副社長 である。
7	T・C	女性	33	大学	記者	無	無	3000 元。住宅を もってない。	未婚であ るため、今 まで両親 と一緒に 住んでい る。
8	T・C の母	女性	60	短期 大学	工場 労働 者	有	有。33 歳の娘 1人。	5000 元。100 平 方メートルの 住宅をもっ ている。主人はも と大学の教授 であり、現在夫 婦2人の年金 は約12000 元で ある。	未婚の娘 と一緒に 住んでい る。犬2匹 を飼って いる。
9	T・X	男性	33	修士	国有 企業 の中 級管 理者	有	有。3 歳 の息子 1人。	9000 元。100 平 方メートルの 新婚用住宅を 両親からもら った。結婚後 TX は妻と一緒に	

								は新しい住宅を購入した。新住宅は125平方メートルである。	
10	T・X の父	男性	61	短期 大学	エンジニア	有	33 歳の 息子 1 人。	6000 元。125 平方メートルの住宅をもっている。	五年前に腎不全と診断され、これまでに血液の透析で生きてきた。
11	N・P	男性	30	短期 大学	工場 労働者	無	無	7000 元。70 平方メートルの住宅をもっている。親からもらったものである。	
12	N・P の母	女性	57	高校	元工 場労働者	有	有。30 歳の息子1人。	3000 元。150 平方メートルの住宅をもっている。	
13	F・Y	男性	34	博士	大学の教員	有	無	6000 元。親の支持で100平方メートルの住宅をもっている。	妻は公務員である。

14	F・Y の母	女性	58	中学 校	元国 有企 業の 社員	有	有。34 歳の一 人っ子 をもっ てい る。	3000 元。120 平 方メートルの 住宅をもっ ている。	退職後暇 な時間が 多くある ため、毎日 麻雀をし ている。
15	X・N	男性	34	修士	短期 大学	有	無	10,000 元。親の 支持で100平方 メートルの住 宅を購入した。	外国で留 学した経 験がある。 X・Nの父は 大学の学 長である。 卒業後、父 の助けて 研究機関 に入った。 研究に興 味をもっ てないた め、転職し た。 現在上海 の会社で 仕事して いる。商売 の仕事し

									ている。妻は今日本で仕事している。
16	A・G	男性	35	大学	国有企業の社員	有	有。7歳の娘1人と1歳の娘1人。	3000 元。親の支持で100平方メートルの住宅をもっている。	5 歳 の 際 A・G の父は亡くなった。母は1人で彼を扶養し、再婚しなかった。A・Gは給料が低いと思う。仕事の以外、小規模の雑貨店を営んでいる。
17	L・C	女性	32	博士	海外の会社の社員	有	有	20,000 元。住宅をもっていない。	
18	A・X	女性	58	短期大学	元国有企	有	有。30歳の息	2200 元。70 平方メートルの	10 何年前に離婚。1

					業の 工場 労働 者		子1人。	住宅をもって いる。	人で息子 を育てき た。レイオ フのため、 5年間に収 入はなか った。その 期 間 は 息 子 と 「 低 保 」 （ 生 活 保 護 制 度 ） で 生 活 し て いた。
19	Y・J	女性	61	大学	研究 院の 高級 研究 者	有	有。30 歳 の 娘 1人。	9000 元。150 平 方メートルの 住宅をもって いる。2年前娘 に100平方メー トルの住宅を 買ってあげた。	
20	Y・Z	女性	60	高校	元国 有企 業の 工場 労働 者	有	有。34 歳 の 息 子1人。	2500 元。夫婦両 方ともレイオ フされた工場 労働者であり、 現在既に退職 した。毎月二人	Y・Z 夫婦は 30,000 元 で 調 査 地 域 から 40 マイル の 田 舎 で 安

								の退職金は5000元。Y・Zは以前住宅一つを持ち、息子に新しい住宅が買えないため、YZは住宅を息子たちに住ませた。	い家を買 い、田舎の 家に住ん でいる。今 年Y・Zは 癌で亡く なった。
21	Z・Q	男性	33	短期 大学	国有 企業 の社 員	無	有。7 歳の娘 1人。	10000元。120 平方メートル の住宅をもっ ている。	5年前離 婚。
22	F・L	女性	29	大学	私営 会社 の社 員	有	有。3歳 の娘1 人。	8000元。100平 方メートルの 住宅をもっ ている。	
23	C・Y	女性	33	高校	主婦	有	7歳の 息子1 人と2 歳の息 子1人。	収入なし。住宅 もなし。親と一 緒に住んでい る。	C・Yの両親 は両方ともレイ オフされた。
24	J・J	女性	32	修士	私営 会社 の社 員	有	有。3歳 の息子 1人と1 歳の息	15,000元。130 平方メートル の住宅をもっ ている。	J・Jの主人 は他の町の公務 員である。現

							子1人。		在夫婦2人は別居している。子どもたちはJ・と生活している。三年以内、J・Jは主人の町に引っ越しする予定がある。
25	Z・M	女性	33	修士	外資企業の社員	有	有。5歳の息子1人。	15,000 元。130 平方メートルの住宅を購入した。	
26	N・K	男性	33	大学	自営者	有	有。5歳の息子1人。	20,000 元。130 平方メートルの住宅を購入した。	
27	Q・L	女性	33	大学	ピアノ教師	有	有。3歳の息子1人。	5000 元。120 平方メートルの住宅をもっている。	主人も一人っ子である。住宅はQ・Lの親からも

									らった。
28	W・R	女性	33	大学	国有 企業 の社 員	有	有。2 歳 の息子 2 人。	8000 元。120 平 方メートルの 住宅を二つも っている。	不妊であ ったため、 不妊治療 で子ども 2 人ができ た。
29	X・Q	女性	33	大学	公務 員	有	有。1 歳 の娘 1 人。	4000 元。100 平 方メートルの 住宅をもっ ている。	
30	Z・R	女性	32	修士	私営 会社 の社 員	無	無	20,000 元。親か ら130平方メー トルの住宅を もらった。	3 年前離婚 したため、 現在1人暮 らし。
31	D・W	男性	35	高校	自営 者	無	無	2000 元。住宅を もってなく、母 と一緒に住ん でいる。	25 年前脳 がんで手 術をうけ た。十年前 D・Wの父は 亡くなっ た。
32	M・Y	男性	33	大学	銀行 の職 員	有	有。2 歳 の娘 1 人。	15,000 元。120 平方メートル の住宅をもっ ている。	妻も銀行 の職員で ある。

33	Y・H	男性	33	大学	銀行 の支 店の 店長	有	有。2 歳 の娘 1 人。	30000 元。150 平方メートル の住宅をもっ ている。	Y・H の父は 310 年前に 亡くなっ た。
34	K・Y	男性	33	大学	国有 企業 の社 員	有	有。3 歳 の娘 1 人。	2000 元。100 平 方メートルの 住宅をもっ ている。	
35	D・J	男性	33	大学	国有 企業 の社 員	有	無	4000 元。住宅は 親からもらっ た。	妻は主婦 である。
36	Z・F	男性	35	短期 大学	私営 会社 の社 員	有	有。6 歳 の娘 1 人。	20,000 元。住宅 二つをもっ ている。	50 万元の 乗用車をも っている。
37	D・B	男性	32	修士	エン ジニ ア	有	有。5 歳 の息子 1 人と 1 歳の娘 1 人。	20,000 元。上海 で 100 平方メー トルの住宅を もっている。	現在アメ リカでソ フトウェ アに関す る仕事を している。

38	C・Q	男性	33	大学	私営 会社 の社 員	無	無	5000 元。親から 200 平方メート ルの住宅をも らった。	大 学 院 生 で あ っ た と き、C・Q の 生 活 費 が 親 か ら も ら い、そ の 金 額 は 毎 月 4000 元 を 超 え て い る。 C・Q の 両 親 は 一 般 的 な サ ラ リ ー マ ン な の で、4000 元 は 家 族 の 所 得 の 半 分 を 占 め て い る。 現 在 北 京 で 仕 事 し て い る。
39	C・E	女性	36	高校	工場 労働 者	有	有。3 歳 の 息 子 を も つ て い	C・E 夫婦は毎月 部屋のローン と手伝いさん の給料を除き、	夫 婦 両 方 の 親 の 体 は よ く な い た め、子

							る。	1000 元だけの貯金しかできない。	どもを世話することはできない。C・Eは子どもを手伝いさんに預けて育てなければならない。部屋のローンもあるため、息子が生まれる前に生活がぎりぎりであつたが、現在生活はますます難しくなった。
--	--	--	--	--	--	--	----	--------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------